
神獸居候奮闘記

禍津

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神獣居候奮闘記

【コード】

N2063C

【作者名】

禍津

【あらすじ】

ある日家に帰ると家の前には自分は神獣だと名乗る女の子が倒れていて、そのまま成り行きで居候させてやることに・・・。

第1話 出会いとご飯(前書き)

小説を書くのは初めてなので下手かもしれないけど読んでやってください。

第1話 出会いとご飯

「ユウ〜ご飯まだ〜？」

朝っぱらからオクターブの高い声で朝食の催促が飛んでくる。

「すぐできるからもう少し待ってる。と言つか少しは静かにできんのかお前は」

「ユウ知ってる？日本には腹が減っては戦はできぬって言っすばらしい諺があるんだよ？」

「戦なんてしないだろ！」

そんなことをゴロゴロしながら言っているコイツは青龍。
かくいう俺は月代悠って名前だ。

俺とコイツと出会ったのは十二時間くらい前のこと…

.....

『今日の夕食は何にすっかな〜』そんなことを考えつついつもと同じ帰り道を歩く。

「にしても買いすぎたか？」

自分の両手を見て呟く。

今日はスーパ―で大安売りがあったのだ。

「まあいいか」

そうしているうちにアパートが見えてきた。

自分の部屋に入ろうとする…が入れなかった。

なぜなら……部屋の前に着物姿の女の子が倒れていたからだ。

「……………誰？」

素朴な疑問を口にする。

アヤシイぞ。アヤシすぎる。どうしたものかこの状況。

とそこで女の子が口を開いた。

「……………お腹減った。ご飯ちょうだい」

第一声がそれかよっ！とツッコミたくなる衝動を押さえ冷静になる。

「……………行き倒れ？」

「うん、そんな感じ」

「……………」

心の中で『関わるな』と言う自分と、『助けてやれ』と言う自分が葛藤すること約数十秒。結局『助けてやれ』と言う自分が勝った。

「しょうがない、メシ食わせてやるよ」

とは言ったもののまだ何も準備出来ていない。

「俺は月代悠だ。で、君はなんて名前で何者なんだ？」

女の子の整った顔立ちと、背中くらいまである黒髪に見惚れながら、必要最低限の情報を得る。

「うん？私は、青龍って名前で神獣だよ」

「はい？」

ごめん、なんか知らん単語が出てきた。

「神獣って何？」

「えっ！？知らないの？日本で言うところと神獣ってゆーのは、私とか朱雀とかだよ。まあ簡単に言うと伝説上の生きものってところかな」

なんか言うことがぶっ飛びすぎていて頭が混乱してきた。……が次の瞬間理解した。

「そうか、君は電波少女だったんだな」

「ああっ、何それっ！絶対信じてないね？」

生きる伝説電波少女。うん我ながらナイスなネーミングだ。

「これは証拠を見せないと信じてもらえなさそうだね」

そう言うと彼女の手に青龍刀が現われた。

「手品が出来るのか、スゴいなお前」

「まだ信じないの！？じゃあこの切れ味を見て驚かないでね。……
すう……ふっ」

そうやって彼女はコップに向かって、刀を一振り。
コップは音もなく真っ二つになっていた。

「なっ………」

さっきまで余裕綽々だった俺もさすがに声が出ない。俺が何も言わないので、まだ信じていないと思ったのか、青龍は手当たりしだいに家具を一刀両断しようとしている。

「ちょっと待ったー信じるからそれ以上部屋を破壊しないでくれー」

「やっと信じてくれた？」

と青龍は満足そうにどこかに青龍刀をしまう。

ときどき作業が途切れてしまったが、無事に夕食を作り終えた。

・
・
・

青龍は夕食を食べ終わるとすぐに寝てしまった。起こそうとも思っただが、青龍刀のことを思い出して、結局『まあ一晩くらい泊めてやってもいいか。むしろ起こしたら殺される』という結論に至った。

.....

そして朝食を食べている今に至るわけだ。

「なあ青龍、お前どこか行くアテあるのか？」

「ここに居候させてもらいたいけど……ダメ？」

うっ、そんな子犬みたいな目見られたら断れないじゃないか。

「まあ別にいいけど……」

「やったーありがとー」

とそこで気付いた、なんだか俺の（主におかず）が減ってないか？

「っておい！それ俺のだろ」

青龍がパクパクと俺の朝食を食べていく。

「まあまあ、男は堅いこと言っちゃいけないよ」

くっ、この食いしん坊め。

「あっ今、食いしん坊とか思ったでしょ？」

「げ……なぜそれを（汗）」

「女のカンは鋭いんだよ？ふう、ご馳走様」

いつの間にか朝食が無くなっていた。

……………マジで？

第1話 出会いとご飯(後書き)

やっぱり小説を書くのは難しいです。感想などあったら言ってください。

第2話 勘違いな幼なじみとクラスメイト（前書き）

やっと第2話です。書くのにやたら時間がかかります。

感想、評価などありましたらお願いします。

第2話 勘違いな幼なじみとクラスメイト

朝食の片付けを終えて学校に行く準備をする。

「ユウ学校行くの？つまんな〜い」

朝食を食べ終わってからずっとこの調子だ。なんでも一日中家に一人で居るのは嫌なんだそうだ。

「じゃあ商店街とか、デパートとか行けば暇つぶしになるんじゃないか？服も買わなくちゃいけないだろ？」

そうなのだ青龍はなぜか着物を着ている。というか洋服を持っていない。

「わかった〜今日は洋服買うことにするよ」

そうしてお金を渡した後、家を出発する。

・
・
・
学校は家から歩いて20分くらいの所ある。とそこで気付いた。

「あいつ買い物出来るのか？」

急に不安になってきた。何せ行き倒れするヤツだからな。

「でもまあなんとかなるだろ」

そう結論を出してまた歩き始める。とそこで後ろから声がかかった。

「あ、ユウくんか。おはよー」

「おはよう、華凜」

声をかけてきたのは、幼なじみの朝宮華凜「アサミヤカリン」だ。ショートカットが似合う美少女という言葉がピッタリの幼なじみだ。他愛もない会話をしていると、いつの間にか学校に着いていた。ちなみに華凜とは同じクラスなので一緒に教室に入る。

「おつす、悠、華凜ちゃん」

「おはよう。和馬」

「おはよー、和馬くん」

今挨拶してきたのは、クラスメイトの間塚和馬「マツカカズマ」。顔はそこそこカッコイイが、バカなので女の子にモテないという残念な奴である。

「悠、今日も華凜ちゃんと一緒に登校か」

ゾンビみたいな声を出してそんなことを言ってくる。

「幼なじみだから一緒に登校するだろ。しかも同じクラスだし」

「いゝよな、悠は可愛い幼なじみが居て、なんで悠だけ………ブ

ツブシ

くっ、人の話を聞いてないし、なんだか今イラッとしたぞ。ここは
ーっ

ドスッ

「ぐぶっ……………」

気絶させることにした。

「ふう〜やっと静かになったか」

「ね、ねえあのままでいいの？」

華凜は結構動揺しているが俺はいたって冷静。

「いいんじゃない？起すところさーいし」

キーンコーン

チャイムが鳴ると同時に担任が入ってきた。

………昼休み

「悠っ、よくも気絶させてくれたな。おかげで購買で昼メシ買い損
ねたじゃないか！」

「そんなことは知らん」

だいたい、いつもお前が騒ぐのがいけないんだ。そもそも普通、昼休みまで気絶してるヤツが居るか？

「そんなハズはない。しつかり目撃者も居るんだぞつ。なあみんな
！！」

クラスの皆に呼び掛ける和馬。

……………シーン。

誰も反応しなかった。まあ反応した者もいるが、『なんだ間塚か。いつものことじゃん』みたいな顔をしている。
うん、見事なまでの静寂だ。

「な？何もしてないだろ？気のせいだ」

「うーん、なんか騙されてる気が……いや、やっぱり気のせいだった
みたいだ」

「そうだ気のせいだ」

切り替え早っ！しかし単純バカで助かる。まあバレた所でどうにかなるわけじゃないけど。

「ところで悠、今日の帰り遊ぼっぜ」

「悪い、今日はちょっと用事があるんだ」

青龍がちゃんとやってるか心配だ。その他にも色々心配なことがある。

そんなわけで放課後：

「あーやっと終わった」

おっとまったりしてる場合じゃなかった、さっさと家に帰らなければ。

そこで華凜から声がかかった。

「ユウくん一緒に帰ろー」

「いいぞ」

で華凜と一緒に帰ることになったが……周り視線が痛い。

「ユウくん？どうかした？」

「ん、なんでもない」

その後も会話を続けるが、華凜は気付かないのだろうか、この突き刺さるような男どもの視線を。

「ユウくん、なんか変だよ？私、何かした？」

涙目になってるし、なんかモノ凄く勘違いしてらっしゃる。

「全然、何も無いぞ。華凜は可愛いし、男としては嬉しいかぎりな

んだが……」

慌てて誤解を解こうとするが、

「かつ可愛いつて、ユウくん大胆なんだからっ!!」

とか言つて走り去ってしまった。

どうやら別の誤解が生まれたらしい。

「ちよつ、違つ、ああまたベクトルの違つ勘違いに……」

そして一人トボトボと家に帰る。

「ただいま」

「お帰り〜、って悠スゴく疲れてない？」

「ああ、学校で色々とあつてな」

「へえ〜学校つて楽しそうだね〜」

今の俺を見てそう言つてんのならおかしくね？めっちゃ疲れてるんだよ？

しかし反論する気にもならない。

あ、着物から洋服になつてる。

「青龍、夕食は何がいい？」

「なんでもいいよ〜。」

「そうか、じゃ適当に作るか。」

よし今日はカレーだ。って青龍は食べれんのかな？

第3話 遊びに行こう！（前）前書き

やっぱり文を書くのは難しいと思う今日この頃。
願いますm(____)m

感想、
評価お

第3話 遊びに行こう！（前）

今は午前11時を回ったところで、今日は学校が休みなのでゆっくりできると思っていたのだが、今はデパートに向かって歩いている。どうしてこういう事態になったかというところ…

.....

「ユウ、暇だよ、遊びに行こうよ」

今朝から何度この台詞を聞いたことが。

「断る、俺は休みの日くらいはまったりゆったりしたいんだ」

「休みの日くらいいいじゃん」

人の意見を完全無視ですか！。しかしここで退くわけにはいかない。

「なら今度遊びに連れてってやるから、今日はパス」

「じゃあ私は何をやればいいの？一日中暇だと死んじゃうよ？」

「大丈夫、青龍はたくましいからちょっとやさつとのことでしたばらないって」

うん、どっちも退かず進展なし。ってあれ？青龍が急に喋らなくなっただぞ？

「青龍？どうした？」

「ユウウ、女の子に向かってたくましいはないでしょ？」

キーンという音をたてて青龍刀出現。そしてにっこりと冷たい微笑み。

やばっ、こいつ本気じゃね？

「ちよっ…まつ待て俺が悪かった！だから家具の一刀両断だけはやめろっ！…って家具はダメだから俺を一刀両断するという発想はどこからっ！？」

まずい、このままじゃ俺の人生が17年で終わってしまう。

「わかった！遊びに連れてってやるからその青龍刀をしまえ！」

「ホント？」

いやいや、ここで嘘をついたら絶対死ぬって。

「ああ、本当だっ！だからそれを早くしまっんだ！」

納得したのか青龍は刀をしまう。

危ない、危ない。人生に17年で終止符を打つところだった。

「で青龍お嬢様はどちらにお行きになりたいのでしょうか？」

「今日は何処行くの?」

「いろんな所」

「じゃあ今は何処へ向かって歩いてるの?」

「とりあえずデパート」

「とりあえず遊ぶのは着いてから考えよう。」

「ねえデパートってどんなところ?」

「デパートってのはだな、簡単に言つと色々なモノが売ってあるデカイ店だ。あれ?青龍、服買いに行かなかつたっけ?」

「行ってないよ」

「でもあの時、外に行つてたよな?」

「あれはちよつと散歩に行つただけだよ」

「ならどうして洋服なんて持つてんだ?」

「1時間くらいで配達してくれる裏通販があるんだよ。まあ出来る人は限定されるけどね」

「何それ!?めっちゃ便利じゃん!というかデパート知らないやつがどうして通販なんて知ってんだ?」

「ねえねえあれがデパート？」

「そっだあれがデパートだ」

いつの間にかデパートが見えていた。

「ユウ、早く行くよっ」

そう言うと青龍は猛ダツシユ。

「ちょっと待て！子供じゃないんだから走るな！」

「ユウも一緒に走るんだよ！」

青龍は俺の手を持って再び走り出した。

うわゝ高校生にもなってデパートに向かってダツシユするとは思わなかった。しかも周り視線がめっちゃ痛い。助けてゝ。

「あははゝ」

なんか青龍はハイテンションだし、家に帰ってゝ。

「青龍、なんでそんなにテンションが高いんだよっ？」

「なんでだろ？わかんない」

わかんないって…嗚呼まだ一日は始まったばかりだ。

第4話 遊びに行こう！（中）

今は青龍と一緒にデパートに来ている。

デパートと言ってもゲームセンターから食料品店など色々な店が入っている便利な所なのだ。

そういえば米を切らしたな、後で買わなければ。

「なあ青龍、これからどうする？」

「ん〜ちょっと早いけど昼食にしない？」

うん、こいつはいつも食欲旺盛だな。

「青龍は何食べたい？ファーストフードから懐石料理までなんでもあるぞ。まあファーストフードが妥当だな」

「じゃあそれでいいよ」

よし、昼食はハンバーガーに決定！栄養偏ってるけど…

「んじゃ昼食にするか」

そしてハンバーガーを買う。

「うん、意外と美味しいね」

という言葉とともに青龍は次々とハンバーガー消費していく。

「って青龍、お前まだ食うのか……」

青龍の前のトレイにはハンバーガーの包み紙がすでに7、8個ほど乗っている。はっきり言って食べ過ぎだ。

「……………青龍」

「何？」

「太るぞ？」

「ぎくっ……………」

そのまま青龍は固まってしまった。

「い、いや大丈夫だよっ？」

「ハンバーガーはカロリー高いからな、まあ青龍がそう言っんならいいけど……」

「も、もうおなかいっぱいになったよ」

結局今食べていたハンバーガーで最後にしたらしい。

「よーし次はどこ行く？」

「じ〜〜〜ん」

さっきのことをまだ引きずっているらしい。その証拠にウエストを

しきりに気にしている。

「ま、まああのくらいじゃ大丈夫だと思うぞ？そんなに気にする」とじゃないって」

「うゝユウが気になるようなことを言うからだよ」

テンション下がってる！？どうにかして注意を他のところへ。

「よ、よしゲームセンターにでも行くか」

「うん、まあなんとか気を取り直して行くよ」

と言いつつローテンションな青龍。

やっぱり女の子はそういうのを凄く気にするんだな。うん、先に気付くべきだったと後悔。これぞ後悔先に立たずってやつだ。
で早速ゲームセンターに直行。

「へえ〜ここがゲームセンターかあ〜」

「青龍来たことなかったのか？」

「うん、人間界に来たのも久々だもん」

「人間界って神獣にもそんなところがあるのか」

それは初耳だ。なんとなく行ってみたい気もする。

「ユウ〜ここで何するの？」

「何するのって遊ぶんだよ！手始めにアレだな」

「アレって何？」

「アレってのはUFOキャッチャーだ」

ゲームセンターに来たら絶対に欠かせない俺の定番だ。

「よし、じゃんじゃん獲るぞ！」

コインを入れてハンティングを開始する。狙うのは犬のぬいぐるみだ。

ウィーン

これはいける！そう確信した次の瞬間、

ポスッ

「「……………」」

かわいい犬のぬいぐるみとは全く違う、妙に顔がリアルな猫のぬいぐるみが取れた。

「ま、まあ取れないよりはいいんじゃない？」

「そりゃそうかもしれんが…………この猫リアル過ぎて気持ち悪いぞ」

「で、でもよく見るとかわいいかもしれんよ？」

「じゃあ青龍、これやる」

青龍にリアルフェイスキャットを差し出す。

「うっ… そっそれはユウがせっかく取ったんだからユウが持つとく
ほづがいいと思うよ？」

今までのフォローが一瞬にして無意味なものに。

やっぱりこれは誰も欲しがらないらしい。というか青龍明らかに引
いてんじゃん。

「……仕方ない俺が持つとくしかないか」

家に帰ったら押し入れに封印決定だ。

そっいえば青龍の家具一式買わなくちゃいけないかったな。UFOキ
ャッチャーも猫のせいでやる気が無くなったことだし、ちよつと寄
つてくか。

「青龍、今から家具買いに行くぞ」

「え〜ユウはもう持つてるじゃん。あ、私から壊された時のため？」

「いや俺のでも予備でもなくて青龍の。服も買ったから必要だろ？」

「っーか壊す気だったのか。」

「えっいいの？私はずただの居候だよ？」

「なに遠慮してんだ？生活に必要なものは買わないといけないだろ。
それに居候つたつて最低限のことはしないとな」

「えへへ、ありがと。ユウは優しいんだね」

青龍ははにかんだ笑みで言う。

「じ、じゃあ早速行くか」

俺は赤くなった顔を誤魔化すようにリアルフェイスキャットを持ってゲームセンターを出る。

「あつ、ユウ待ってよ〜」

よし次は家具を買いに行くぞ。

あ、今日は遊ぶんじゃないかなかったっけ？まあいいか。

第5話 遊びに行こう！（後）

今は家具を買って、少し遅いおやつを食べている。ちなみに家具は後日郵送される。

「うーん、美味しいね」

「なかなかうまいな」

俺たちが居るのは、このデパートでも1、2位を争うスイーツの名店。そこでクレープを食べている。

「ユウって甘いもの大丈夫なんだ、意外だね」

「いや、こつ見えても結構な甘党だぞ」

俺は甘いものなら何でもイケる結構な甘党だ。

「ごちそうさま」

「あれ？青龍もついいの？」

まだ一人分しか食べてないぞ。って俺から言われたことまだ気にしてんのかな？

「うん、いっぱい食べるのはご飯だけだよ」

「へー俺はそつちのほうじゃ意外だ」

「ふーん、ユウは私がよっぽど大食漢に見えるらしいね」

あ、怒った。

「い、いや。ただ普通の人より食べる量がちょろっと多いかなって……おぶっ」

拳が恐ろしいスピードで飛んできた。

「ユウ、それ以上喋ると大変なことになるかもしれないよ？」

いやもう十分大変なことになってるんですけど。

「だからって何も殴ること無いだろ」

「私は何もしてないヨ」

こいつシラをきるつもりか。中国人みたいな発音になってるし。

「もういいよ……青龍、次はどこ行きたい？」

「今日は結構遊んだからもう帰ってもいいけど」

「わかった、じゃあ帰るか」

……帰る道

「なあ少し寄り道していかないか？」

「ん？いいよ」

それじゃあ、と俺のお気に入りの場所に行く。

「どこ行くの？」

「俺のお気に入りの場所」

今はもう日が傾きかけているからあの場所に着く頃にはちょうどいいな、などと思いつつ歩を進める。

「へえ〜ユウのお気に入りの場所か。楽しみだね」

「うむ、期待していいぞ」

青龍も興味深々だ。あの場所を見たら絶対驚くぞ。

「よし、着いた」

「うわあ、キレイ」

俺のお気に入りの場所、というのは町を一望できる丘のことだ。滅多に人が来ないので静か、加えて今は夕方なので夕日がとても綺麗に見える。

そこでしばらく青龍と夕日を見ていた。

「そういえばここに誰かと来るの初めてだな」

誰に話すでもなく呟く。

「じゃあ私が初めてだね」

そう言つて青龍はにっこりと微笑んだ。その時の青龍は頬が夕日で染められていてとても可愛く見えた。

「ん？どうかしたの？」

「い、いや何でもない」

不覚にも青龍に見惚れてしまっていたようだ。

「そろそろ帰るか」

「うん」

名残惜しいがお気に入りの場所から家に帰る。

「あゝ今日は楽しかったな。ユウ、また行こうね」

「ああ、また連れてってやるよ」

そんな会話をしながら歩いているが、気になることがある。

「あれ？俺ってなんか忘れてない？」

「知らないよ、私は何も聞いてないけど？」

うん、なんか釈然としないな。なんだろう？

「そんなことより、今日の晩ご飯なに？」

「また食べ物の話か。今日の晩ご飯は……あああ！！」

「なっ何？どうかしたの？」

「何を忘れてたか思い出した……」

「何を忘れたの？」

「こ、米を買うのを忘れた」

釈然としない感覚の原因はこれだった。

「今日の分があつたら問題無いんじゃない？」

「いや、青龍サン。それがですね、今日の夕食の分すら無いんですよ」

なんで敬語になってるかというと、なんか怒られそうだったからだ。

「じ、じゃあ今日は夕食抜きなの？」

予想に反して青龍はどんよりとしたオーラを放っている。

「いや、まだ手はある。というか今からスーパーで買って来る」

「あ、それじゃ私も付いてく〜」

・
・
・
スーパーで米を買って、家に帰ってきた。で、夕食を食べている。

「外食もいいけどやっぱり家のご飯が一番だな」

「そうだね。くつろげるし」

いや、お前はくつろぎ過ぎだ。

「突然だけど私も学校に行きたい」

「ダメ」

何をいきなり言いだすんだか。

「どうして?」

「いや青龍って神獣だし、それに手続きとかもあるし」

「ふーん」

どうやら諦めたらしい。

「ん〜なんかご飯食べたなら眠くなってきちゃった。とゆーことでおやすみ〜」

「ああ、おやすみ」

俺も寝ることにする。

今日は疲れたけど、たまにはこんな休日の使い方もいいかな、と落ちていく意識の中で考えていた。

第6話 復活したクラスメイト

「いってきます」

「いってらっしゃーい」

青龍に見送られて家を出る。今日は何かいいことないかな？

「ユウくん、おはよー」

「おはよう」

いつものように華凜と一緒に登校する。

「そういえば、今日から宴ちゃん来るらしいね」

「あいつ復活したのか、そりゃ良かった」

学校に着いて二人で教室に入る。

「くっ、今日も二人で登校か…男の風上にも置けないな」

そんなことを言うてくるのは例によって和馬である。うん、また気絶させられたらしいな。

ドスッ

「うっ………」

毎度毎度、世話の焼けるヤツだ。

「あゝあ、またやってるよ。まあ静かになるからいいけど」

「あっ、おはよー宴ちゃん」

「おはよう、華凜、ツッキー」

「ああ、おはよう」

今話しかけてきたのは遊沢宴「ユウザワウタゲ」、活発そうなシヨ
ートカットの女の子だ。復活したというのはこいつのことで、先日
まで風邪で欠席していたのだ。ついでに言うが趣味はギャンブルら
しい。

「間塚も懲りないよね。何度も気絶させられてんに」

「ああ、まったくだ」

しかもそれに気付かず何度も文句（愚痴？）を言ってくるのでた
ちが悪い。

「ね、ねえ何度も言ってるけどあのままでもいいの？」

何回も見ているのにまだ華凜は慣れていないようだ。

「いーんじゃないの？アタシもうるさいの嫌だし」

「俺も遊沢と同意見だ」

「じ、じゃあそつとしようかな」

結局そのまま放置らしい。友よ安らかに眠れ。

キーンコーン

「おつとチャイムだ」

チャイムが鳴ったので二人とも自分の席に戻っていった。

- - - - 昼休み

みんな昼食を食べおわってまったりしている。華凜は担任に呼び出されていない。ついでに和馬は二時間目に復活済みだ。最近、和馬の回復力が強くなったのは気のせいか？

「ねえねえツツキー、ちょっといい？」

「ん？何だ」

なんだ遊沢が話しかけてくるなんて…何かあるのか？

「この前の休日さ、何してた？」

「買い物に行ってたけど、それが何かしたか？」

バレたら面倒なので青龍のことは黙っておく。

「女の子と一緒にじゃなかった？」

「ぶっ……………」

やけにニヤニヤしているのはこのせいか。ヤバいな…よし、知らんぷりしよう。

「いや、一人だったぞ？」

「なんで疑問形なのよ、ていうかちゃんと目撃してるから嘘ついても無駄よ」

「あっ思い出した、この前の休日はずっと家に居たんだっただ」

「さっきと言ってるコトが変わってんじゃない。そのままシラをきるつもりなら皆に言っちゃおうかな？」

「やめてくれっ！」

げっ、つい反応してしまった。

「じゃあ、あの女の子とどういう関係か教えて」

くっ、そりゃ完璧な脅しじゃねえか、でも俺は負けないぞ。卑劣な脅しには屈しないのだ！

・
・
・

「……で、かくかくしかじかという訳で」

さっきの決意は何処へやら結局脅しに屈する俺。
しかし神獣のことは隠す。

「へえ〜ツツキーも苦労してんだね」

「遊沢よ、俺の苦労をわかってくれるのか」

「でも可愛かったよね、あの娘」

「うっ、それはそうなんだが……」

確かに青龍は可愛い、それは認めざるを得ない。

「しかし女の子をたらしこむとはね〜しかもあんな可愛い娘を。ツツキーなかなかやるじゃん」

「は？おまつ、さっき話したばつかなのになんでもう飛躍させてんだよっ！」

「ははっ、どっちでもいいじゃん。同棲してるのは事実だし」

「同棲じゃない！居候させてんの！」

もう遊沢には何を言っても無駄らしい。

「ユウくん、誰と同棲してるの？」

タイミング悪く華凜が帰ってきた。しかも冷たい笑みを浮かべて。

「げっ……華凛、ちっ違うんだ」

「ツッキーが女の子と同棲してるんだって」

っ……またこいつは余計なことを。

「へえ〜ユウくん、その娘とラブラブなんだ」

「違うのですよ華凛サン」

まっマズイ、誤解を解かなければ。っーかまた飛躍してるし。

「何が違うのかな？ユウくん？」

恐っ、いつもの華凛じゃない。

「何も変わらないんじゃない？」

「遊沢は黙ってる。あのですね………かくかくしかじかでして」

これまでの経緯を話す。

「ごめんユウくん、早とちりだった」

「いや、わかって貰えばいい」

誤解が解けた所で突然遊沢が、

「じゃあ今度皆で遊びに行くぞ」

「賛成」

はっ？マジっすか？華凛もノリノリだし。しかし……

「その前にもうすぐテストがあるぞ？」

「「あっ！！」」

それは寸分の狂いもない見事なハモリだった。

第6話 復活したクラスメイト（後書き）

感想、評価などよろしくお願いしますm(_____)m

第7話 ちよつとした疑問

……カリカリ……カリカリカリ

俺は今半端じゃないくらい集中している。
何でかって？そりゃもちろんテストがあるからだ。んで勉強しているわけだが青龍がうるさい。

「ユウ、何してるの？」

「ん〜？勉強、もう少しでテストがあるんだ」

「テストって学校でやるやつ？」

「ああ、テスト知ってるのか」

デパート知らなかったのにテストは知ってるのか。つーか受け答えが面倒だからテキストウに答えとこ。

「うん、必要最低限の知識は仕入れたつもりだよ。これでどこでも行けるよ」

「へえ」

「でね私も学校に行きたい」

「へえ、いいんじゃないか？」

「じゃあ学校に行ってもいいの？」

「いいと思っぞ」

「やったー」

いきなり青龍が抱きついてきた。

「なっ何だー！」

「えへへ〜」

抱きついてくるのはいいんだけど、自分が女の子ってことを理解してほしい。いい匂いはするし、腕には何か柔らかいものがあたってるし。

「青龍！少し離れる」

「うん、わかった〜」

考える、何かあったはずだ。でなければ青龍がこんなにハイテンションなはずがない。

(回想中)……………

うん、何かトンデモナイことを言ってるっばい。

「なあ青龍、さっき言ったこと撤回してい……………」

「ダメー！」

最後まで言い終わる前に拒否された。

「じ、じゃあ今日何か食べたいものないか？」

「ふっ、私は食べ物には釣られないよ」

食べ物作戦は通用しないようだ。まあ後でどうにかしよう。
気を取り直して再び勉強開始。

……カリカリ……カリカリカリ

「ねえねえそういえばユウって何で一人暮らししてるの？」

「何でって……言っただけだったか？」

「言っていないよ」

うん、じゃあ説明しよう。

「うーん、あれは高校入学前か」

………高校入学前

「合格おめでとう、悠」

「ああ、ありがとう親父」

俺は今、合格が内定して親父と話している。その時親父が突拍子もないことを言いやがった。

「言っでなかつたけど高校入学したら一人暮らしだから」

「はあ？聞いてねえよ」

「息子よ、よく話を聞くんだ、言っでいないと言っただらう」

子供かっ！と言いたくなるような返答をしてくるバカ親父。

「月代家では代々高校生の間は一人暮らしをする、という掟があつたりなかつたり」

「どつちだ！！っーか今作っただろ！？」

「どつちにしる月代家の跡取りだから社会経験を積まなくてはならん」

言い忘れたが月代家は古くからある由緒正しい家柄（かは知らんがそうらしい）だったりする。

ちなみに親父も祖父も思い付きで行動する人だったらしく、後から聞いた話だが親父の時は一年間山籠りをさせられたらしい。だから知らないが俺は武道の類をたたき込まれている。

「今言っでることも親父のことだからどうせ思い付きだろ」

「ふっ、さすが我が息子、よくわかつてるじゃないか。まあとにかく一人暮らしは決定事項だ」

「わかつたよ、一人暮らしすればいいんだろ」

「じゃあさっさと荷物まとめて今すぐ出ていけ」

さすが親父、思い立ったらすぐ行動か。やることが違うな。しかし…

「今すぐ出ていけるかつ！このバカ親父！」

- - - - -

「というわけだ」

「へえ愉快だね、ユウのお父さん」

あれを愉快といいますか青龍さん。どう考えてもあの親父はアホだろ。

あーあ親父を思い出したら勉強する気も失せてきた。暇だしこっちも質問してみるか。

「青龍は何でそんなに学校に行きたいんだ？」

「面白そうだから」

なるほど恐ろしいほど単純な理由だ。

「そんなに面白くないぞ？学校つてのは。それに入学の手続きとか面倒だし」

「それでも行ってみたいの！………それにあっちは学校なんて無いから…」

最後の辺りはボソボソっとくらいしか聞こえなかった。青龍は親に怒られる子供のように、しゅんとなっている。なんだか物凄く悪いことをした気分だ。あっち、というのは青龍たちの世界を言っているのだろう。

「……ああっ、くそっ」

「どうしたの？」

自分がこれほどお人好しだとは思わなかった

「学校に言って編入の手続きをしてやる」

「…本当？でも手続きとかが面倒だ、って」

「ああ問題無い、任せろ」

とは言ったものの正式な手続きなんてする気はない。こうなったら校長に直接言っただけで無理矢理にでも編入させる。

やっぱ俺は親父の息子だ。思い立ったらすぐ行動してしまっている。

「んじゃちよっと話つけてくる」

思い立ったらすぐ行動、ってな訳で学校に行く。

・
・
・

- - 校長室前

やって来た方がいいがこれからどうしようっ……ええい迷っていても

始まらない。こうなったらダメ元で言ってみるか。秘策もあるし。

コンコン

「はい、どうぞ」

「失礼します」

「おや月代くんじゃないか、どうしたんじゃない？」

校長はなかなかの爺さんだが現役で頑張っている。

「単刀直入に言います。裏編入させてほしい奴がいるのですが」

「すまないが正式な手続きを踏まないとダメなんじゃ」

やっぱりダメか。しょうがないここは秘策を出そう。

「これでなんとかありませんか？」

そう言っただけで校長に差し出したのは札束……ではなくガリオリ君。

何でガリオリ君かって？それはこの前校長がガリオリ君の歌を歌っていたからだ。それでピーンときた。この人はガリオリ君が好きなのだ。』と。

「つつ月代くんそれはガリオリ君じゃないか！」

「先生、ですからこれで手を打ちませんか？」

予想どおり食い付いてくる校長。

再びガリオリ君を目の前にチラつかせる。

「う〜〜〜む……………このことは他の先生方には内緒じゃよ？」

「はい！もちろん！」

「必要な書類はこちらで用意しとくからの」

「ありがとうございます」

よし青龍の入学決定！！

そうと決まれば早速青龍に報告だ。

俺は足早に家に帰る。

帰り道、テンションが上がっていた俺は思わず呟いてしまった。

「……………勝った」

第7話 ちょっとした疑問（後書き）

今回の話は……です（>―>・）

第8話 試験の前の試験

昨日は一波乱あったが今日はいたって平和だ。

青龍の学校へ行く手続きはもう少しかかるそうなので、今日もお留守番。

「ユウもなかなかやるね、校長を丸め込むなんて」

「まあな」

ちなみにガリオリ君のことは秘密だったりする。

「じゃあそろそろ行ってくる」

「いってらっしや〜い」

今日は一人で登校。華凜は何か用があって早めに登校している。しかし一人だと静かだな。

「まあ嫌いじゃないけど」

「何がじゃ?」

「うわっ」

校長からいきなり話し掛けられた。

この爺さん、神出鬼没だな。

「おはようございます」

「うむ、おはよう」

「朝っぱらからどうしたんですか」

「例の件じゃ」

例の件とは青龍の入学のことだ。

「テストが終わってから登校できるようになっているから」

「ありがとうございます」

「いやいや、これもガリ……ゴホン……可愛い生徒のためじゃ」

「いや今絶対ガリ〇リ君って言おうとしただろ！」

「は、はて？ なっ何のことじゃ？ 聞き間違えじゃないかの」

「動揺しすぎっ！」

「おお、もう職員朝礼の時間じゃ。ではワシはこれでさらば
その言葉を残して颯爽と去っていく校長。

に、逃げやがった。

「やべっもうこんな時間だ」

校長と話していたおかげでもう遅刻寸前の時間だ。走らなければ間に合わない、ということだ。ダッシュで学校へ向かう。

・
・
・

無事に学校に着いて今は昼休み。今日の昼食は購買で済ませることにする。

そうと決まれば購買へダッシュ。購買は俺の教室から右に直進して廊下を曲がった奥にある。

「良い子の皆は廊下は走ったらダメだぞ？」

よくわからない独り言を言いつつ急ブレーキをかけコーナを曲がる。

「うわっ」

「…む」

角から出てきた人とぶつかってしまった。

「すみません、大丈夫ですか？」

「……………」

相手は何も言わないでこちらを見ている。

この人見たことないし保護者か何かかな？などと考えていると和馬から声を掛けられた。

「悠、何やってんだよ。行くぞ」

「あ、俺急いでるんで…すみませんでした」

何も言わないのでペコリと会釈をして通り過ぎる。

「……少年よ、またどこかで会うだろう」

「……………?」

男はよくわからないコトを言って去っていく。

「何だったんだ?」

そして再び購買を目指す、といっても目と鼻の先だけ。

昼食を買って教室に戻る。

・
・

昼食を食べ終わってまったりするところだが、どうもあの男が気になる。一人で悶々と考えていると、華凛と遊沢が話し掛けてきた。

「ツッキー、勉強教えてくれない?」

「ユウくん、私も教えてほしいんだけど」

「ん?…ああ、いいけど」

「やったね、さすがツッキー」「ありがと、ユウくん」

皆さま驚くことなかれ、俺は成績は良いほうなのだ。

とそこで一人招かれざる客^{バカ}。まあつまり和馬のことだ。

「悠、オレっちにも教えてくれ」

「やだ」

速答＋拒否してやった。

「なんでっ！？華凜ちゃんとか遊沢にはOKしてたじゃないか！」

「和馬に教えるのめんどいから」

実に単純明快な答えだ。これならバカの和馬でもわかるはずだ。

「うつつ、差別だ」

泣き真似を始めるバカが一名。つーか男が泣き真似したって気色悪いだけだ。

「間塚、キモいよ？」

おおっ遊沢、ナイスつつこみ。

「うん、和馬くん。それはキモいよ」

そこへ華凜からの追い打ち。

うわあ、あんなこと言われたら絶っつ対へこむ。いや、自殺ものかもしれない。

「じゃあやめる」

しかし和馬は全然傷つかない、というか気にしてない。

「和馬、お前って案外大物なのかもな」

「ふはは、オレは大物なのだ」

やっぱバカだった。

「そんなことより勉強教えてくれ」

「ああ、いいぞ。これ以上からかったらこっちも疲れるし」

二人が三人に増えたところで変わらない。

「ということで、いつ勉強する？ついでに場所も決めようぜ」

「まあもう決まってるけど、図書室に放課後集合ね」

…既に決めてあった。

遊沢は準備がいいのかなんというか。しかも俺が教えることは決定事項だったらしい。

「よし、ツツキー？逃げちゃダメだからね」

「逃げないから安心しろ」

俺って信用ないのか？それはそれで悲しい。

キーンコーン

「あ、チャイムじゃん。じゃあ放課後に集合だから。解散！」

「解散つて、まだ授業あるぞ?。」

「それはわかってるけど、ノリって大切じゃない?。」

「そうだな」

よくわからんが勉強にノリって大切か?

なんかこいつらに教えるの疲れそうだな。先が思いやられる。

・

・

・

- - 放課後

とうとう来てしまった。これから地獄を見るであろう図書室。

「んじゃ何からやる?。」

「数学」

「漢文」

「全部」

上から遊沢、華凜、和馬という順番である。

「お前ら、一つに統一しようとは思わんのか?」
「つか和馬、お前は論外だ」

全部つてなんだよ、全部つて。

「まあまあ間塚は論外として、私と華凜は臨機応変に対応してよ」

「なんでオレは論外なんだっ」

「和馬、あんまりうるさいと教えないぞ?」

「はい、静かにします」

うん、和馬は少し静かにしたほうがちょうどいいな。

「じゃあまずは私から」

最初は遊沢か。

「ここ解けないんだけど」

そこは何かしらの定理を使って解く問題だった気がする。

「そこはだな、これをこうして……………」

・

・

・

「……………でこうなる。解るか?」

「あーそういつことか。シッキーやるじゃん」

「まあな」

まずは一人完了。

「ユウくん、助けて〜」

次は華凜か。

「漢文読めないよ、っていつか使わないのをなんで習うの」

華凜は勉強はできる方なのだがどうも漢文が苦手らしい。しかもちよつと逆ギレ気味だ。

「はいはい、そんなこと言わない。それを言ったら勉強全部意味がないだろ。漢文は読めればおもしろくなるぞ？」

「ぶ〜ユウくんは読めるからそんなこと言えるんだって」

しょうがないコツコツ教えていくか。

「え〜つと、まず漢文の基本は……………」

・
・
・

「……………でここはこう読むわけだ」

「う〜ん、なんとなくだけどわかったかも」

華凜はなかなか飲み込みが早いな。さすがができるヤツは違う。

「はあく最後はお前か。教える教科は一番苦手なやつだけだぞ」

ゲームでいうとラスボスだな。なぜならコイツは名実共にバカの様なのだ。

「一番苦手なやつって全部なんだけど」

「……………」

マジで？それありえないって。

「華凜？わ、私たちはもう終わったし帰ろっか？」

「う、うん。邪魔したら悪いし」

「ちよっ、逃げる気か！」

「ちっ違っわよ！華凜が言ったとおり邪魔しちゃ悪いって思っただけよ」

「じゃあユウくん頑張って！」

ダッシュで逃げる遊沢、ガッツポーズの華凜、そして取り残された俺と和馬。

嗚呼、神様。あなたはなんて過酷な試練を与えたんだ。ふっ、最後の手段だ。

「あっ和馬、100円落ちてる」

「どっ！？」

全力疾走で図書室を出る。

さらば和馬、お前のことは忘れないよ。

第9話 初登校

波乱含みのテスト期間がようやく終わり、今日が青龍の記念すべき初登校だ。いろいろと不安はあるが、まあなんとかなるだろ。

「青龍、行くぞ〜」

「はいはい、ちょっと待って〜」

朝からバタバタしてるな。…このままじゃ遅刻か？

「よし、準備終わったよ」

「んじゃ行くか」

そうして青龍と歩いていると、華凜登場。

「ユウくん、おはよう、って隣の女の子だれ？」

うおお、朝からダーク華凜かよ。

「話しただろ？コイツが青龍だ。青龍、コイツは幼なじみの朝宮華凜だ」

「私は青龍って言うんだ、よろしくね」

「う、うん。よろしく」

あ、ダーク華凜が青龍の無邪気さに負けて普通に戻ってる。
青龍なかなかやるな。

「ユウ、置いてくよ？」

考えている間に二人とも先に行っていた。
もう仲良くなってるし。つーか先に行く前に声かけるよ。
その後は何事もなく無事に学校に着いたわけだが、問題が発生した。

「ねえねえ私つてドコに行けばいいの？」

「あ…聞いてない」

「とりあえず職員室に行けばいいんじゃないかな？」

華凜の意見も尤だがあの爺さんのことだから気を利かして同じクラスにしてくれている……はず。

「いやメンドイし教室に行ってみよう」

「なにがメンドイし、じゃ。面倒臭がるでない」

「うわっ」

本つつ当に神出鬼没な爺さんだ。

「校長、出てくる度に驚かさないで下さい」

「いやいや驚かすつもりはないんじゃないかな。それより言うのを忘れ

とつたが転校生の教室は月代くんと一緒じゃ」

「そつっすか、わかりました」

「そついうことで、さらばじゃ」

そう言つて走り去つていく校長。

元気だな。

「んじゃ青龍は俺たちと同じクラスらしいから行こつ」

「うん」

三人で教室に向かおうとするが、再び校長出現。

「もう一つ言い忘れたが転校生はまずは職員室じゃ」

「わ、わかりました」

そして校長は再び走り去つていった。

…どこから出てきた？

「な、なんかパワフルだね校長先生」

「……………」

青龍も少し引き気味だ。華凜は固まってるし。

「そついうことだから青龍、職員室に行かなきゃならんらしい。場所分かるか？」

「うーん、まあ分かると思うよ」

「じゃあ俺は華凜と教室に行ってるから」

「うん、また後でね」

そしてようやく教室に向かうことができた。

「おはよう、お二人さん」

「おはよー、宴ちゃん」

「おはよう」

遊沢と挨拶を交わし席に着く。

それと同時に和馬が、

「悠、知ってるか？今日このクラスに転校生が来るらしいぜ」

「ああ、知ってる」

知ってるも何もこっちはその転校生を居候させてんだ知らないわけがない。

「マジかよ、最新情報だったのに……おっと担任だ。じゃあまた後でな」

「ああ」

担任が教室に入ってくる。

「え〜皆知ってるヤツもいると思うが、このクラスに転校生が来た。今から紹介するから静かにしろよ」

ガラガラつと音をたてて青龍が教室に入ってきた。

『『おお〜』』

沸き上がる男どもの歓声。それもそのはず転校生はギャルゲーよろしく、美少女というスキルを持っていたからだ。

「青龍つていいいます、まだ来たばかりで分からないことも……………」

自己紹介をしている青龍をぼーっと眺める。

まあ青龍は可愛いし男どもの反応もわかる。とにかく青龍が余計なことを言わないかぎり俺は平和に暮らせるだろう。

「……………あ、ついでに言つと今はユウの家に居候してます。皆よろしくね」

俺の心配を知ってか知らずか、とんでもないことを口走りやがった。

シーン

一瞬にして教室の温度は氷点下。そして俺に注がれる悪意、敵意、嫉妬などいろいろな感情が交ざった視線。
うん、ものの見事にやっちゃってくれたね。

「あ、あれ？私何か悪いこと言っちゃった？」

言ってしまった青龍ですら收拾できないこの状況、どうしたものか。

「まあそういうことだ」

とりあえずぶつちやけてみる。しかし皆の反応は変わらない。冷めた雰囲気の中バカという名の救世主が現われた。

「ち、ちくしょー！両手に華じゃないか！悠の女たらし！うわ〜ん」

意味不明なことを言って救世主こと、間塚和馬は泣きながら走り去っていった。そんな和馬の奇行にクラスに居るすべての人間が啞然としている。まあ大半は引いているが。そして俺への視線は無くなっている。

和馬、グッジョブ！俺は今、お前に俺的ノーベル平和賞を贈りたい気分だ。つーか俺の中のノーベル平和賞は和馬で決定！

担任もポカーンとしている。おーい早く目覚めろ〜。

「先生？もうすぐチャイム鳴りますけど？」

「え？あ、そうだな。じゃあ一限目の準備しとけよ」

教師にすら我を忘れさせるとは、和馬恐るべし。

・
・
・

今は食後のまったりタイム。青龍、華凜、遊沢、和馬と雑談している。しかし…

「この野次馬どもが！貴様ら視線とか囁き声が鬱陶しいんじゃない、指

「差すなポケツ」

蜘蛛の子を散らすように逃げていく野次馬。

美少女が転校してきた、と既に噂になっていていろいろいるらしく、いろいろなクラス、学年から見にくる奴等が絶えない。

「まあまあツッキー、イライラしない」

「イライラせずに居られるかつ！」

遊沢の言うことは尤だが、あまりに鬱陶しすぎる。

「そうだよ、ユウくん。イライラすると良くないよ」

「ユウは気にしすぎだね、気にしないのが一番だよね」

「うんうん、皆の言うとおりだ。悠、それにあんまりイライラするとハゲるらしいぞ？」

くっ言いたい放題言いやがって。こっちもある程度までなら我慢できるとっつーの。

「そういえば、この間、皆で遊びに行くって言ってたじゃん？あれどうする？」

さすが言い出しっぺ、よく覚えてるな。

「あゝ忘れてた」

「私も」

「何っ！そんなもんオレは知らないぞっ！」

そりゃそうだ、あの時和馬は購買に行つてたはずだ。

「それで思いついたんだけど、遊びに行くのは中止にして青龍ちゃんの歓迎パーティーしない？」

「いいぞ」

「賛成」

「いいね」

「えっ！？私のためにパーティー開いてくれるの？」

青龍は本当に嬉しそうな笑顔で言う。

「で、場所なんだけど……」

そう言つて遊沢は俺を見る。そうすると自然と俺に皆の視線が集まってくるわけで……

「まさか…俺ん家？」

「」「」……「」「」

青龍を除く三人から無言の圧力がかかってくる。どつやら俺に拒否権は無さそうだ。

「しょうがないな、まあいいだろ」

もう後はどうなっても知らん、と半ばやけくそになりながらOKを出す。

「じゃあ今度の休日は、ツッキーの家に集合ね」

「あいよ」

「了解」

「悠ん家は久しぶりだな」

「はい」

さあ今度の休日は大変そうだ。気合い入れていかないとな。

…つーか何故遊沢が仕切る？

第10話 襲来

「あゝすっかり暗くなってるな」

「ユウってば張り切って買いすぎなんだよ」

今はパーティーの買い出しの帰り道である。

「うーん、買いすぎかな？…あ、でも青龍ってメチャクチャ食うだろ？これくらいで丁度いいと思うけど」

「なっ、失礼な！人よりちょっと多く食べるだけだよ」

あれがちよっと多く食べるだけなのか…。じゃあ青龍が本気で食事をしたら……ああこんな恐ろしい想像は止めておこう。

「というか私お腹減った。何か食べていこうよ」

「家までもう少しだから我慢な」

まったく青龍の頭の中は食べ物のことしかないのか。

「……あれ？青龍？」

歩いている俺の隣に青龍の姿はない。振り返ると青龍は立ち止まっていた。しかも様子が少し変だ。

「どうしたんだよ、いきなり立ち止まったりして」

「ユウ、先に帰ってて」

なんで？と問おうとした瞬間、青龍は走りだした。

「おい青龍っ！どこ行くんだよ！」

走り去っていく青龍。後を追って俺も走り出す。

・
・
・

ようやく追い付いた。青龍が居たのは人気の無い空き地のような場所。

「おい青龍、どうしたんだよ」

「…っ！ユウ、付いてきちゃダメだって言ったのに…っってもう遅いか」

青龍は正面を睨み付ける。

「ユウは巻き込みたくなかったけど……居るんでしょ？出て来なよ」

「ふっ、さすがは神獣の中でも最高位と称される青龍といったところか」

「！」

ソレは前からそこに居たかのように姿を現した。

「また会ったな、少年」

「あんたはあの時の！」

廊下でぶつかったあの男だった。

「ユウっ、危ない！」

気付いたときには突き飛ばされた後だった。

俺が今まで居た場所は決りとられたようにクレーターができている。

「ほう、なかなかの動きだ」

「ちっ」

いつの間にか青龍の手には青龍刀が握られている。

「ふん、そんな玩具でこの私を傷つけられるかな？」

「やってみなくちゃわかんないでしょ」

人間の目ですべていけるギリギリのスピードで切り結ぶ二人。もちろん二人が見えているだけであって刀は見えていない。

「これでは埒が明かん。今日はこれで撤退しよう。その前に……」

「なっ、ユウは関係ない！」

言うが早いか男は剣のようなモノで俺を貫いていた。

「……………っ!？」

男は確かに人外のスピードで俺を貫こうとした。それで俺は貫かれた筈だった。

「この攻撃を回避するとは…やるじゃないか」

頭で理解するより早く体が動いてた。

「危なっ!アンタいきなり何やってんだ!…っ!か俺なんで避けれたの?」

頭で理解するより体の反応が早いなんて誰が思うだろうか。そんなわけで俺もどうして避けきれたかわからない。といつの間にか視界から男が消えていた。

「ユウっ避けて!」

「無理」

そんなこと言われても考えて避けるのは無理だ。返答した直後、自然と体が後ろへ跳んだ。

「面白い、これも避けるか」

今度は体が勝手に反応したのだと理解できた。

「……………」

あ、青龍が驚いてる。まあ無理もない、だって一般人が避けれる攻撃じゃないもん。というか避けた本人もよく理解していなかったりする。体が動いたのはわかったけど…。

「どこまで続くかな？」

そうしている間にも繰り返される斬撃。しかし俺はそれをひよいひよいと避ける。親父、アンタからたたき込まれた武道が役に立っているっぽい。

うーん、しかしこれじゃコイツが言ったみたいに埒が明かない。いちちょ反撃してみますか。

「ほらほら少年！ぼーっとしていると死ぬぞ」

「死なん」

こんなところで死んでたまるか。つーかどうやって反撃しよう？…とりあえず動揺させてみるか？

そもそも動揺するかどうか怪しいとこだけど…。

「アンタの攻撃はもう見切った」

「なつ何い！！」

男は地面にがつくりと膝をつく。

ラッキー、なんか成功したみたいだ。今のうちに攻撃しとくか。

「…少年よ、よく恥ずかしがらず漫画みたいなコトを言えるな。私なら恥ずかしくて自殺してしまっぞ…。」

なるほど動揺したんじゃないやなくてビックリしたんだな。でもアンタその格好、無防備すぎるぞ。しかもちよつとムカついた。

「誰のせいで言ったと思ってんだ！ポケット」

怒りに身を任せてローキック。しかし今は膝をついている状態なので必然的に顔面にヒット。

「ぶはあっ」

奇声をあげて吹っ飛んでいく男。その顔からは仮面の破片がパラパラと落ちていく。……………ん？仮面？

「ユウっ大丈夫？」

「ああ問題ない」

それより……………

「青龍、アイツ仮面つけてたぞ」

「！？」

「とりあえず顔でも見ておくか」

俺は吹っ飛ばした男のところへ行き、壊れた仮面を外す。ちなみに男は気絶している。

「なあ青龍、これ誰か解る？」

青龍は男の顔を見るなりだんだんと殺気立っていった。

「ど、どうした？誰だか知ってるのか？」

「うん、私の父上だよ」

「はあ！？青龍の親父！？」

俺の大声で目が覚めたのか男　　青龍の親父がスツと起き上がった。

「我が愛しの青龍ちゃん久しぶり。それと少年、なかなかいい蹴りだったぞ」

意味がわからん。

「っていつかなんで父上がここに居るの？」

青龍は怒り心頭といった様子で問い詰めている。しかもその手には青龍刀を持って。

「あゝ青龍？少し落ち着こうか？ほらお父さんもちょっと青ぞめてるし」

「あ、そうだね」

おとなしく青龍刀しまう。つーかどこにしまってた？後で聞いてみよう。

「少年、君からお父さんと言われる覚えはない。………はっ！？も

しや青龍ちゃんに手を出したな！許せん」

「出すか！この小説は全年齢対象じゃポケッ！」

いつもの癖でボディブローを放っていた。

「くっ、ボディもなかなかのものだ」

「父上？次、くだらないこと言ったら…解ってるよね？」

「う、うん。肝に銘じておくとしよう」

「で、その青龍のお父さんが何の用ですか？ていうか何でいきなり襲ってきたんですか？」

「そつだよ！なんで私たちが襲われなきゃいけないの？」

こっちは死ぬところだったんだから俺が納得する理由じゃなかったらもう一発殴ろう。

「なんとなく……じゃダメかい？」

うん、もう一発殴られたらしい。ていうか殴っていいよね？よし殴ろう。

「少年、何かやけに殺気立ってないかい？」

「はい、それはきつと気のせいじゃありませんよ」

その日、空き地に断末魔が響き渡った。

もちろん誰のかは言いつまでもない。

第10話 襲来（後書き）

思わせ振り？なタイトルですが青龍の父が登場しただけです（^^；
（次の話も出ます（-|-；）

第11話 神獣親子

ここはとあるアパートの一室。つまり俺こと月代悠の部屋だ。青龍の親父を会心の一撃で気絶させたあと（そんな気はなかった）、気絶した青龍の親父を叩き起こして部屋まで連行した。

「で、なんで父上は私たちを襲ってきたの？」

「いや、それがね青龍ちゃんの気配を捕捉したところに行ったら偶然青龍ちゃんを見つけたんだ」

「それは偶然とは言いません。しかも襲った理由は言ってないじゃないですか」

「っ！かちゃんと話す気があるのか？」

「父上！ちゃんと話してよ！」

おお、青龍激怒。本気で怒るなんてめずらしいな。

「青龍ちゃん、ちゃんと話すから落ち着いて。ほら少年も青龍ちゃんを宥めるんだ」

「ちゃんと話す、ということは今までテキトウに話してたんだな？」

「少年、そこで殺気立つのは良くない。君の攻撃は人間にしては威

力が高いからな」

「じゃあしつかり説明してください」

「うーん、話すと長くなるな。その前に私は閏龍「ギョクリュウ」という名だ」

「あ、俺は月代悠です」

今頃自己紹介かよつ、とツツコミたくなつたが俺も忘れていたので言わないことにした。

「自己紹介も済んだし説明しよう。えー、簡潔にいうと青龍ちゃん
が人間界に行つて人間の所に居候しているという噂が流れていたんだ。それで様子を見にきたついでに青龍ちゃんを預けておけるだけの人間が見極めた。という所かな」

だいたい理解できたけど納得いかない点が一つ。

「俺に攻撃する必要があつたんですか？」

これで、なんとなくとか言つたら殴らなければ気が済まない。まあ、既に殴つてるんだけど。

「攻撃する必要はある。…なぜなら健全な精神は健全な肉体に宿る、
というからな」

う、反論できない。それは親父からも常日頃から言われてきたことだ。

「わかりました、それで納得しました。でも俺が閏龍さんの攻撃を避けきれなかったら死んでましたよね？」

自分では解らないが鏡を見たらたぶん極上の（冷たい）笑顔だと思う。

「し、少年！無闇に殺気を放つのはダメだ！」

本気で慌てる閏龍さん。これはこれで見ていて面白いが質問に答えてもらわなければいけない。

「どうなんですか？」

「いや、君を殺すつもりはなかったよ。避けきれなかったら寸止めする気だった」

まあ殺すつもりがなかったのなら許してやろう。じゃあなんで青龍も襲ったんだらう？

「そつですか…ならなんで…」

「なんで私まで襲ったんだよ!？」

聞きたいことを先に言われてしまった。

「それはね、青龍ちゃんは可愛いでしょ？襲われちゃったら大変だからね」

アンタみたいなヤツから襲われたら、そりゃあ大変だらうな。

「ふざけないでよっ！ちゃんとした理由がある筈だよ！」

あゝなんか一人でヒートアップしてるな。

「青龍、少し落ち着け」

「ユウは黙ってて！」

「わかったよ」

何故俺が怒鳴られなければならない？

「本当のことを言っとね…青龍ちゃんは神獣でしょう？」

「うん」

急に閏龍さんの顔がキリッと締まる。

「神獣たる者日々の鍛練を怠ってはならないんだ。ましてや私たち一族は神獣の中でも上位、そんな者が皆の手本にならずしてどうする！」

驚いた…閏龍さんがこんな信念を持っていたなんて。…見習わなければならぬところが世の中にはまだまだある。

「…というのを伝えにきたけどその必要はなかったみたいだ。青龍ちゃんが元気そうで安心したよ」

「父上…」

うん、感動の場面だね。などと思っていると…

「…よくできた言い訳だね」

青龍がとんでもない暴言を吐いてくれた。

「青龍、閏龍さんはお前のことを思っ……………」

「あ、やっぱりばれる？この言い訳。いや、よくできたと思ったんだけどな」

「たぶん母さんには通用しないよ」

「どうしよう？勝手に人間界に行ったってわかったら母さん怒るだらうな。母さんが怒ったら怖いんだよな」

「……………」

一瞬でも感動した俺が馬鹿だった。

「ん？どうしたのユウ？さっき何か言おうとしてなかった？」

「……………なんでもない」

「言いたいことは言わないとスッキリしないぞ」

「……………なんでもありません」

「…かこの親子、俺を馬鹿にしてるのか？」

「そういえば青龍ちゃんはなぜ少年の所に居候してるのかな？」

「ああ、それは青龍が…」

「実力行使だよ」

「自慢げに言うな！」

しかも人が話そうとしている時に割り込んできやがった。

「じ、実力行使…少年！青龍ちゃんにナニをした！？」

「だから何もしてないっ！それに実力行使って言ったのは俺じゃねえ！」

「つかナニって何だよ…」。

「そ、そうか…いや、慌ててすまなかった」

「わかったんならそれでいいです」

親バカだな。まあ青龍は可愛いから親バカになるのも解るけど…

「ユウと父上、なかなか相性がいいみたいだね」

「青龍ちゃんがそう言うならそうかもしれないな」

あははは、と笑い合う神獣の親子。しかし、俺は認めないぞ。 閏龍
さんと相性がいいなんて。

なぜか否定しまくっていた。

「相性の話は置いて、なんで俺ん家に青龍が居候してるかって話ですよね」

「そんな話だったような気がしないでもないな」

「えーさっきので説明終わりじゃなかったの？」

「終わりじゃない！」

ちくしょう、馬鹿にしているとしか思えないぞ。そして途中で邪魔が入りながらも説明を終えた。

「そうか少年が作る食事が美味しかったから居候することになったんだな」

「違うっ！どこをどう解釈したらそうなるんだ！」

「食事をしている時に居候の相談をされたんだろっ？それは食事が美味しかったからではないのか？」

「うん、ユウが作るご飯はなかなかのモノだよ」

青龍さん、そこでそんな発言をしたら誤解が生まれるじゃないですか。

「そうかじゃあ今日はご馳走になっていくか」

「なんでそうなる？」

「青龍ちゃんが美味しいというのがどれ程のものかと思ってね」

…で早速料理を作る。がしかし神獣親子は何もしないくせに“まだく？”とか“むう手際が悪い”などと言ってくる。

「早く食べたいなら手伝え」

「料理できないもん」

「私もだ」

これで不味いとか言ったら殴らなければいけない。

「少年、包丁を持って殺意を抱かないでほしい」

「……じゃあ黙れ」

「はい」

おとなしく引き下がる閏龍さん。

その後騒がしい夕食を終えて食事のお茶を啜っている神獣二人。

「なあ閏龍さん、アンタいつ帰るんだ？」

「まあ慌てるな、すぐ帰る。それより少年……」

「はい」

なんかすごく真剣だ。なんだろう？

「さっきの食事のレシピ教え…」

「無理です」

何かと思えばそんなことが、重要な話かと思っただぞ。

「そうか…では私はもう帰る」

「そっつすか」

「バイバイ、父上」

名残惜しそうな閏龍さんに対し青龍は何も思っていないようだ。

「また会うこともあるだろう」

こっちとしてはもう会いたくないけどな。

そして閏龍さんは…

「少年、また食事を」馳走になりにくるよ。母さんと一緒に」

…なにやら不吉な言葉を残して去っていった。

最後のは聞かなかったことにしよう。

第12話 バスケットをしよう！

昨日は大変だったなあ、などと思いつつぼーっと体育館で活発に動いているクラスメイトを眺める。

今は体育の授業で自由時間らしい。で、なんで俺が参加していないかというと、閨龍さんの攻撃を躲した時に筋肉や関節に結構な負担がかかっていたらしく激しい運動をすると痛むのだ。そういう訳でぼーっとしている。

「…っかウチの学校の体育館広いな」

ここ桜花高校（第12話目にして高校の名前がようやく判明）の体育館はバスケ・バレー・バドミントン等の部と一緒に活動できるくらい無駄に広い。しかも隣に小体育館というものがあり、卓球場、柔・剣道場を完備している。

「悠々今からバスケやるけど入るか？」

「いや、今日はパス」

今から和馬たちはバスケをやるらしい。

3on3でやるみたいだな。チームは青龍、華凜、遊沢。もう片方は和馬とクラスメイトの佐藤と田中だ。女子チーム対男子チームってところか。

「じゃあ始めようか。ルールは五本先取、んで負けた方は罰ゲームとして勝った方にジュースを奢る。いいね？」

「「「おう！」「」」

男子チームの声がかぶる。どうやら息はぴったりのようだ。それにしても遊沢ってホントに賭け事が好きだったんだな…。色々と思考している間にゲームは始まっていた。

まず華凜がボールを持つ、そして遊沢にパス…と見せかけてドリブルで佐藤を抜き去る。

その後、遊沢にパス。遊沢はフェイントを入れながら和馬たちを躲してそれをレイアップで決めた。

「なかなか上手いな、息も合ってるし」

次は男子チームのボールからだ。

和馬にボールが回り、田中にパスしようとして青龍からカットされた。

そしてゴールにそのまま疾走して…

「あほっ！ドリブルしろっ！」

思わず叫んでしまった。

バスケットで脇にボールを挟みラグビーみたいに突っ込んでいくヤツがいたら誰だって叫びたくなるだろ。

しかも放っておいたらトライしそうな勢いだっただし。

「……………ちっ、何も言わなかったら気付かれなかったのに」

いや、そりゃ無理があるだろ。いくら和馬だって気付くはずだ。

「え？あれ反則なの？」

「おい！！！！」

って気付いていなかった。そして他の二人からツツコミが入る。

「和馬あ！そのくらいは知っとけ！」

「いや、バスケのルールってイマイチ解らないんだよな」

ルールも知らずに勝負を挑とはアホだ……。しかも普通トラベリングぐらい知ってるだろ。

「よしルールは大体理解したぜ。さあ気を取り直して再開だ」

トラベリングを知って元気になる和馬。しかし他の二人はもう諦めモードになっている。

・

・

そんなこんなでスコアは4対2で女子チームがリーチ。

最初と同じように華凜が遊沢にパス、そして遊沢はスリーポイントのラインからシュート。

「ラストだから格好つけてるな」

その格好つけたのがいけなかったのか、ボールは見当違いの所にいく……。のではなく青龍へのパスだった。それを青龍は空中で受け取りそのままダンク。

「何っ！？あ、アリウープだと……」

アリウープなんてバスケット初心者ができる技じゃない。なのでバスケットをしていた奴らは呆然としている。

「あゝ気分爽快だよっ！これで私たちの勝ちだね」

そんな中、当の本人だけ勝利宣言をしている。
その声で遊沢たちが我を取り戻した。

「そ、そっだ！間塚たち勝負に負けたんだから罰ゲームね」

「わ、わかった。というかもうすぐ授業が終わるな。集合しようぜ？」

なんか無理矢理話を逸らしている気が…。

「そっいえば華凜って結構バスケット上手かったんだ」

「うん、上手かったよ」

「えっ、そうかな？」

誉められている華凜はまんざらでもなさそうだが、青龍のスーパープレイについては何も触れられない。
さっきのは触れないようにしているらしい。

「おーい、もう授業が終わるから集合しろー」

・ 体育教師の生徒を呼ぶ声で体育の授業は終了した。

放課後

「あーやっとな終わった、しっかし今日は疲れたなー」

そう言いながら遊沢が俺の席に近付いてくる。

「バスケの時にはしゃぎ過ぎだ」

「えーそうだっけ？あのくらい普通じゃん」

遊沢よ、お前の運動量を一般人と比べてはいけない。

「まあとにかく、これで全員揃ったな」

俺の席には和馬、華凜、遊沢、そして青龍が集まっている。

「ねーねーなんで集まってるの？」

「お前の歓迎パーティの打ち合せだろ。もしかして忘れてた？」

「いやっ！今思い出した所だよっ」

それを忘れていたと言っただが…。

「主役が忘れていてもやるもんはやるからな。で、日程だけど明日でもいいか？」

何を隠そう今日は金曜日。さっき遊沢が疲れたと言っただけはそのことも関係するのかもしれない。

「明日か…うん、あたしは空いてる」

「私も」

青龍は強制参加だから後は…。

「和馬は？」

「ふはは、オレはいつも暇だぜっ」

いつも暇って…和馬、お前の友人として悲しいぞ。

「ちっ」

「!?!」

遊沢、舌打ちってひどくね？和馬になんか恨みでもあるのか？
他のやつに聞かれてたら大変だぞ？

「じゃあ明日俺んちに集合だな」

「わかった、んじゃあたしはもう帰るわ」

「それじゃあ俺たちも帰るか」

「うん」

数日前から青龍と華凜と俺の三人で一緒に帰っている。
華凜は前からだったし青龍は一緒に住んでるから必然的にそうなっ

てしまう。

「複数の女の子と一緒に帰るなんてどこのギャルゲーだっ！悠のバカヤロー」

和馬だけダツシユで帰っていった。

「なあアレ治らないかな？」

「無理じゃない？」

やっぱり誰が見ても治りそうもないのか…。
言われる方としては結構迷惑なんだけど。

「つーか明日来ると思うか？」

「うん、どうだろ？来なかったら呼べばいいし…」

「華凛甘いね、あれは多分来ないよ。背中がそう語ってたね」

「ていうか間塚は居なくても問題無いでしょ？」

三人とも違う答えだが…遊沢、今日はちょっと厳し過ぎない？

「どっちにしても明日は忙しくなりそうだな」

密かに明日は和馬のことは忘れて楽しもうと思う俺だった。

第13話 パーティ

ピンポン、という音で目が覚めた。んで今日は青龍の歓迎パーティ。この要素から導きだされる結論は一つ。

「寝坊したっ！？っーか今何時!？」

ガバツ、っと起き上がり時計を見る。

「……………」

6時。もちろん朝の。

こんな時間帯に来る非常識なアホは俺の知り合いでただ一人。

「……………和馬か」

さて、どうやって追い返そう？

- 1、いつものように殴って気絶
- 2、警察に通報
- 3、言葉で説得
- 4、無視
- 5、面倒臭いので二度と口が利けないように成仏させる

うーん、とりあえず5は無いな。今のところ犯罪者になる気はない。あ、あと2も無い。さすがに人生を潰すのは可哀相だ。

「……4」

こういう時は無視が一番。ということで時間が来るまで寝よ。

ピンポン、ピンポン、ピンポン、ピンポン、ピンポン、ピンポン。

警察に通報されたいのか？

しょうがないここは3をチョイス。

名残惜しいが布団から出て玄関へ向かう。

「はい、どちらさん？」

分かっているが知らんぷり。もちろんドアは開けていない。

「おう、オレだ！」

「新聞ならもう取ってるんでいらないます」

「違う！オレだよオレ！」

「はあ、いまどきオレオレ詐欺ですか？電話じゃないと意味ないんじゃないですか？あ、もしかして新しい手口？」

「お前の友達だっ！」

「いや、俺の友人にこんなに朝早くから遊びに来る非常識な人間は
いません」

「悠、あんまりいじめると泣いちゃうぞ？」

うざっ、こっになったら最終手段。あんまし使いたくなかったけど。

「あ、警察ですか？今部屋の前に変な人が居るんですけど…」

実際に電話はしていないがわざと和馬に聞こえるように言う。

「わあぁ、ちょっと止めっ…チクショー！また来るぜっ」

説得してない気がするが、撃退完了！

撃退できたのはいいが完全に覚醒してしまった。

「はぁ…朝飯でも作るか」

今日の朝食はトースト、ベーコンエッグ、サラダ。

うん、我ながら質素というかシンプルだ。

「おはよー、ん〜いい匂いにする」

「おはよう」

匂いに誘われたのか青龍が起きてくる。

「朝起きたら朝食が出来てるっていうのはいいね」

作る側は大変だけだな。

「いただきますーす」

「いただきます」

もぐもぐとパンを食べている青龍。

「ねーねーなんか今日シヨボいというかシンプル過ぎない？」

「昼が気合い入ってるから朝はこれくらいでいいんだ」

「ということとは昼ご飯はすごく豪華なんだね!？」

「まあな、パーティだし。食べ過ぎて体調崩すなよ」

「楽しみだ〜」

すごく幸せそうな顔で俺の言ったことを無視する。

完全に自分の世界に入ってるな。そつとしておいてやるつ。そして朝食が終わり恒例(?)となった食後のお茶。

「華凛たちいつ来るの〜？」

「12時頃に来るんじゃないか？」

「ふーん」

「それまでに着替えとけよ」

「うい〜」

実は青龍はまだパジャマのまま。

こいつには恥ずかしいという感覚は無いのか？飯にも女の子だぞ？

「はあ」

料理の仕込みをしていると、

「ユウくん」

華凜たちがやって来た。時間は12時ぴったり。ちなみに鍵は開けているので勝手に入れる。

「よっ、ツツキー。これ差し入れ」

「あ、私も」

「サンキュ」

さすが遊沢と華凜。どっかのアホとは全然違う。

「まあとりあえずその辺に座っててくれ」

差し入れを受け取ってキッチンに向かう。んで、仕込んでおいた材料で料理を作る。メニューは、ローストポーク、パーティと言えばこれだ！ということとでチキン、スープにヴィシソワーズ、野菜も必要なのでサラダ、主食はパスタでカルボナーラとミートソース、そしてデザートにケーキを用意した。

「こんだけありゃ十分だろ」

完璧だ、などと思いつつ料理を運ぶ。

「「「おお」」」

皆から感嘆の声が漏れる。来ないと思った和馬が居たが気にしない。そついやまた来るとか言ってたっけ。

「じゃあ今から青龍の歓迎パーティスタート！」

「いただきまーす」「」

スタートが食事ってのもどうかと思うが腹が減るからしょうがない。

騒がしくも楽しい食事が終わり食後のお茶。今日はケーキ付きだ。

「ツツキーって料理なら何でも出来るんだ、意外だな」

そついうわけでもないんだけどな。

「ねーねーユウ、この後何するの？」

「予定はない」

何も考えていなかった。ということでは皆様から意見を。

「何かやりたいことある人？」

「.....」

一人くらい何かあってもよくない？

「ふっふっふ。そこでお困りの君！この宴さまが助けてあげよう」

「なんだ遊沢、何かある？」

「何もやることがないなら競馬かパチンコに行こうじゃない！」

「未成年だからバレたら補導されるぞ？」

「バレなきゃいいのよ」

「というか歓迎パーティでギャンブルはどうかと思っぞ？」

「フーか競馬とか完全に遊沢の趣味じゃん。」

「じゃあゲーセンで勘弁してあげるわ」

「それなら問題ないけど…皆はそれでいいか？」

「「いいよ」」

…ということでゲームセンターに行くことになった。

ゲームセンターと言っても前に青龍と買い物に行ったデパートの中にあるゲームセンターだ。しかしこの辺では一番大きなゲームセンターだったりする。

「さあて何する？」

「うーん何しよっか？」

「俺はやること決まったから先に遊んでるぞ」

二人はまだ決まっていないうだ。しかし俺は決まっている。ゲー

センに来たら最初にするのはアレしかない。
つーか和馬どこ行った？

「ユウ、アレだね」

「ああ、アレだ」

アレ、つまりUFOキャッチャー。これは俺の定番中の定番だ。
この間は不本意な結果に終わったから今日は気合い入れていくぞ。

「今日は何を狙おうかな？」

うーん、これといって欲しいものがない。

「青龍、なんか欲しいのあるか？」

「ん？自分で取るからいいよ」

「そうか」

じゃあ俺もなんか探そう。

「……………おっ！あれ取ろう」

今日俺が狙うのは、ふかふかの感触が売りの時計の人形・ぬざまし
クン。

うわ、思いっきり某ニュース番組のマスコットをパクってるんで
すげ。

ウィーーーーーン

よし、これはいける。

ガゴン

難なくぬざましクンをゲットした。

「おお、ふかふかだ」

極上の触り心地だった。

よし、幸先いいぞ。次はお菓子コーナーに行ってみよう。

お菓子コーナーは簡単に言えばUFOキャッチャーお菓子ヴァージョンだ。

「何か美味そうなのは…」

キワモノしかないのは気のせいかな？

脳みそプリン、触感まで再現したらしい。これはまだ許容範囲かな。ちよつとグロいけど味はプリンだし。

う〇い棒プレーン味。味がないだけでまだ食べれる。美味くはないだろうけど…。

問題はこれだ、カオスジュース。色々なものが数十種類混ざって何の味がするか分からないジュースらしい。中身は分からないが、すでに名前から危ないオーラがガンガン出てる。というかカオスって混沌って意味だよな？

「……………」

気になる。すつごく気になる。どれくらい気になるかというとき取ったぬざましクンは許可取ったのかな？とかいう疑問がどう

でも良くなってくるほど気になる。
まあもともとどうでもいい疑問だけど。

「…………やるか」

覚悟を決めてコインを投入。まあ一本だけなら処理できるだろうし。

ウィーーン

ガコン

ガラガラガラガラ

「ちよつ待つ…………マジデスカ？」

積んで山になっていた所が崩れて十数本のカオスジュースが出てきた。

「これ誰が処理するんだ？」

くそう、脳みそプリン辺りにしとくべきだったか。ジュースを備え付けの袋に入れながら激しく後悔する。

「ユウく華凜たちのとこ行く」

カオスジュースの処理方法で頭を悩ませていると青龍が来た。その手には大量のぬいぐるみがある。

「ああ、行くところか」

結構テンションが高い青龍に対し、俺は心なしかテンション下がり気味だ。

「うわっ、それどうしたの？」

それ、とはカオスジュースのことを言っているのだろう。

「一回でこんなに取れたんだ」

「へえ、ていうかそれ飲み物……だよな？」

「ああ、飲むか？」

「謹んで遠慮しておくよ」

青龍が微妙な表情になっているのは何かのオーラを感じ取っているせいだろう。

「あつ！華凛たちだ。お〜い」

「あ、ユウくとせーちゃん。どこに行ってたの？」

ん？せーちゃん？…ああ青龍だからせーちゃんか。

「UFOキャッチャーやった」

「ツツキー、それ何？」

「うん、何か怪しい」

「ん？悠か…ランキング一位のヤツが超えられないんだ」

ランキング一位のヤツは格闘技か何かやっているのか高得点だ。

「悠って武道やってたんだろ？それならヤツを超えられるかもしれないからやってくれ」

そう言われたらやらない訳にはいかない。コインを投入してグロブを付ける。

「行くぞ」

渾身の一撃を放つ。

得点は…一位には届かず二位だった。

「悠でも無理だったか…」

「そんなに悔しがることでもないと思うぞ？一位のヤツって明らかに何かやってるし」

しかもたかがパンチングマシンだ。そこまで熱くなることもないだろう。

「ねー悠、私もやりたいから退いて」

青龍もやりたいらしい。素直に場所を譲る。

「よーしっ、行つくよ〜……………」

精神集中する青龍。…もしかして本気出したりする？

「……………はっ」

青龍が拳を放つ。

…物凄い音がした。俺のパンチがバンツ、なら青龍のはズドンという音だ。

まるでハンマーで殴ったような衝撃だった。

「あ、一位になった。やったね」

得点を見ると二位に三倍以上の差をつけている。

「す、すごい」

誰かが呟いた。

さすが神獣、と言いたいがやりすぎじゃね？ものには限度ってやつがあるだろ。

「と、とりあえずオレの無念は晴れたかな？」

今コイツの頭の中は疑問でいっぱいだろうな。

「少し休憩しない？喉も乾いたし」

遊沢め、ついにあれを飲ませるのか。元はと言えば俺のせいなんだけど。

遊沢の提案でやってきたのは前にも行ったクレープの店。それぞれクレープを買って席に着く。

「やっぱりここのクレープは美味しいな」

「あゝやっぱり甘いモノは口に合わないー」

なんだと、和馬！それなら食べなきゃいいだろ。まったくこんなに美味しいものを口に合わないなんて。

「口ん中が甘い。飲み物買ってくる」

「あ、間塚待った。ジュースならあるわ」

遊沢に“やっぱりやるんだな？”と目で語りかける。

そして遊沢も同じように言ってきた。“もう後戻りはできない”と。

「はい、これ」

「Thank you」

遊沢が和馬にジュースを手渡す。なぜか和馬の発音が妙にいい。

「じゃあ、いったきまーす」

誰もが固唾を飲んで見ている。和馬、もう後戻りはできないぞ。いや、下手するとこの世に戻って来れないかもしれない。

ゴクゴクといい音を立てて乾いた喉に一気に流し込む。ていうかそんなに飲んで大丈夫か？

「ぶはーっ、なかなか美味かった」

「和馬、なんともないのか？」

「ん？何が？」

「いや、何でもない」

「なんだつまんないなー」

遊沢さん、マジで鬼ですか貴女は。

まあ何事もなかったならそれでいい、と思ったのも束の間。

「まだだよ」

何が？と青龍に問おうとした瞬間。

「おおう、何じゃこりゃあ！？」

いきなり和馬が叫びだした。どうも後からくるタイプだったらしい。

「お、お……………」

「お？」

まさかオクレ兄さん、とか言うんじゃないだろうな？

「お口の中が四次元ポケットや〜」

彦摩呂風に口の中の状況を言い残してトイレのある方に走り去っていった。

「なあ遊沢、なんか大変なことになったぞ」

「あははは……ち、ちょっと待って……あはは……わ、笑いが止まらない」

「それひどくないか？」

「だ、だって……くくっ……ひ、彦摩呂……い、息が……あはは」

笑い過ぎでまだヒイヒイ言っている遊沢。

それにしても四次元ポケットって……ぐちゃぐちゃになってるってことなのか？ いろんなものが。

「カオスジューズ恐るべしだね」

「そうだな」

「和馬くん大丈夫かな？」

「いや、ダメだと思う」

というか店中の人から注目されていた。

それから遊沢が復活したのが五分後、和馬はなんと三十分もかかった。

「ひ、ヒドイ目に遭った」

「あたしも笑い死にするかと思った」

和馬はともかく遊沢は自業自得だろ。

「ユウくん、これから何するの？」

「うーん…どうしよう?..」

只今時刻は六時二十分。カオスジュースのおかげでかなり時間を食ってしまった。

「そついや皆は夕飯どうするんだ？」

「私は今日は両親が居ないから自分で作るつもりで思ってる」

「え？ツツキーン家で食べるつもりだけど？」

「My motherに外で食べてくるって言っちゃまった」

「私はユウと一緒にね」

「それなら俺ん家で食べてけよ。遊沢は俺が誘わなくても来たただろ
うけど」

とついで早速俺の家に移動する。

「夕飯何が食べたい？リクエストある人？」

「え、ユウくん今から作るの？ちょっと早くないかな？」

「いろいろと仕込むからな」

「はい、ツツキー。世界三大珍味が食べたい」

また、無理な注文を…。

「いいぞ、遊沢」

「マジ？やった」

「ただし、その辺のスーパーに売ってあるならな」

「ちえっ」

「じゃあ俺が勝手に作るから」

今夜のメニューはカレー。何でカレーかって？大勢で食べるのはカレーだろ。作るの楽だし。

「完成」

さっさとカレーを作ってしまう。

「ユウ、お腹減った」

久々に青龍の催促がとんでくる。

「今持ってくる」

夕食を終え、食後のお茶。

「そういえばせーちゃんは食事作らないの？」

「いや、それが全然できないだよ。まあ私が作らなくてもユウ

が作ってくれるからいいけど」

少しは覚えようとか思わないのかよ。

「ねえツツキー、私が持ってきた差し入れ持ってきて」

「ああ」

そつえば遊沢の差し入れって何だろ？ついでに華凜のも持ってくるか。

「ほい、持ってきたぞ。つーか中身は何だ？」

「ん？知りたい？」

ニヤッと笑みを浮かべる遊沢。怪しい。

「ま、まあ一応」

「いいでしょう。ジャーン」

効果音と共に登場したのはワインとかウィスキーとか高そうな酒。

「おっいいね」

しかも速攻で青龍が食い付く。

「あ、ツツキー。一応釘を刺しておくけど、アルコールはダメだ。とか言っちゃダメだからね。というか今日は無礼講よっ！」

遊沢に何か言い返そうとしたが、何か言ったらカオスジュース飲ますよ？と目が笑っていない笑顔で言われたので何も言えなかった。弱いな、俺。

「はあ〜今夜は大変だ」

皆を観察しながらため息をつく。

酒の飲み方も色々だな。華凜はちびちびと舐めるように飲んでいるが、青龍と遊沢は浴びるように飲んでいる。

そういう俺は酔わない程度に飲んでいる。酒は飲んでも飲まれるなつてね。

「ん？一人足りない？」

ああ、和馬か。和馬は酒が飲めないと遊沢に言ったらカオスジュースを四、五本飲まされて撃沈した。ご愁傷さま。

「つーかコイツら泊まっていく気か？」

明日は日曜だからいいんだけど。

「おーいツッキー？あんま飲んでないんじゃないの〜？」

「ソーだソーだ」

「いや、飲んでるぞ」

そういう遊沢と青龍はでろんでろんに酔っている。

「あれ華凜は？」

「あー華凜なら寝ちゃった」

華凜はいつの間にかソファに横になってぐっすり寝ていた。後で布団掛けてやらないとな。

「ん〜ツッキー、あたしも眠くなってきたから寝る」

そついうと遊沢はクッションを枕代わりにして寝始めた。

「ちよつと布団取ってくる」

「あ、私も行く」

青龍と一緒に寝室に布団を取りに行く。

「よいしょつと」

押し入れからタオルケットを数枚取り出す。

「ふうちよつと休憩」

ベットの腰を下ろす。青龍も同じように腰を下ろした。

「……………」

「……………」

二人とも何も言わないので静かだ。不意に青龍が寄り掛かってきた。

「ねえユウ」

「ん？なんだ」

「私ね、ユウの所に来て本当に良かったと思うよ」

「そうか」

そう言うと徐々にこちら体重がかかってきた。体を預けているという状況だ。

顔の横には青龍の頭、男なら誰でも緊張するシチュエーションだ。

「なあ青龍……」

視線を下に向け青龍を見る。

「……………ぐう……………」

「……………そう来たか」

青龍サマは熟睡しておられた。まあなんとなくこんなことじゃないかなー？って思ってしまったよ。ちくしよー。

熟睡している青龍をそのままベット寝かせて華凛と遊沢にタオルケットを掛けに行く。

「いつになくバタバタしてたな、今日は」

明日は日曜、今日の疲れをゆっくりと癒そう。

第13話 パーティ（後書き）

以前に書いてupし忘れたやつです（＾－＾；）

第14話 バトルロワイアル

「ん？朝か………つてここは何処だっ!？」

朝目覚めると見知らぬ部屋に居た。部屋にはクラスメイトたちの姿もある。

このシチュエーション、なんか嫌な予感がする。

『皆さんおはようございま〜す』

壁に設置されているスピーカーから妙にハイテンションな声が響いてくる。

『皆さんには今から一時間後、最後の一人になるまで殺し合っ
て貰います』

ざわっ、っと一気に部屋の中が騒がしくなる。
バトルロワイアルそのものだな。

『今から五分後に武器と食料が入った袋を持ってくからおとなしく
しておいてくださいね〜』

「よし、とりあえず………何しよう?」

よく考えたら何もやることがなかった。
うっん、逃げるか？

『あゝ言い忘れてたけど逃げたら問答無用で死にます とうか殺す?てへっ』

やけに可愛いらしい声で実に恐ろしいことを言うスピーカーの人。

『それともう一つ、逃げたってどうせここは絶海の孤島だよ?それじゃ頑張ってね』

「マジか……………?つか忠実に再現しすぎだろ」

五分後、和馬と合流した頃、黒服の男たちがやって来た。

「なあ和馬、これどうする?」

「面白そうだからいいと思う」

聞いた俺がバカだった。

こうなったら最後までやるしかない。

「では、これから一人十分間隔で外に出てもらう。出ていく時はこの袋を取っていくように」

黒服の男たちは淡々と説明をする。

一人、また一人と外に出ていく。んでついに俺の番。

「なんでこんなに落ち着いてんだろ、俺」

ちよつとした違和感に首を傾げつつ外に出る。

「外に出た瞬間殺されるってことはないよな、さすがに」

とりあえず隠れる所を探す。

歩いて数分の所にあまり人目につかない洞窟があった。

「とりあえずここに隠れるか」

まずは武器の確認をする。入っていたのはナイフだった。

「ナイフか…まあ無いよりはマシか」

次は食料の確認。乾パン、缶詰め、水。

まあメジャーな非常食だな。これだけあればなんとかなる。ん？まだ何かある？

「な、何故これが……………」

最後に出てきたのはカオスジュース。これは食料……………なのか？

「はっ！？これも武器とかじゃないのか？」

確かにこれなら殺人、とまではいかないものの気絶するくらいの威力はある。

『はいはい、第一の犠牲者が出ましたよ。佐藤くんです』

「……………早い」

佐藤よお前のバスケの時の勇士は心に刻んでおくよ。

『ちなみに死因は、ナント！……………カオスジュースを飲んだことによるシヨック死です』

「……………バカだ」

佐藤くんの勇士は一瞬で消え去った。その代わりに佐藤はバカ、ということが心に刻まれた。

『お〜つと？次々と犠牲者が出ている？しかも死因は全員カオスジュースによるシヨック死だ〜』

「おいおい、皆バカすぎだろ。というかカオスジュースってそんなに威力高かったか？」

疑問に思い手に取ってみる。

「何っ!?!」

そこにはなんと……………濃度100倍の文字があった。しかも端っこにすごく小さく。

「……………」

うん、間違いなく死ぬな、コレは。つーか死なないヤツはいないだろう。

『えーつと……………カオスジュースで自爆した人がたくさんいるので残り人数は結構減ってます』

オモシロ半分で飲むな愚か者たちめ。

『あと残りは……………月代悠、朝宮華凜、青龍、間塚和馬……………あ、あと校長先生ですね』

「少なっ！っーかなんで校長が……………」

バトルロワイアルって生徒だけだよな？

「面白そうだったからじゃ」

「！！！」

いきなり校長が出てきたので身構える。

「ほっほっほっ、そう構えないでくれんかの？何も倒しに来たわけではない」

それを聞いて緊張を解く。

「確かに倒そうと思えば倒せましたね」

そうしないということは倒す気が無いということだ。

「で、何か用ですか？」

「いや、大したことじゃないんだがの。このゲームには黒幕がいると思うんじゃない。そこで月代くんの手伝って貰おうと思ってる」

黒幕を倒せば一件落着いてわけか…よし決めた。

「はい、そういうことなら喜んで」

協力宣言をした瞬間次の犠牲者が出た。

『ピンポーン はい、犠牲者がまた出ましたよ』 朝宮華凜と間塚和馬でっす!』

「む、これはいかん。早く黒幕を倒さねば手遅れになるぞ」

いや、もう手遅れな気がするんですけど。

「月代くん!逃げるんじゃ!.....ひでぶっ」

秘孔を突かれたハー○様のように奇声をあげて死んでしまう校長。しかもきれいな死に顔だ。

「誰だっ!?!」

「私だよっ」

ヒャッハウ、って感じで飛びかかってくる青龍。もちろんその手には青龍刀を持っている。

とっさに持っていたナイフで刀を受け止める。

「青龍!?!お前何してんだ?」

「いや、メルヘンだね」

意味わからん。つーかいい感じに壊れちゃってるのは気のせいかな?

「イエイ」

ふんふんふーん、と鼻歌交じりで刀を繰り出してくる。ノリノリだ。くそっ、このままでは俺がやられてしまう。ここはアレを使うか。

「秘技・よそ見」

すっ、と某ボクシング漫画の青木のようによそ見をする。当然、青龍は引っ掛かっているはず……………。

「何やってるの?」

「はうっ、効いてない!」?

「隙あり」

ぱっさりと袈裟斬りされる俺。

ああ、出だしからなんか死亡フラグが立ってね?って思ってたんだよな〜。

「ふふふ、優勝だよ……………私が新世界の神になる」

青龍も壊れてるし……………。

「……………ガクッ」

B A D E N D

「って、んなわけあるか————!!」

ガバツ、とかつてない勢いで起床する。

「……………夢か」

どうやら滅多に飲まない酒のせいで悪い夢を見てしまったようだ。

「何だったんだ、あの夢は……………」

寝汗べっとりで気持ち悪い。しかも拳はナイフを強く握っている。

「あれ〜？なんでナイフなんか持ってたんだろう？」

寝汗の次は冷や汗がダラダラ出てきた。

ダメだ、これは深く考えてはいけない、と脳が必死に訴えてくる。

「わ、忘れよう」

こうして不思議な夢は心の片隅、記憶の奥深くに封印されることとなった。

ん？っーか黒幕って誰だったんだ？

第14話 バトルロワイアル（後書き）

久しぶりに書いたからもの凄く雑です（^|^-）しかも内容が意味わからん（´・`・:~:~:）ぶつちゃけいいネタがない…orz

第15話 Cooking

夏休み直前のある日のホームルーム。

「……ということでもう少しで夏休みに入る。これから欠席すると二学期に休んだことになるからなるべく休むなよ」

手短に話を終え、担任はさっさと教室から出て行ってしまった。

「俺も帰るか」

別に予定はないが今日はなんか早く帰りたい気分。

「ユウ〜帰ろ〜」

「ああ」

いつものように青龍と華凜の二人組と家に帰る。

「そついえばせーちゃんの家ってどんな所なの？」

「そついえばそうだな、どんな所なんだ？」

神獣のことは喋るな、とアイコンタクト。

前に神獣の世界みたいなものがあるって聞いたことはあつたけどな。

「ん〜？あんまり上手く説明できないんだけどね、ここと変わらな

いよ」

「へえ〜……あ、私こっちだから、じゃあまた明日」

「じゃあな」

「バイバイ」

華凜と別れる。

んーこうして青龍と二人で帰るのも当たり前になってきてるな。あの時はまさかこうなるとは思ってなかった。

「ねえユウ」

「なんだ？」

「今日の晩ご飯何〜？」

「決めてない、というか青龍も料理くらい出来るようになった方がいいんじゃないか？」

「ええ〜」

ユウが作るからいいじゃん、とでも言っつよつに青龍はジト目で見てくる。

「む〜ユウが作るから私は作らなくていいと思っけどな〜」

「俺が居ない時はどうするっ？」

「うっ、そっそれは……あっインスタント食品を買い込んでおけば……」

「体に悪いぞ？」

「うっじゃあ……ユウが作り置きを……」

「俺はお手伝いさんじゃねえー！」

どちらにせよ料理は覚える気はないらしい。

「ま、まあその問題は保留ということ……」

「まったく……そんなんじゃ嫁に行けないぞ」

「んーその時は……あっ、ユウ！」

もっもしや、この状況は……。

『ユウのお嫁さんになるからいいよ』
とかいうベタな展開の予感。

「私のメイドになって！」

「……………」

……全然違った。

「あのな、さっきもお手伝いさんじゃないって言ったばっかだからだよな？」

「ユウは料理上手だから大丈夫だよ！」

拳を握って力説されても全然嬉しくない。というか会話になってないのは気のせいかな？

「……………もういいや」

「ユ、ユウ。そんなに落ち込まなくても……………」

そして俺が落ち込んでいる間に家に着いた。

「なあ青龍、少しいいから料理覚えような」

「ええー」

本日二回目のええー。

「じゃあ手伝いだけでもして下さい」

「うーん、それくらいなら出来ると思うけど……………」

というわけで青龍と一緒に調理開始。

今日のメニューは肉じゃが。

「とりあえず……………ジャガイモの皮を剥いてくれ」

「わかった」

料理ができないって言うっても皮むきくらいはできるだろう。

「お、なかなか上手いぞ」

「本当？」

料理ができないって言ってたけど全然できないというわけじゃないんだな。

「じゃあ次はタマネギ切って」

「りょくかい」

青龍に下拵えを任せている間に俺は他のをやるう。

「……………」

「……………」

黙々と作業を続ける二人。

「よし、味噌汁はこんなところか。青龍、終わったか？」

味見をしながら話し掛ける。

「まだまだよ」

なんかタマネギだけに時間が掛かりすぎてない？

「というかタマネギって皮が厚いね」

「もしや……………」

青龍の方を見るとタマネギがすぐくちつさくなっていた。

「猿かつ！青龍、タマネギは茶色の皮だけ剥けばいいんだぞ？」

「……………！！？」

ガガーン、という効果音が聞こえて来そうなくらいショックを受けている。

体勢で表すと、orz、こんな感じだ。

「まあ失敗もあるから気にするな」

「……………猿つて」

落ち込んでいるのは俺のせいだった。

猿つてタマネギ渡すとずっと皮を剥き続けるんじゃないかな？
つとそんなことはどうでもいいか。

「ま、下拵えは大体終わってるから一人でも直ぐに出来るか」

orz、な状態の青龍をほったらかしにして料理を完成させる。

「出来た……………青龍くメシだぞ？」

「……………はっ！？私は一体何を？」

あまりのショックに脳が休止していたらしい。

「夕食だぞ」

「え？あ、うん」

こうして青龍の初料理は終わった。

「ねえユウ？私ってなんであんな状態になってたんだっけ？」

「さあ？」

俺が猿って言ったから、とか言ったら怒るだろうな、なんてことを考えながらその日の夕食は無事に終了した。

第15話 C o o k i n g (後書き)

書き方が雑です) - - () もっといい文章を書きたい…… orz

第16話 夏休み突入！

今日は一学期の最終日、つまり明日から夏休みというわけだ。教室の中も心なしかザワザワしている。

「ユウ、なんで私の成績表だけないんだよう」

青龍は自分だけ成績表がないのが不満らしい。

「しょうがないだろ、途中から入ったんだしテストも受けてないんだから」

「む、でも授業は受けたよ？」

「まあ二学期から貰えるからいいじゃないか」

「それはそうだけど……」

青龍は納得していないようだ。

「じゃあ納得できる例を見てもらおう。」

「成績表も貰わない方がいい奴だっているんだぞ？ほら、例えば和馬」

今まさに成績表を開こうとしている和馬を指差す。

少し躊躇った後に恐る恐る成績表を開くと………がつくりと肩を落とした。

「な？」

「あれは和馬だからなんじゃ……………」

「それを言ったらおしまいだぞ？」

「まあそれもそうだね」

話を逸らしたところで担任から、連絡事項が伝えられた。

それから大したこともなく一学期最後のホームルームが終了した。

「あゝ一学期もやっと終わったー」

先ほど落ち込んでいたのが嘘のように元気になった和馬。

「今年はさっさと宿題を終わらせて遊ぶぜー！」

そう言つて和馬は教室を飛び出していった。

なんか小学生の時もあんなヤツいたな。んでそいつは、計画倒れになる、というセオリーを見事実行してくれた。

「俺は今年もコツコツやってくか」

「宿題かゝ面倒臭いな」

「ふっふっふっ、お困りのようですね、青龍さん」

遊沢が時代劇の越後屋のように悪い笑みを浮かべて近寄ってきた。

「宴〜なんか楽な方法ないかな〜？」

そんなこと言ったら遊沢の言うことは決まったようなもんだ。

「ある、と言ったらあるけど〜」

「何!？」

チラリと流し目でこちらを見てくる遊沢。

「っーか青龍、食いつきすぎだ。」

「その方法は……………」

「方法は？」

「ツツキーのを写す!」

「おお〜〜パチパチ」

「やっぱりな……………っーか青龍、拍手するな!」

どう?完璧でしょ?、とばかりに言い放った遊沢は俺の宿題を写す気満々のようだ。

「なあ、華凜もなんか言ってくれよ」

「えっ、私!？」

傍観に徹していた華凜はいきなり話を振られて困り顔、というか苦笑している。

「ユウくん、ここは潔く……………ね？」

う、裏切り者お！

ああ隊長、俺は既に敵に囲まれていたようです。

「ちくしょー、写したきゃ写せっ」

「ふっ、これぞ多数決の原則なり」

「やった、これで宿題の枷から解放だよっ！」

「ユウくん、私も……………」

くっそー、どいつもこいつも。少数意見も反映しやがれっ。

「じゃあ早速遊びの計画を」

ただだっー、つと遊沢は凄い勢いで走り去っていった。

「……………遊びの計画って気になるね。なんだろう？」

「さあ？遊沢にもいろいろあるんだろ」

いらんことを考えてきそっで不安だ。

「それじゃあ私たちも帰ろ」

「そっだね」

「ああ」

そしていつものように帰宅。

明日から夏休みだと思うとなんか気が楽だね、なんて思いつつ玄関のカギを開けようとする。……が

「あれ？開いてる？」

不思議に思いながらドアを開ける。

「おかしいな、朝はしっかり閉めたはず……………」

半分くらいまで開けたドアをバタンツ、と思いつきり閉めた。

「どうしたの？」

「うーん？疲れてるのかな、幻覚が見える」

「幻覚？」

「うん、幻覚」

今日は宿題の件で精神すり減っているのかもしれない。味方もいなかったし。

「幻覚ではないぞ、少年。それと久しぶりだね、青龍ちゃん」

「ち、父上！？」

俺の現実逃避は数秒で終わりを告げた。

「はあくなんで勝手に俺ん家が上がってるんですか」

いつまでも外にいるわけにはいかないので玄関に入る。

「そもそも、どうやって入ったんですか？」

「大家さんに言って開けてもらったよ」

……… 大家さん、俺が鍵をかける意味ないじゃないですか。
防犯できねー、と思いつつ部屋に入っていく。………が

「……………誰？」

部屋に入ると大和撫子という言葉がぴったりの女性が寛いでいた。
つか前にもあったな、こんなこと。

「母さんまで！なんで!？」

母さんって……………若っ!?!どう見ても三十代前半なんですけど………。

「あ、お邪魔してます」

「ど、どうも……………でもなんで二人揃って？」

「前に少年の料理を食べに来ると言っていたじゃないか」

あくそんなこと言ってたような気がする。了承してないけどな。

「ごめんなさいね、いきなり押しかけちゃって」

「いえ大丈夫です」

おお、なんか青龍のお母さんって常識人っぽいぞ。

「じゃあ料理作りますんで」

早速料理を作り始める。居間からは家族団欒の音が聞こえてくる。なんか他人の家に居るような気分だ。

「仲が良いんだな」

なんとなく呟いてみる。つーか仲が良いのはいいことだけど自分たちの夕食くらい自分で作れよ。

「……………おっと手が止まってた」

なんか俺って損してね？と思いついて調理を再開する。
と、

「月代くん？何か手伝いましょうか？」青龍のお母さんから声が掛かった。

「そうしてくれると助かります。ええと……………」

「あ、自己紹介がまだだったわね。私は紗夕ゆきって言うの、気軽に紗夕さんって呼んでね」

「月代悠です。よろしくお願いします、紗夕さん」

ほわ〜ん、とした感じの紗夕さんと自己紹介が済んだところで再び調理再開。

さすがに二人ということもあっていつもより早く料理が出来た。

「出来ました」

「出来たわよ〜」

紗夕さんと二人で夕食を運ぶ。

少くらしい人数が多い方が賑やかでいいな、なんてことを思っていると、紗夕さんの皿に大量の料理が乗っていることに気づいた。

「……………紗夕さんってかなりご飯食べますね」

確実に青龍以上に食べている。

「え〜そんなこと……………モグモグ……………ないわよ〜」

「……………」

青龍の大食いは遺伝だと判明したところで夕食は終了した。そして、いつもの食後のお茶。

「今回の料理もなかなかのモノだったな、少年」

「いつも通りだけど、美味しかったよ」

「月代くんはお料理上手なのね〜」

「どうも」

やはり自分が作った料理を褒めてもらえると嬉しい。

「月代くんも大変でしょう？この子、よく食べるから」

「む」

あなたがそれを言いますか…。

「まあ大変ですけど……それほど大変じゃありませんよ。俺の料理を美味しいって言うってくれるのは嬉しいし」

へえ、と感心した顔になる紗夕さん。青龍は俺の言葉を聞いて嬉しそうに頷いている。

で、閏龍さんは熱心にテレビを見ていた。

「閏龍さん、それ面白いですか？」

閏龍さんが見ているのは普通のバラエティー番組。

「……………別に」

「沢尻かつー!!」

「予想通りのツッコミをするな、少年。しかしネタが少し古いぞ？」

「悪かったな、古くて予想通りで」

つーか、アンタが誘導したんだろうが。まったく、何をしたいんだ

この人は…。

「ね？父上とユウって仲良いでしょ？」

「そうね〜」

あっちはあっちで結構盛り上がっているようだ。

「そういえば閏龍さん。少し聞いていいですか？」

「何だい？」

「紗夕さんっていくつなんですか？結構若く見えますけど……………」

「うーん…私と同じ位だったと思うが」

「そうですか……………って閏龍さんの年知りませんよ？」

「私の年は秘密だ、秘密主義なのでね」

「……………秘密主義、ですか」

ニヤリと笑う閏龍さん。そして、それを見て疑いの目を向ける俺。
すると閏龍さんは少しひるんで、

「う……………まあ秘密主義というのは嘘だ」

嘘を白状した。

「しかし少年、女性の年齢を聞くのは失礼ではないか？」

「……………そう、ですね」

はぐらかされた感が強いがしょうがない。
その後、しばらく四人で談笑していた。

「あら、もうこんな時間。今日は青龍ちゃんに合いに来たついでに実家に寄らなきゃいけなかったわ」

「そうだったな」

青龍の他にも用事があつたらしい。

「そういうことで、もう帰るわね。またね、青龍ちゃん、月代くん。今度はウチに遊びに来てね」

「青龍ちゃん、元気だね。少年、今日はいきなりで済まなかったな」

「いえ、こうして四人で食事するのもたまにはいいもんです」

「父上と母さんも元気でね、バイバーイ」

二人を見送った後、ふと疑問が湧いてきた。

「なあ青龍、紗夕さんの実家って人間界にあるのか？」

「ん？母さんは人間だから実家が人間界にあるのは普通じゃない？」

「え？人間？」

「そう、人間」

紗夕さんって人間!?

ということとは……………

「青龍って……………」

「うん？神獣と人間のハーフだけど？」

「それ初耳だぞ」

「何か問題…あった？」

少し不安そうな顔で尋ねくる。

「いや問題ない。少し驚いただけだ」

「そう、よかった」

「ただ、俺って青龍のこと何も知らないなー、って思っただけ」

「え？何？」

「いや、何でもない」

青龍が何者だ、とか関係ない。俺は俺のやりたいようにやるだけだ。

「何も知らないなら少しずつ知っていけばいいよ、時間はたくさんあるんだし」

「そうだな」

「そう、世の中には私の知らない美味しい食べ物はまだまだたくさん……………」

「……………」

どんな食べ物を想像しているのか青龍はにやけている。

というか、こちらの言ったことは断片的にしか聞こえていないようだ。

「食べ物の力はすごいな、うん」

と、今日は妙なことを悟った日だった。

第17話 始動！？遊沢計画！（前書き）

今回は途中で視点が切り替わります。読みにくかったらゴメンナ
サイm(| |) m

第17話 始動！？遊沢計画！

「あゝ平和だな」

お茶を飲みながら間延びした声で言う。

今日は青龍はいない。というか華凜と遊沢と買い物に行っている。この暑い中ご苦労なことだ。

「しかし一人だと静かだ」

静かなのはいいけど……暇だ。こついつとき趣味とかあったら便利だよな。

「趣味か……よし、今日は趣味を探そう！」

暇つぶしにもなるし今後の暇つぶしにも役立つ。つまり一石二鳥だ。

「もはや……俺って天才？」

……やめよう。なんか一人で言うて虚しくなってきた。まずは家の中で探すか。

「家の中で出来ることってあんまりないな」

とりあえず押し入れの中を探してみる。……が、大したものが出てくるはずもなく。

「……………何も無い」

くそ〜ここで妥協したら負けな気がするぜ。というところでもう少し探してみることにする。

ガサガサ……………ガサガサ……………

「……………おっ！謎のダンボール発見！」

少々怪しい気もするが今は暇ときている。なのでダンボールを開ける気満々である。

「ただの箱かパンドラの箱か……………どっちだ」

変なモノ出てきたら嫌だなあ、なんてことを思いつつ勢いよく箱を開ける。

結果は……………普通の箱。しかも中はごちゃごちゃしている。つーかこれって俺が引っ越しする時に親父から持たされたやつじゃね？

「なんか少し期待した分だけ損した気がする」

とりあえず中身を漁ってみるか。

「ん〜どれどれ……………」

なんか面白いもんは……………。

「おお、碁盤と碁石か懐かしいな」

昔は親父とよく五目並べとかやったな。しかし一人じゃ出来ない。ということは………全っ然意味ないじゃん。

「他はっ!?………将棋盤発見!」

………碁盤と同じく却下。ああ神様、まともなモノがないです。

「次は………けん玉発見!これはこれで暇つぶしになる………のか?」

ともかくけん玉で遊んでみる。

「ほっ!よっ!はっ!………全然出来ねえ」

………予想以上に難しかった。

「はあ、室内の暇つぶしは諦めよう」

なるべく外には出たくなかったがしょうがない。決断した所でさっそく外へ出る。

「………暑い」

なんか外に出たら急激に行く気がなくなってきた。

「フアイト、俺」

自分で自分を励ましながら散策を始める。

「青龍たち何してんだろーな」

一方、青龍たちは

私は今、前にユウと来たあのデパートに来ている。

「ねえねえ華凜、今からなにをするの？」

「さあ？私も宴ちゃんに呼び出されたから……」

華凜もいきなり呼び出されたらしく少し困っているように見える。
「というか約束の時間を過ぎてるんだよね。」

「遅いね」

「うん」

本当に来るのかな、なんて思っていると、

「あ、いたいた。華凜ー青龍ー」

宴がやってきた。

「ごめん、遅れちった」

「それは別にいいけど、今日は何するの？」

「一番疑問に思っていたことを口にする。」

「今日は水着を買おうと思ってね」

「宴ちゃん海水浴に行くの？」

「何のために呼んだと思ってんの。あたしだけじゃなくて華凜たちも行くんだよ？」

「ということは私も入ってるんだね。」

「ええっ！？……私水着はちよつと……」

華凜はあまり乗り気じゃないみたいだね。

「宴、他は？」

「もちろん道具持ちとしてツッキーと和馬も同行決定してるけど？」

「たぶんこのことは知らされていない。ユウ、驚くだろうな。それと和馬は……ご愁傷様だね。いろいろ考えていると華凜がいきなり、」

「私頑張る！」

「うわっ華凜、急に大きな声出さないでよ」

「私もびっくりしたよ」大声で何か決意を叫んだ。一体何の決意だったんだろ？

「う、うめん」

「それにしてもすごい気合いの入り方だね」

「そうかな、あははは……」

「じゃ、水着見に行くぞ？」

「という事でお店に行く。」

「うわあ、水着っていろんな種類があるんだね」

色とりどりの水着に目を奪われる。

「あれ？青龍ってこういうトコ来たことない？」

「うん！初めてだよ！」

「へえ、じゃあ今まで水着ってどうしてたの？」

「え……えーっと、プライベートで泳ぎに行ったことない……かな？」

「じゃあ今度が初海水浴か」

ふう、危なかった。神獣のことはユウから口止めされてたよ。

「宴ちゃん！せーちゃん！早く選ばようよ」

華凛は待ちきれないのかもつ水着を物色している。

「な、なんか今日は迫力が違うね」

「そんじゃ、あたしたちも選びますか」

私と宴も選ぶことにする。

「どれにしようかなー」

ちよつとテンション高めで選んでいると、

「青龍？こんなどつ？」

宴が水着を持ってきた。

持ってきたのは、隠れる部分がちよこーっとなかない水着。

「ぶっ……………それ誰が着るの？」

「もちろん青龍に決まってるでしょ」

「わ、私はもつと地味なやつでいいかな？……………」

宴はそつかあ、と言いながらまた物色しに行く。

そついえば華凜は決まったのかな？

「華凜、決まった？」

「せーちゃん！ま、まだ決まってるないんだけど……………」

華凜は手に持っていたものをサツ、つと後ろへ隠した。

「なんだ？もう決まってるんだね」

「ま、まだ決まったわけじゃないけど…」

なんか歯切れが悪いね。よし、ここは……。

「華凛、それ見せて」

「あつ」

後ろに隠した水着をひょい、と取る。

華凛が持っていたのは、宴が選んだような生地がちょっとしか付いていない水着。

「ぶっ……これはまた派手だね」

「えっ、そ、そうかな？」

気合い入りすぎタヨ。

「せ、せーちゃんも早く選んだほうがいいんじゃないかな？」

「そうだね」

うーん、何にしようかな？あんまり派手じゃないやつがいいんだけど……。

「……………」

選ぶこと数十分、三人とも買うものが決まった。

その後、少し遊んでいこうということになり、ゲームセンターで宴のギャンブルの才能（本人が言うには遊びの才能らしい）が発揮さ

れることとなった。

「……はあ、疲れた。丸一日無駄にした」

今日は趣味を探しにいろいろな所を歩き回ったが、これといったものもなく収穫ゼロで家に帰ってきた。

「ん？青龍帰ってきてんのか………ただいま」

「あ、おかえりー」

低いテンションのまま食事を作り、低いテンションのまま夕食を済ませる。

いつものお茶の時間になってもテンションは低いまま。

「ねーねー！！今日はどこ行ってたの？」

「叫ばなくても聞こえてるって」

なんかテンション高くね？でも俺はバリバリのローテンションだ。

「うわー、なんかテンション低いね」

「まあな。そう言う青龍はテンション高いな。なんかいいことでもあったのか？」

「うん！今度、宴がみんなと海水浴に行くんだよ！それとユウは道具持ち要員だから来いだって」

青龍は更に俺のテンションを下げることを言ってくれた。

「マジか？」

「うん、マジ」

「決定事項？」

「うん、決定事項。というかもう水着も買ってるよ？」

……遊沢め、抜かりないな。

「しょうがない、行くしかないか」

「さすがユウ！そう言つと思つたよ」

誉められても嬉しくないし。つーか行かないという選択肢は準備されてないだろう。多分。

「なんかユウも大変だねえ」

「ああ、まっただ」

その大変な理由はあなたにもあるんですよ？青龍サン。

「というか日程とか決まってるのか？」

「ん〜？決めてるんじゃない？」

「……………不安だ」

行き当たりばったりとかじゃないよな？

「夏休み前に計画立てるって言ってたやつだと思っよっ。」

「そんなことも言ってたな」

「だから安心していいと思っよ」

「そうか……………」

口ではそう言ったもののすごく不安だ。というか青龍って楽観的すぎる。羨ましいくらいに。

「ふう…まあなるようになるか」

俺もそのポジティブさを見習ってみる。

「楽しみだねえ、海水浴」

青龍は浮かれてしまっている。

海水浴はいいけど、どんな災難が降ってくるのかな？

「……………やっぱ不安だ」

いらんことを考えたせいで不安が増してきた。

「きっと楽しいよ！」

「そうだな」

「ええっ！なんで投げやりなの！？」

その後、青龍と話している時も何も起きないことを祈っていたのは俺だけの秘密だ。

第17話 始動！？遊沢計画！（後書き）

今回は悠視点と青龍視点に分けて書いてみました（＾－＾）青龍視
点はムズカシイ（＾|＾；）

第18話 宿題と正夢

「ねえツッキー、ココわかないんだけど答え写させて」

「自分の宿題なんだから自分でやれ！」

「ユウくん、あとどれくらいで終わるのー？終わったら手伝ってー」

「華凜はやれば出来る子だから自分でやりなさい！」

「ユ、ユウくんが先生みたいな喋り方になった！？」

「スラスラ解けるよ」

「おう青龍、そりゃよかった。でもそんなことは口に出さなくていいぞー？」

「悠、早くしないと写せないじゃないかー」

「和馬、マジメにしないと…殺すぞ？」

「ひい、み、みんな聞いた！？この人、今殺すって言いましたよ！？」

「うるさい……死ね」

本当にうるさい。というか、この劣悪な学習環境はなんだ？

宿題くらい自分の家でしろってんだ。

「はあ〜〜」

大きなため息をつく。

なんか考えるのも面倒になってきた。そもそもなんでこんなことになっただんだ？

「はあ」

もう一度、ため息をついて事の発端を思い出す。

事の発端は一時間前

「今日は宿題でもやるか」

「一応言っておくけど別に暇だからじゃないぞ？」

「まずは……………現国だな」

現国の課題は……………と問題集を解けばいいんだな。

「あれ？ユウ、何やってるの？」

「夏休みの課題。というか青龍もさっさと終わらせたほうがいいぞ」

「うん、じゃあ私も一緒にやる」

〜

「あ、電話だ…もしもし？」

青龍は電話しているから、俺はさっさと進めるか。

「……………」

「うん、わかったよ……………」
「ウー、宴たちもさっさと宿題終わらせたいから来るって〜」

「何っ!?!?」

で現在に至る、って。

宿題しよう、という意志はあるようだが…何故、俺んちなんだ？
自分の家のほうが集中できるだろ、普通。

「なあ悠、こじこじ……………」

「……………」

「うっ、なんだその無言の圧力は」

「……………」

「ち、ちょっと聞こうとただけじゃないか」

無言でプレッシャーをかけ続ける。そうすると和馬はしびしび自分で解き始めた。

「……………」

「……………」

それから数時間、俺たちは黙々と宿題を消化していった。

「あゝ、もうダメ！疲れた！」

「私も」

遊沢と華凜は集中が切れたようだ。

「くか」

青龍は爆睡中。

前半で飛ばしてたからな。

そして和馬は……………。

「あゝあゝあゝおおおおお」

一応宿題は片付いたようだが、なんか変な声を出していた。

つか魂っぽいのはみ出てね？まあ大したことじゃなさそうだから放っておくか。

「……………俺も疲れた」

…いろいろと。

それにしても、今日は決めていたノルマよりかなり進んだな。

「ふー華凜、もう帰らない？結構宿題消費したでしょ？」

「うん」

「どうやら遊沢と華凜はもう帰るらしい。」

「ん？もう帰るのか？」

「もともと宿題やるために来たんだしね」

「そうか」

「遊沢にしてはやけにあっさりとしている。何かあるのか？
普通ならこれから遊ぶとか言いそうだけど。」

「ついでに和馬も連れて行ってくれ」

「了解。ま、目を覚まसानかったらその辺に捨てていくけど
安心して和馬をずるずると引っ張っていく遊沢。
ホラー映画に出てきそうな画だな。」

「う、宴ちゃん、和馬くんの扱いがぞんざいすぎじゃない？」

「確かに」

「えー、コイツの扱いはこんなもんでしょ？」

「確かに」

「ユウくん、一体どっちななの……」

「どちらかと言つと遊沢の方だな」

うん、和馬の扱いはあんなもんだ。

…で、結局引つ張られていく和馬。

捨てられる前までには目を覚ませよ、と思いながら三人を見送る。

「しっかし、今日は疲れたな」

本日二回目の疲れた発言。

青龍は今も爆睡中。

「よく寝てらっしゃる」

ここまで気持ち良さそうに爆睡されたら起こすのもアレなんでそのまま寝かせておく。

宿題もこれ以上する気はないので、今日の夕飯は何にしようかな？などと考えつつ、ぼーっとする。

「すう…すう…」

「……………」

そうすると必然的に青龍の寝息しか聞こえなくなる。

そしてぼーっとして時間が経ち。

「…すう…すう…」

「……………飽きた」

飽きた。俺って実は飽きっぽいのか？やることもないので青龍をじ

「……と観察。」

気持ち良さそうに寝てるな。

うーん、やっぱり青龍って整った顔してるな。これでお淑やかな性格だったら……絵に描いたようなお嬢様キャラになるだろうな。つかどんな感じだ？

「……………」

喋り方もお嬢様口調……………ですわー、とか？
フリフリのドレスに……………髪は縦ロール。

「ぶっ……………ダメだ、似合わねえ」

「……………ん……………ユ、ユウ……………」

やばっ、起こしたか？

「……………すう……………」

「なんだ……………寝言か」

つーか寝言に俺の名前って……………ちょっと恥ずかしいな……………
というか、どんな夢見てんだ？

「……………ユウ……………す……………」

す……………？……………というこは……………まさか……………！

「……………す……………す……………す……………」

キ、キターー（・）（・）ー！ー！ー！

「……すき焼き……食べたい……ムニャムニャ」

ち、違ったー！ー！ー！。少しでも勘違いした自分が恥ずかしいぜー！ー！。

っーか食べ物の夢かよっ！

「すき焼きか……」

まあ今日はリクエスト（寝言）に答えてすき焼きにするか。そうと決まれば調理開始。さっさと夕飯を作り終わる。

「おい、青龍起きろー」

「……すう……」

なかなか起きないので、青龍の頬をぺちぺちと叩く。

「……う、うーん……」

「起きろー」

「……な、生卵っ！」

「うおっ！？」

いきなりガバツと起き上がった。

しかも生卵って……。そりゃすき焼きには定番だけどな……。

「びっくりした」

「あれえ？……ああ夢かあ、美味しかったのになあ……」

「青龍、すき焼きの夢見てただろ？」

「一応ではあるが聞いてみる。」

「ど、どうしてそれを…まさかユウ、人の夢を共有するという特殊能力を……」

「持ってねえよ！」

そんな能力があっても役に立たないだろ。

「青龍、すき焼き…って寝言言ってたぞ」

「う、それは恥ずかしいね」

「だから今日の夕食はすき焼きにしてみた」

「えっホント！？やったー」

本当に嬉しそうに喜ぶ青龍。

これだけ喜んでもらえるなら作ったかいがあったな。

「正夢だね」

「これ正夢って言うのか？」

「どっちでもいいよ〜」

青龍は夕食の時間はもちろん、食後もご機嫌だった。
恐るべし食べ物の魔力!!

第18話 宿題と正夢（後書き）

これが今年最後の更新になると思います（^^；）

第19話 海と太陽と遊沢計画

車に揺られることすでに3時間。俺たちは遊沢の計画とやらで海に向かっていた。

車に乗っているのは5人+運転手。

「はあ…まだ着かないのか」

「ははは、もう少しで着くよ」

俺の独り言にも律儀に答えてくれる男性。

車を運転しているこの男性は、遊沢のお兄さんの誠まことさん。

誠さんは名前の通り誠実な人で、趣味は読者らしい。

遊沢を悪く言うつもりはないが、どうしても兄と妹でこう差が出るんだ？…趣味とか。

「着いたよ」

いろいろ考えているうちに着いたようだ。

「すみません、わざわざ送ってもらって」

「いやいや、どうせウチの妹が言い出したことなんだろう？…これくらいどつってことないよ」

さすが遊沢の兄。よく分かってらっしゃる。

「んじゃ、兄貴。明日の昼にまたここに来ておいて」

「はいはい、分かってますよ」

「やれやれ、と言った感じの誠さん。」

「うーん、本当にいい人だ。」

「じゃあ、僕は帰るから。宴、あんまり無理するんじゃないぞ」

「わかってるって」

「月代くん、間塚くん。女の子は男が守らなきゃダメだよ」

「はい、わかりました」

と口では言ったものの、こいつらなら守らなくていいんじゃないかね？というのが本音だったりする。ぶっちゃけ青龍一人で余裕でシメれるぞ？その辺のマフィアとか。

「じゃあまた明日」

そう言っただけで誠さんは去っていく。

「…また明日か」

そう、また明日、なのだ。

日帰りだと思っていいたら昨日の夜に、一泊するからそのつもりヨロシク！、なんて電話を掛けてきやがった。

「まずは今日の宿に行こう」

宿、と言ってもホテルらしい。遊沢がスーパーのくじ引きで当てたとか何とか。

「それにしても遊沢って運がいいな。くじ引きって言ってもそうそう当たるもんじゃないだろ」

「ふっ、ギャンブラーですから」

クールにキめる遊沢。つーかギャンブラーとくじ引きは関係あるのか？

「ね、ねえ宴ちゃん？和馬くん死にそうだけど…」

「せっかく連れきたんだからあれくらいさせないとね」

和馬は四人分の荷物を持たされている。たしかに死にそうではある。しかし遊沢は…。

「それに華凜？間塚は死にそうであって死んでないから大丈夫！」

「うん、たしかに和馬はあれくらいじゃ死なないね」

遊沢もあれだが…青龍、お前和馬を何だと思っている？一応、奴も人間だぞ。

「ゆ、悠、ヘルプ」

「和馬、人間は楽なことを体験したらキツイことはやりたくないと思う生き物なんだ」

つまりは手伝ってやらないということだ。それに俺は自分の荷物は自分で持つてるし。

「うつつ、みんなヒドいぜ」

和馬が汗だくになりながら荷物を運ぶこと数分、俺たちはホテルに到着した。

「へえ、まあまあだな」

極端にボロくもなく、お城のように凄くもない。つまり普通。

「これまあまあ、って……ツツキーってお金持ち？」

「いや？別に俺はお金持ちじゃないぞ」

「うーん…正確にはユウくんの家がお金持ちなんだけど」

何故か華凛がカミングアウト。

「へえーじゃあなんで一人暮らししてんの？」

「それはいろいろあってだな…」

これはいろいろと質問されそうな予感。メンドくせーあの説明やらと長いんだよな。

「ふーん、まあいいや。それより早くチェックインしなきゃね」

適当だ：自分から聞いておいて、まあいいや、って。ま、こっちもメンドい説明をしなくてよかったからいいけど…。

「チエックイン終わったから部屋に行こー」

チエックインが終わって早速部屋に向かう。当然、和馬が青龍たちの荷物を運ぶ。

その後、俺たちも部屋に移動する。

「なあユウ、俺の扱いつて一体…」

「耐えろ」

俺の力じゃどうすることもできません、はい。

「っーか早く俺たちも行くぞ」

「はあ、先が思いやられる」

それはこっちのセリフだ。

和馬の愚痴を聞きながらロビーに降りていく。

「あ、やっと来た。ユウたち遅いよ」

「すまん、和馬がうるさくてな」

「それじゃあ、海へゴー！」

青龍はやけにテンションが高い。

「なあ華凜？青龍、テンション高くないか？」
「うん、せーちゃん
って海水浴初めてなんだって」

「へえ、初耳だな」

「ほら、ツツキー、華凜！早く行く！」

「おう」

ホテルの近くにある海へ行く。…まあ実際は、海の近くにホテルがあるのだが。

「うわっ、人少nahmっ！」

「海水浴シーズンなんだけどな」

確かに人が少ない。でもプライベートビーチっぽくて良くない？

「間塚はまずパラソル立てて。あたしたちは着替えてくるから」

そう言うのと遊沢たちは更衣室みたいな所に入っていった。

「パラソル……」

早速パシられてるな。

「頑張れ」

ポンポン、と和馬の肩を叩いてやる。

「あ、ツッキーはボールとかに空気入れて」

「了解」

俺も働かされるのか…。

とりあえず、言われた通りに空気を入れる。

「…浮き輪なんて誰が使うんだ？」

高校生にもなって浮き輪ってあんまりだろ。

「やっと立て終わったぜ。これで場所取りなんてやらされたら俺泣いてたかも」

「ご苦労さん、人が少なくて良かったな」

俺も全部膨らましたところで青龍たちがやって来た。

「お、お待たせ。ユウくん、この水着どうかな？」

「似合ってると思うぞ」

華凛の水着は水玉模様のチューブトップのビキニ。

「これが海……この解放感、素晴らしいね」

海に向かって仁王立ちしている青龍は、普通のビキニで「アロピカルプリント」。

「おお！2人とも似合ってるぜ！」

「まあスタイルがいいからな」

青龍はバランスが良く、華凛はばいゝんって感じた。：正直、目のやり場に困ってしまう。

「わ、私ってスタイルいいのかな？」

「ああ、華凛のスタイル悪いって言ったら世の中の女性はほとんどスタイル悪いことになるだろ、多分」

そして、そんなことを世の女性に言ったら暴徒と化すだろう。

「そういえば遊沢は？何かしてるのか？」「まだ着替えてると思うけど」

「じゃあ俺たちは先に遊ぶか？」

「それでユウ、何するの？」

いつの間にか青龍が横に来ていた。

「うーん、そうだな……」

確か向こうにビーチバレーのコートがあったはずだ。

「ビーチバレーやるか」

「宴ちゃんはまだ来てないけど……いいの？」

「いいんじゃない？俺はいつもイジメられてるし」

和馬の個人的怨みがこんなところで…。

「スポーツは得意だよ」

「よし、じゃあコートに行くぞ」

結局、先に遊ぶことにしたのでコートに向かう。

「ちょっと待ったぁー！この宴サマを差し置いて何を遊ぼうとしてるかー！」

遊沢が叫びながら走ってくる。しかも遊沢は競技用の水着を着ている。

「いや、だって遊沢遅かったし…というか何故競技用の水着なんだ？」

「明らかな選択ミスだろ…それ。」

「よくぞ聞いてくれました！さすがツツキー」

そう言うと遊沢は競技用の水着を脱ぎ始めた。

「宴、脱いでもいいの？」

「いーの、いーの」

大胆かつ豪快に競技用の水着を脱いでいく遊沢。そして、競技用の

下にはスク水を着ていた。

「ちよっ…なんだよ、それ!？」

「驚いた？」

「いや、もう何も言うまい」

遊沢を遠い目で見てやる。

「こら!遠い目で見ない!」

そう言うとき遊沢は再び脱皮を始めた。そして脱皮を終えた遊沢は、ホルターネックのビキニだった。ちなみにデザインはチェック柄。

「こつちが本物でした」

「無駄に手が込んでるな」

ついか力を入れるところが違うだろ。

「全員揃ったし、行くか」

「ビーチバレーの女神と言われたあたしの实力を見せてやるっじゃない!」

「それ絶対嘘だろ」

そんなわけでビーチバレーをやることになった。チーム分けは女子対男子。

「いくよ」

青龍がサーブを出す。

「…つと和馬打て！」

俺がトスを上げ、

「合点承知！」

和馬がアタックして、

「……………きゃっ」

そして華凜に一直線。

しかも、これでどうだと言わんばかりに頭に直撃。

「あ…華凜ちゃん、ごめん」

「……………」

完全に沈黙してます、はい。

「こらーっ！間塚！こっちは女の子なんだから手加減しなさいよ！」

「だから謝ったじゃないか」

「おい、華凜！？大丈夫かー？」

明らかに大丈夫ではないのだが一応声を掛けてみる。

「ユウ、ひとつ言わせてもらうけど…どう見たって大丈夫じゃないよ」

「む、やっぱりそうか。とりあえずパラソルの所に運ぶか？」

「うん、それがいいね」

ギヤーギヤー言い合っている二人を放っておいて、気を失っている華凜をパラソルの下まで運ぶ。

「華凜も災難だったね」

「確かに。容赦なしで直撃してたもんな」

まあ、あのボールだから怪我は無いと思うけど。

「せつかく海まで来たのに何もしないのはもったいないね」

「そうだな…じゃあ泳ぐか？」

「うーん…海に来たらやってみたいことがあったんだけど」

「何だ？」

「ズバリ！スイカ割りだよ！」

確かに定番と言ったら定番だけど…。

「スイカはどうするんだ？」

「ふっ、そこは抜かりないよ」

そう言っつて青龍はどこからともなくスイカを取り出した。

「準備がいいな」

「それほどでもないよ……じゃあ、いくよ」

これまたどこからともなく取り出した目隠しを付けて構える青龍。しかも、その手には徐々に目にする青龍刀。

「ちよっ、待て青龍！…お前、それで切る気か？」

絶対、危ない。

というか『女の子が刀を振り回してます』なんて警察に通報されたら確実に捕まる。銃刀法違反で。

「当たり前だよ？……ああ、大丈夫！これ切れ味バツグンだから」

「切れ味の心配じゃない！危ないって言っつてんのに目隠ししてたら尚悪いわっ！」

「すう………はっ」

俺のツッコミを綺麗にスルーして、スイカを真っ二つにする。

「どうだった？綺麗に切れた？」

目隠しを取りながら聞いてくる。

というか、すでにスイカ割りではなくなっているのに気付いてほしい。

「ああ、もうそりゃあ見事に真っ二つになったぞ……」

「イエー！じゃあ食べやすいように……っ」と

青龍は慣れた手つきでスイカを食べやすいようにカットしていく。

「出来た〜」

「いいからもうその刀を仕舞え」

半ば呆れ気味で刀を仕舞わせる。

「まったく…青龍刀でその辺の人を両断したらどうするんだ？」

「気配で分かるから大丈夫だよ？」

さすが神獣だ。

「そんなことより早く食べようよ」

「ああ」

パクパク、と次々にスイカを食べていく青龍。
俺もつられて食べてみる。

「お、甘くて美味しい」

「うん、これなら3つはイケるね」

「三切れ？」

「当然三玉だよ？」

いや、一般人にはそりゃ無理だろ。

それと前に、いっぱい食べるのはご飯だけ、とか言ってたのは気のせいではないだろう。

「……………ん…あ……………あ、あれ？」

どうやら華凜が目を覚ましたようだ。

「華凜、大丈夫か？」

「うん…ん？私、なんで寝てたの？」

「和馬の打ったボールが頭にクリティカルヒットしたんだ」

「うーん、あんまり覚えてない…」

「けっこつ威力あつたしな」

「華凜、喉渴いてない？スイカあるよ」

「食べる？」

そうして三人でスイカを食べる。

「平和だな」

「そうだね」

「でも暑いよね」

「夏だからな」

のほほんとした時間が過ぎていく。しかし、

「君達かわいいねえ。暇そうだし俺らと今から遊ばない？」

数人の柄の悪そうなヤツらにぶち壊された。

つーか一緒に居るのに俺は無視ですか。

誠さんに、男なら女を守れ！みたいなことを言われたし…追い払うか。

「すみません、他に連れがいるんで」

「ああ？なんだデメエ？」

「なんだ、と言われても、この二人の連れとしか言いようがないな」

無視していた奴がいきなり出てきたのが気に食わないのか、ガンをくれられる。

こっちはガンくれられる覚えはない。つーか少しムカついた。

「やんのか、コラー！」

うおっ！柄だけじゃなくて頭も悪いな、絶対！

「オイ、ビビって声も出ねえか？」

「いや、ビビってないし、声も出る。アンタらが柄だけじゃなくて頭も悪いから驚いたただけだ」

「なっ、なんだと！クソがあー！」

リーダー格らしきヤンキー（チンピラA）が殴りかかってくる。それを最小限の動きで避ける。

「っと……危ないなあオイ！」

「ゴルア！」

再び殴りかかってくるチンピラA。同じように避けるが……次はチンピラAの腕をとって肩の関節を極める。

「ぐっ……」

「ふう〜」

ちよつと一息。もちろん関節は極めたまま。

後ろのチンピラ達は自分達のリーダーがやられて怖じ気づいている。

「クソツ、放しやがれ！」

「いやだ、放したらアンタ襲ってくるじゃん」

「つか、放せと言われて放す奴はいないだろ。」

「ユウ、殺っちゃいな」

「青龍…殺ったら俺、犯罪者になるだろ…」

青龍は俺の身も考えず無茶なことを言ってくる。

「お前ら！そいつらを人質にしろ！」

チンピラAの声で青龍と華凜に詰め寄るチンピラの手下。

「やめろ！」

もちろん、そんな俺の声は届かない。そして止められないと判断。ああもう、傍観しよ。

「華凜、目を閉じて耳塞いで下がってて」

「う、うん…でも、せーちゃん大丈夫なの？」

「モーマンタイ」

何故か中国語の青龍。華凜も大人しく青龍の言うことを聞いて下がっている。

「へっ、女一人で何が出来るんだ？」

「何も出来ないと思うならかかって来なよ」

「この野郎！」

「ぶっ殺せ！」

青龍の安い挑発に乗るチンピラ達。そして、あるうことかナイフなどの刃物を取り出した。

「私に剣で勝負を挑むなんて、いい度胸だね」

そう言っつて青龍刀を取り出す。

「なっ……どこから！」

チンピラ達は相当驚いている。

そりゃそつだ、初めてあれ見たとき俺も驚いたもん。

「だ、騙されるな！どうせ偽物だ！」

うんうん、誰だっつてそう思うよな。

「ぶっ」

チンピラ達のナイフを一息で両断する。

「え？」

「コレ、本物だよ？」

につこりと微笑んで、有無を言わさない威圧感を出す。神獣だけあつてすげープレッシャー！。

「た、助けて〜〜」

「逃げる〜〜」

蜘蛛の子を散らすように逃げていくチンピラ達。残ったのは俺が捕まえているチンピラAだけ。

あーあ、せっかくやめろって言ってやったのに。そしてチンピラAの少しずつ関節を極めていく。

「どうする？残ったのはアンタだけだぞ？」

「……………っ！わ、わかった。謝るから放してくれ」

「それだけじゃなくて、もうこのビーチに来るな」

「わ、わかった」

「んじゃ、いいや」

掴んでいた腕を放してやる。

「すいませんでしたー」

多分あいつらのせいでこのビーチは人が少なかったんだな。

「やっと終わった。華凜、もう目開けていいぞ」

「う、うん。ユウくん、せーちゃん大丈夫だった？」

「ああ」

「余裕だよ」

「では、続きを楽しみますか」

その後、夕方になるまで遊んでホテルに帰った。
そしていろいろと済ませて、夜。

「遊沢、今から何するんだ？」

「夏の夜と言ったら、やっぱり花火でしょ」

花火か…久しぶりにやるな。

「花火！」

「花火の王子様と言われたオレの実力を見よっ！」

「花火か〜小学生の時、ユウくんたちとやった以来だなあ」

青龍はいつでもハイテンション。和馬はいつも通り馬鹿。華凜は昔を思い出している。

まずは普通の花火から。

「おおー、久々だからなかなか綺麗に見える」

「うん、やっぱり花火はいいね」

「昔を思い出すなあ」

俺と青龍と華凜は普通の花火ながら楽しんでいる。

しかし、

「のおおおおー！ー！当たるかああー！ー！」

「ちっ、すばしっこいヤツめ」

遊沢は打ち上げ花火やロケット花火を和馬に向けて打っていた。

「死ねー！ーっ！」

「死ぬかああー！ー！……っで熱っ！」

両手に打ち上げ花火を持って和馬を狙い撃ちする遊沢。和馬は必死に逃げているが少し被弾している。

「ちっ、弾がない…！これでも食らえ！」

「げっ、それ反則だぜっ！」

打ち上げ花火が尽きた遊沢は、普通の花火に手当たり次第に着火。そして和馬に投下。

「あれは火傷するんじゃない…！」

「華凜、見るな。あれは他人だ」

「ユウって時々ヒドいよね」

青龍に言われたくはない。

「……って、もう花火ないぞ？」

遊沢が無駄に使いまくったせいだ。

「あとは……線香花火だな」

さすがにコレは武器にはならなかったようだ。派手さはないが、締めには持ってこいの花火だ。

「綺麗だね」

「うん、風情がある、って言うのかな」

「そうだな」

パチパチと線香花火を見ながら、ある夏の日の夜は更けていった。

次の日。

「……朝か……ってオイ、起きろ」

何故か俺のベッドに潜り込んでいる和馬を蹴り飛ばし顔を洗う。

「うーん、いい天気だ」

背伸びをして、僅かに残っている眠気を覚ます。

「今日で帰るのか……」

結構不安だったけど、なんだかんだでエンジョイしたな。

「オイ和馬、起きろ。起きないと置いてくぞ」

「……………あと五分」

起きる気配がないので、先に朝食を食べに行く。

「あ、おはよーユウくん」

「ユウ、おはよー」

「……………ういーす、ツッキー」

「ああ、おはよう」

青龍たちも朝食を食べに来ていたようだ。遊沢は朝が弱いのか、すごいことになっている。

「あれ？和馬くんは？」

「まだ寝てる」

席に着いて朝食を食べ始める。

つーか、朝早起きして朝食を作らなくていいってのは楽だ。

「復活！」

「うおっ！」

遊沢が復活した。

「みんな、ご飯食べたらチェックアウトね」

「了解」

食事を終えてチェックアウトの準備をする。和馬はまだ寝ている。

「いい加減起きろ！」

準備が終わって、和馬を起こす。ちなみに和馬の荷物は俺がまとめた。

「うーん……トイレ」

「じゃあ俺は先に行くぞ」

トイレに行く和馬に声をかけて、青龍たちと合流する。

「ツツキー、間塚は？」

「トイレ」

「もうすぐ兄貴来るんだけど」

「どっつするっ？」

「それまでに来なかったら置いてく」

「マジでっ？ドドくねっ？」

「マジで、そう言うならツッキーも残る？」

「いや、当然俺は帰る」

そして和馬を待つこと十数分。あいつ絶対トイレの中で寝てやがる。

「みんな揃ってる？」

誠さんが来た。

「残念、タイムリミット」

「みんな揃ってるから、帰ろうか」

当然のごとく帰ろうとする遊沢兄妹。

「和馬くんはどうするの？」

「あいつはいいヤツだった」

「いや、死んでないから」

「つか、誠さんも普通に和馬のこと忘れてないか？和馬に対して恐ろしいまでに非情な一族だ、遊沢家。」

「帰るよー！我が故郷へ！」

こうして遊沢計画は終わりを告げた。

ちなみに帰っている途中で誠さんが和馬のことを思い出して、
ンした。

Uターンした時の誠さんは顔面蒼白でかなり焦っていた。

うーん、やっぱりいい人だ。

第19話 海と太陽と遊沢計画（後書き）

久々の更新なので少し長めです（^-^）

第20話 帰省前

~~~~~

携帯が鳴る。

「着信は………つと親父か」

取るのが面倒だが一応取ってみる。

『よつ息子！元気だったか？』

「まあな」

『積もる話はないんだが、夏休みなら一回くらい家に帰って来い』

「去年は帰っただろ」

いきなりだなあ、オイ。つーか親父が追い出したんだろ。去年は初めての一人暮らしだったので仕方なく帰ったけど。

『えー』

「えー、じゃない！気色悪いから、いい歳したオッサンがそういうこと言っつなー！」

『いや、息子。それはいくら何でも酷くないか？』



ヒドいのは、あなたの思考回路です。

「だいたい親父が追い出したんだろ」

『別に追い出してない。無理やり一人暮らしさせただけだ』

それ、ほとんど意味一緒じゃない？

ぶっちゃけ家まで帰るのは面倒臭い。うーん、どうしよう？

「ユウ、誰と話してるの？ずいぶん楽しそうだね」

「いや、大して楽しくないぞ？親父だし」

俺は自分の父親と電話してウキウキするほど、ファミコンではない。

『ん？誰だ？彼女か？同棲してるのか？』

「違う」

「ユウの父上か」

そう言ってニヤリと笑う青龍。

あ、何か嫌な予感。

「ユウ、電話代わって！」

サッ、っと俺の手から携帯がなくなった。

「ちょ、待てっ！」

「もしもし、私はユウの家に居候させてもらってる青龍です」

『これはどうも、俺は悠の父親の月代徹だ』

あーあ、もうどうしようもないな。つーか、これ確実に家に帰らなくちゃいけないんじゃないかね？

……それから数分後。

「はい、コレ」

「おう」

青龍から携帯を渡される。

青龍は満面の笑み。親父とどんな話をしたか気になるな。

「ユウの父上、いい人だったよ」

「そうか、そりゃよかった……もしもし、代わったぞ」

『いいコじゃないか。家に帰ってくるついでに青龍さんも連れて来なさい。それに母さんも心配してるぞ』

「げっ、母さんが……わかったよ、いつ帰ればいい？」

結局帰るハメになったな。

『二・三日のうちには帰って来いよ』

「わかった」



今日は電話が多いな、と思いながら受話器を取る。

「もしもし、月代です」

『久しぶりだな、少年。閩龍だ』

閩龍さんから電話なんて珍しい。というか向こうにも電話ってあったのか。

「お久しぶりです、閩龍さん。どうかしましたか？」

『うん、もう学校は夏休みだろう？青龍ちゃんは夏休みくらいは家に帰ってくれないかな、と思ってね』

どこの親も考えることは一緒だな。

「ちょっと待ってください、青龍に代わります…青龍、閩龍さんから電話だぞ」

「えっ！？父上から!？」

若干驚いている青龍に電話を渡す。

「代わったよ」

青龍が電話で話しているうちにこれまでのこと、今後のことを考える。

(実家か…親父や母さんは変わってないんだろっな)

一人暮らしを始めて一年とちょっと。特に問題も無くやっていけた。初めの頃は毎日のように母さんから、寂しくないかって電話かかってきてたな。

たしかにそう感じたこともあった。今は青龍が居て毎日が忙しい、というか騒がしいからそれはない。

青龍はこれからどうするつもりだろうか。しばらくしたら出ていくのか？それともずっと居候？

さすがにそれはないだろ？

いろいろな思いが交錯する。

「うん……わかったよ。………バイバイ」

自分の思考の限界と青龍の声で現実に引き戻された。

「あゝ〜ごちゃごちゃ考えすぎだ」

「どうしたの？」

「いや、なんでもない。…で青龍は実家に帰るのか？」

聞龍さんからの電話もそういう内容だったはずだ。

「うん、家に帰って来いって言ってたよ」

「そうか、都合が合わないなら俺んちは…」

来なくていいぞ、言おうとする前に、

「都合は合わせるよ。父上もユウを連れて来いって言ってたから」

「え？マジで？」

衝撃の事実を告げられた。

「それ確定？」

「うん、もう連れてくるって言っちゃった」

「言っちゃったって……」

どうやら俺は行かなければいけないらしい。

「神獣が住む世界、か……」

大変なことになってきたな。………やっていけるのか、俺。

## 第21話 帰省〜月代家〜

「ついに来てしまった……」

大したことはないが、少し大袈裟に言ってみる。

今、俺が居るのは月代家、つまり実家だ。学校からアパートに対して真逆に行った位置にある。

門を通り、無駄に広い庭を通って玄関まで歩く。

「これがユウの家…なんかすごいね」

俺の家は青龍の言う通りすごい。何がすごいかって言うと、「ごちゃごちゃし過ぎですごい。」

まず、時代錯誤という名に相応しい洋館。そして、玄関まで歩かなくてはならない広い庭にはオブジェらしき物が置いてある。

「うん、我が実家ながらとんでもないな」

玄関（というか家の入口）まで歩く、という通常ではありえない実家の大きさを再認識しながら洋館のチャイムを鳴らす。

「はい」

中からは女性の声。そしてパタパタと走ってくる音が聞こえ、扉が開く。

「ただいま、母さん」

「あら、悠ちゃん。お帰りなさい」

出迎えたのは、俺の母、月代葵<sup>あおい</sup>である。

「悠ちゃん、言つな」

「いいじゃない、悠ちゃんは悠ちゃんなんだし」

俺が中学、高校と進学しても母さんは俺のことを悠ちゃん、と呼ぶ。いい加減止めてほしいのだが言うことを聞いてくれない。

「で、こちらの方は？パパが言つてた悠ちゃんの彼女さん？」

ずいぶん嬉しそうに聞いてくる。

「初めまして、青龍です。今、ユウの所に居候させてもらってます」

「あらあら、ご丁寧に。初めまして、悠ちゃんの母の葵です」

自己紹介をしている二人を放つといて、リビングへ向かう。

「うーん、一年ぶりだとさすがに懐かしいな」

変わってないな、と思いながらリビングの扉を開ける。

そこには、ソファーに座っている親父がいる。

「ただいま」

「よう、帰ったか」



なんとも適当な挨拶である。

「悠ちゃん、レディを置いていくなんでダメよ」

と、青龍と母さんが後ろからやってきた。

「いや、母さんが話すと長いんじゃないかと思ってね」

「ああ！また母さんって呼んでる！ママって呼んでって言うてるじゃない」

「お断りします」

ママって…小学生でも呼ばないぞ。

「うう、小さい頃はママ、ママって言うてくれてたのに」

「勝手に事実を捏造するなっ！」

よよよ、と泣き真似をする母さん。相変わらず子離れ出来ていない。

「初めまして、青龍です」

「どうも、わかっているとと思うが悠の父だ。よろしく」

俺と母さんが不毛な争いをしている間に、さっさと挨拶を済ませている青龍と親父。

「ねえねえ、悠ちゃん。青龍ちゃんってとっても良い娘ね」

「コソコソと母さんが喋り掛けてくる。」

「そう、だな…いい奴かな」

「それで、どこで引っ掛けたの？」

引っ掛けたって…なんか聞こえが悪いな。

「……………俺がナンパするように見える？」

「うーん？見えないけど…悠ちゃんはカッコいいから女の子なんて一発で落ちると思うわ」

「……………ま、母さんがどう思おうが勝手だけど、青龍はナンパとかじゃないぞ」

「じゃあ、どうやって出会ったの？」

「家の前に落ちてたから拾った」

簡潔に正確な説明をする。

「……………冗談よね？」

「本当だって」

どっちら信じてくれないらしい。

「まあ、いいわ。そのことは置いて」

「置いてくのかよ!」

「お茶取ってくるわ」

パタパタとキッチンに行く母さん。  
相変わらずよく分からん人だ。

「そういえば…親父、ちょっといいか？」

「なんだ？」

青龍と話していた親父に気になっていたことを聞く。

「あのさ、帰って来るの卒業してからでもよかったんじゃないか？」

「いや、駄目だ。お前が帰って来なかったら、母さんがお前のアパートに行くと言っただぞ」

む、なんか嫌だな、それ。

「そうか…じゃ、気になってたことも分かったし帰るよ」

いつでも帰って来れるし、長居は無用だな。

「え、ユウもう帰るの？」

「そのつもりだけど」

「まあもう少しゆっくりしていけ」

珍しく親父が親らしいことを言う。  
久しぶりに息子に会って、もっと話したいのだろう。

「親父がそう言うならまだ居るけど」

「そうか、俺は別として、母さんが喜ぶだろう」

そうか、母さんが…

「って親父は喜ばないのかよっ！」

「当たり前だ！ポケッ！葵と2人っきりのラブラブタイムを邪魔されたくないんじゃない！」

…なんつー親だ。つーかさすがの青龍も啞然としてるな。

俺も開いた口が塞がらない、というわけではないが、開いた口からはため息しか出てこない。

それにラブラブタイムって何だ？意味わかんねえ。

「どうしたの？二人とも騒がしい」

そんな力オスな空気の中、母さん登場。

「青龍ちゃんもびっくりしてるじゃない」

「あ、私のことはお気になさらず…」

青龍は苦笑い。

そりゃそうだよな。

「悠は帰るらしい。じゃあな、さっさと帰れ」

「ちよっ、待て！それは親としてどうかと思っぞ」

「駄目だ、待ったなし」

「つたく、ガキかよ。」

「パ〜パ〜？悠ちゃんがせっかく来たのになんてこと言っの？」

母さんがドスのきいた声で親父を咎める。

「な、何のことだ？…ゆ、悠、久しぶりだからゆっくりしていけよ」

「弱っ！」

恐るべきスピードの手のひら返しだ。

「悠ちゃん、ゆっくりしてたってね」

「あゝ」

今日は泊まることになりそうだ。

「ユウの母さんってすごいね」

「ん？そうか？…でも女性は強いよな」

「ゆ〜ゆ〜ちゃん、何か言った？」

「ナンデモナイデス」

月代家は女性が強い家系だということが判明した日だった。

第21話 帰省〜月代家〜（後書き）

今回はちと短めです（^^;）更新頻度と執筆速度を上げたいけど  
上がらない（T|T）

## 第22話 帰省〜幕間〜

「ふい〜疲つれた〜」

アパートに帰ると同時に座り込む。

実家に帰ってゆっくりするどころか疲れててしまった。

「なんのために帰ったかわかんねえ」

「親は子供の顔を見たいものなんだと思うよ？」

青龍が後から歩いてきてそんなことを言う。

「そんなもんか？」

「そんなもんだよ」

あの親父に関しては絶対にありえないけどな。

「とりあえず俺んちが終わったから、次は青龍の家だな」

「そつだね」

青龍は自分の家に帰れるのが嬉しいのかニコニコしている。

「いつ行くんだ？」



「えーっと、いつでもいい…と思うよ」

いつでもいいって…なんか適当だな。

「そもそも、青龍の家って何処あるんだ？神獣界とか？」

やっぱり人間界とは違うのか？

「ん〜おしいね。神獣界じゃなくて天界だよ」

「天界？」

久々に聞き慣れない単語が出てきたな。

「うーん、どう説明したらいいのかな……………要するに、神様とかが住んでる所？」

なんで疑問形なんだ？いや、そんなことより…

「神様？」

「うん、神様」

なんか人間の叡智を超えたような世界という気がするの俺だけか？

「まあいいか」

「何が？」

「いや、こっちの話し」

とりあえず行ってみたら分かるな。…できれば行きたくないけど。

「そういえば、青龍の家ってどうやって行くんだ？」

天界と聞くと、天国や雲の上にある世界を想像してしまう。  
地獄のような世界じゃありませんように。

「どうやって…鍵を開けるんだよ」

「鍵？」

「そう、天界へ続く扉の鍵」

「なんかわからんが凄そうだな」

天界へ続く扉の鍵、か…なんか言葉の響きがカッコよくな？

「そんなに仰々しいものでもないんだけどね」

「へえ」

普段は普通の女の子だが、こういう所を見るとやはり神獣なんだな、と思う。

まあ、そう思ったところで何か変わるわけでもないが。

「そもそも扉なんてどこにあるんだ？」

「前に公園に行ったの覚えてる？」

「ああ、覚えてるぞ」

青龍の父、つまり閏龍さんと戦った所だ。

「そこから行けるよ…多分」

「多分か…」

「まだ試したことないからね、ユウから追い出されることもなかったし」

危険な香りがプンプン匂ってくる。

「俺が居候させなかったら、そこから帰るつもりだったのか？」

「ううん、他の人の所に行ってたと思うよ」

「…そこは使いたくなかった？」

「そついうわけじゃ、ない…かも」

青龍の言葉の歯切れが悪くなる。

「…もしかして、そこ危ないのか？」

「私がいるから大丈夫だよ！」

やけに自信たっぷりの青龍。

…異空間に飛ばされたりしないよな？

まあ天界という時点で十分異空間なわけだが。



「なんですか？」

『青龍ちゃんの居候先の相手がどれくらいの実力が正確に知っておきたいと思う』

「はあ」

何か嫌な予感、というより、もう何か起こるの決定だ。

『それで今度、家に来る時に模擬戦をしてほしいんだ』

「模擬戦、ですか」

『そうだ。武器もありの模擬戦にしたいから、一応武器も持ってきてほしい。…無いならいいがね』

「わかりました」

『ありがとう。それでは、そういうことでよろしく頼んだよ』

受話器を置いて、またぐでーっとした体勢になろうとするが、

「……すーすー」

なんとも気持ち良さそうな顔で青龍が寝ていた。しかも、俺の居た場所、俺と同じ体勢で。

「……………」

「……すーすー」

コイツ、俺にだらけてるとか言っただけでなかったか？  
思わずツツコミたくなる衝動をなんとか抑える。

「……むにゃむにゃ」

「……まあいいか」

青龍の幸せそうな寝顔を見れたからいいか、と思いつつ、俺の意識は夢の世界へ旅立って行った。

### 第23話 帰省〜神獣〜

「……………」

ここは、とある公園。前に来た時は気が付かなかったが、住宅街には珍しく裏には林があった。

「林か…怪しいと言えば怪しいな」

扉を開くために青龍が剣を構えている。剣は青龍刀のように大きくなく、いろいろと装飾されていた。

青龍曰わく、その剣も青龍刀のように自分で出したらしい。

「うーん……………ここ、かな?……………あ、違っ……………あれ?」

「……………大丈夫かよ、オイ」

さっきから?マークばかり出している青龍に不安を覚えずにはいられない。

「もうちょっとなんだけどな」

「……………」

……………今日の空は青かった。ああ、なんていい天気なんだ。あ、鳥が飛んでる、旨いのか?…いや、マズそうだな。

「……よし、出来たよ。プロテクト解除」

「…出来たのか？」

「うん、完璧だよ！」

どうやら現実逃避をしている間に準備が出来たらしかった。  
青龍が剣で何かをしていた場所は、何も変わっていないように見える。

「何か変わったか？」

「うん、まず私が疲れたよ」

「………他は？」

「ここは別に変わってないよ？」

結局変わっていないらしい。

「失敗？」

「失礼な、成功だよ！ユウ、行くよ」

「行ってくてどこに……」

「こつち」

スッと青龍が指差した先は…林の中。



「マジで?」

「マジもマジ、大マジだよ」

「そんな所に入り口があるなら他の奴が間違っただけで入って行かないか?」

「さっきの作業は何のためだったと思ってるの?」

「あ、そうか」

さっきの現実逃避の後遺症か、頭があまり働いてないみたいだ。

「それじゃ、行くよ」

「ああ」

青龍はスタスタと林の中へ歩いていく。俺も青龍の後を付いていった。

しばらく歩くと洞窟のような所に入っていく。

「なあ、これで合ってるのか?」

「大丈夫だよ」

不安だと思った次の瞬間、洞窟の先に光が見えた。どうやら洞窟ではなくトンネルだったらしい。少し歩くとトンネルが終わり、神獣の世界（というか天界）の風景が目に見え始める。

「さあ、着いたよ…天界へようこそ」

「おおっ！これはっ！」

目の前に広がる光景、それは………人間界と何ら変わらぬ  
い街並みだった。

「なんつーか………普通だな」

「うん、普通だね」

もっと凄い所だと思っていただけに少し拍子抜けだった。……が、

「うん…普通はいいことだ！」

「ユ、ユウ、どうしたの？」

「いや、なんでもないぞー」

わけが分からん世界じゃなくてよかった。

「ユウ、早速というかそこに行かなきゃ駄目なんだけど、私の家に行くよ」

「そっだな」

青龍と並んで青龍の家を目指す。途中で何か視線を感じたり、子供に指を差されたりしたが気にしないことにした。

青龍が言うには『人間が珍しいんだよ』だそうだ。

それから数分ほど歩いたところで青龍の家に着いた。

「はい、これが私の家だよ！」

「……………マジっすか」

青龍が自分の家だと紹介した建物は和風の家。しかも、どこの武家屋敷ですか？って言いたくなるくらい大きい。門をくぐって玄関まで歩く。玄関を開けると閏龍さんが待ち構えていた。

「あ、父上。ただいま」

「おかえり、青龍ちゃん！」

ガバツと青龍に抱きつこうとする閏龍さん。しかしそれは青龍に軽く躲されてしまう。

「どうも、お久しぶりです」

「うん、久しぶりだね少年」

軽く挨拶を交わして屋敷の中に入る。

「それにしても大きいよな、この家」

「私も昔はよく迷ったよ」

自分の家で迷うなよ。

「そうそう、今は使用人たちも休みを取っているから管理も大変だ」

「使用人!？」

「そうだけど…何か驚くことでもあったかい？」

「普通は驚きますって」

まあ確かにここは広いから使用人が必要かもしれない。

「ユウの家も広いから使用人くらいいるんじゃないの？」

「いや、いない。うちは母さんがやってるな、たまに掃除とかは業者に頼んでるみたいだけど」

青龍つて実はお嬢様じゃね?と思いつつ、居間に案内される。  
居間では紗夕さんがお茶の準備をしていた。

「あゝ青龍ちゃん。おかえりなさい」

「ただいまー」

「どうも、お久しぶりです」

「月代くん、お久しぶり〜」

紗夕さんとも軽く挨拶を交わした後、座る。

「はい、どうぞ〜」

「あ、どうも」

紗夕さんからお茶を貰う。当然と言つべきか日本茶だった。

「で、少年。今日はどついつた用だね？」

「…アンタが呼んだんだろつが」

思わず拳に力が入る。

「まあ、それは冗談として…」

殴つていいつすか？この人。

「今日はゆつくりしていきなさい」

「はい」

その後、食事をしたり屋敷を案内してもらつたりしてあつという間に時間が過ぎた。  
そして、夕食後。

「少年、明日は…わかつてるね？」

「はい、模擬戦ですね…」

今日はいろいろ疲れているから模擬戦は明日にしよう、と閏龍さんと話し合つて決めた。

「後、風呂のことだが…」

「はい」

案内された時に見たが、ここの風呂はデカイ露天風呂があった。

「好きな時に入っていていいからね」

「わかりました」

なんか旅行に来たみたいだな。

「それと…青龍ちゃんの入浴シーンを覗いてはいけないよ？」

「覗かねえよ！」

「私も覗いたことがないんだからね」

「それは覗いたら覗いたで問題です！」

まったく…何考えてんだか。

「まあ、少年ならそんなことはないと思うけどね」

「…なら言わないで下さいよ」

それだけ言って閩龍さんは出ていった。

「……………じゃあ早速風呂に入るか。着替えはつと」

バッグを漁って着替えを引っ張り出す。一応、銭湯セットも持っていく。

「いざ、風呂へ！」

風呂が大きいとなぜかテンションが上がってくるから不思議だ。やっぱりデカイ風呂はいいよなー、と思いながら風呂へ向かうが…

「……………迷った」

見事に迷ってしまった。

「…か、家の中で迷うってありえなくね？」

「うん、シャレにならん」

とりあえず迷ったら、引き返すのが安全だな。いったん自分の部屋に引き返す。

「ここからは記憶との勝負だな」

よく考えたら、相当アホなことをやってるな。でも考えたら負けのような気がしたので深く考えないことにした。そして歩くこと数分。

「やっと着いた」

脱衣場は本物の旅館のようになっていた。旅館の温泉をそのまま持つてきた感じだ。

「すげ」

もしかしたら使用人たちもこの風呂を使うのかもしれない。

「それでもやりすぎだろ、これは…」

こんな所で温泉みたいな風呂に入ると思わなかった。

風呂は室内と露天に分かれた。まずは体を洗って室内の風呂に入る。

「広い」

ふと壁に目を遣ると、看板に《効能・リウマチ、関節痛》と書いてあった。

「…これ本物の温泉かよ」

住宅街によく温泉が湧いたな。

「よし、次は露天だ」

やはり露天風呂となるとなかなか入る機会がないので楽しみになってくる。外に出てみると、まさに温泉！って感じの露天風呂があった。

露天風呂は屋敷の真ん中であって四方は屋敷に囲まれている。外から見られる心配なしだ。

「こっちもすげーな」

開放感からか、自然と声が大きくなってしまふ。

しかし俺の言葉は誰にも聞かれることなく、湯煙と一緒に消えていく。……………はずなのだが。



「……………え、ユウ？」

岩の陰から青龍の声がした。どうやら先客が居たらしい。

「す、すまん、気付かなかった。俺、上がるわ」

慌てて室内の風呂に戻るうとする。

「え、い、いや。別にいいよ」

「……………はい？」

今、なんと仰いました？

「ユウもこっちに入りに来たんでしょ？」

「そ、そうだけど」

いろいろと問題があるってもんだ。

「こっちに来なければ大丈夫だよ」

「ま、まあそう言われたらそうだけどな…」

いや、それでもこの状況はマズいだろっ。

「ユウは私とお風呂入るの嫌なの？」

岩の陰から顔を出して聞いてくる。

濡れた髪、ほんのり赤くなった頬、そして上目遣い。思わず青龍の

顔をじっと見つめてしまう。

「……………」

「嫌なの？」

これだけのコンボを食らって首を横に振る奴はいないだろう。俺もその例外ではなかった。

「ま、まあ入るくらいなら問題ないだろ」

「うん！」

にっこりと笑ったその笑顔はいつも意識していない分、とても可愛く見えた。

「……」

「どっかしたの？」

「い、いや、何でもない」

そう言うと青龍はまた岩の陰に隠れてしまった。

「広いし、気持ちいいな」

「うん、そっだね」

その後、青龍と他愛もない話をして風呂から上がった。もちろん上がるのは俺から。

部屋に戻り、布団に潜り込む。

「……………」

目を閉じると青龍の髪の毛の一本一本まで思い出してしまふ。  
それにあの笑顔。瞼の裏にしっかりと焼き付いている。

「……………寝れん」

こうして月代悠の初めての天界の夜は更けていった。

## 第24話 天界1

「……………朝か」

小鳥の囁りで目を覚ます。…ってここ何処だ？

「そうか」

青龍んちに来てたんだっとな。  
寝間着から動きやすい服装に着替える。

「月代くん、起きてる？」

「あ、はい」

どうやら紗夕さんが起こしに来てくれたようだ。

「朝ご飯出来てるから」

「わかりました。すぐ行きます」

客室に備え付けてある洗面所で顔を洗い、食堂に向かう。

「なんつーか…すげー家だよなこっつて」

普通は客室があっても洗面所は付いてないだろ。そもそも客室があるってことがすごい。

ま、客室ぐらいいならうちにもあるんだけどな。

「おはようございます」

「おはよ〜」

「おはよう」

食堂に入ると閏龍さんと紗夕さんが座っていた。

「あれ？青龍はまだ来てないんですか？」

食堂に青龍の姿がないことに気付く。

「そうなの〜あの子ったらなかなか起きて来ないの〜」

「…大変ですね」

寝起きが悪いのか、アイツ。

「月代くんも大変でしょ〜？」

「いや、いつもはすぐ起きて来ますけど…」

「へえ〜不思議ね〜」

不思議、か？というか不思議で済ましていいのか？

…まあ紗夕さんなら何でも軽く受け流しそうだけど。

「…少年はどうやって起こしてたんだい？」

閏龍さんは気になるようだ。

「えっとですね…」

「まさか…おはようのキスなんてしてないだろうね!？」

「してねえよ!」

親バカというかバカ親だな。

「青龍は朝食を作ってたら勝手に起きて来るんですよ」

「……本当かい？」

「本当です!」

「…か、ここで嘘ついても意味ないだろ。」

「ふふふ、仲がいいのね、二人とも」

「そう見えますか？」

「そう見えるかい？」

見事にかぶった。ちょっとショックだ。

「ほらね、息もぴったりじゃなくない」

「…ま、それは置いて。試しに匂いを送ってみたらどうですか?」

無理矢理話を逸らす。

「それは青龍ちゃんの部屋に？」

「そうです」

「ふふふ、釣りみたいで面白いわね」

話を逸らすことが出来たのはいいが…紗夕さんがめっちゃくちゃ上機嫌なのが不安だ。

紗夕さんって結構イタズラ好きだったりするの？

「それじゃあ早速釣ってみましょ」

「表現は少しあれだが、やってみる価値はありそうだね」

そんなことに価値を見いだしてどうするんだ。

「え〜っと、これがいいわね」

紗夕さんは味噌汁をパタパタと団扇で扇ぐ。  
で、待つこと2、3分。

「来ないね」

「……………来ないっすね」

「もうお腹減ったからご飯食べましょ」

もう飽きたのか紗夕さんは朝食を食べ始めている。

「私たちも食べよう」

「そうですね」

随分諦めが早い気がするが、俺も食べ始める。

朝食はやはりと言うべきか、和食だった。その朝食を美味しく頂いていると、

「おはよー」

青龍が起きて来た。

「あら、月代くんの言った通りね」

青龍の朝食を用意しながら紗夕さんが言う。

「うーまだ眠いよ」

「はいはい、さっさと朝ご飯食べましょうね」

青龍はもぐもぐと朝食を食べ始める。

全員が朝食を食べ終わる。閏龍さんは道場に行くと言って居なくなってしまった。

「俺は…」

紗夕さんがテキパキと食器を片付け始めている。

「あ、手伝います」



「え〜それは悪いわよ〜。月代くん、お客様ですもの〜」

「いえ、気にしないで下さい」

「そ〜お？じゃあお願いね〜」

「ユウは真面目だね〜」

「これが普通だ」

お前も手伝えよ、と青龍に言いたい。

「そういえば紗夕さん、使用人がいるのに何で料理とか上手いんですか？片付けも手慣れてますし」

だいたいそういうのは使用人の仕事じゃないのか？

「ん〜知りたい〜？」

「ええ、まあ」

「それはね〜私がこつこの好きだから〜」

それなら妙に手際が良いのも頷ける。

食器を洗い終わって紗夕さんと居間に行く。

「あ、お疲れ〜」

「お疲れ様、二人とも」

居間では、青龍と閏龍さんが寛いでいた。

「道場の準備は終わったんですか？」

「ああ、終わったよ」

じゃあ、いつでもOKってわけか。

「父上とユウ、何かするの？」

「ん、まあな。聞いてないのか？」

「うん」

閏龍さんをちらりと見る。

「少年は今から私と模擬戦をやってもらおう」

「あら、そつなの〜？」

青龍も紗夕さんも話を聞かされていなかったらしい。

「うん、そついうことで今から模擬戦をやってくるよ」

「は？今からですか？」

今からなんて聞いてないぞ。

「あ、私も見たいよ」

「じゃあ〜お母さんも見る〜」

おいおい、マジかよ。

「観客が居るけどいいかい？」

「……………いいですよ」

「それでは、行こう」

観客も揃ったところで道場に移動する。

「ところで少年の武器は何だい？」

「俺の武器はこれです」

俺はそう言ってポケットからナイフを取り出す。

このナイフは、夢から覚めたら何故か手に持っていた、というなんか怪しげなものだ。

「武器はそれでいいのかい？」

「はい」

まあ大丈夫だろ。そもそも武器を使うのに慣れてないし。

「それじゃあ、青龍ちゃん。開始の合図よろしく」

パチンとナイフの刃を出す。閏龍さんの手には木刀が握られている。

「……………」

……いつ出した？

「任せて！……………よーい、始めっ」

青龍の掛け声で俺と閏龍さんの模擬戦が始まった。

第25話 天界2

青龍のかけ声とともに駆け出し、間合いを取る。

いつになく真剣な顔の閏龍さんと十分に距離を取る。

「逃げてばかりじゃダメだよ、少年」

「!?!」

10メートル以上ある間合いを一気に詰めてくる。そして、そのまま木刀を振り下ろしてくる。

「くっ」

ギリギリのところ木刀を避ける。

「まだまだ」

「……っ」

避けてスキが出来たところに蹴りを入れられるが、それを左腕でガードする。

「ほっ、よく防いだね」

「それほどでも」

避けた自分が驚いてます。つーか、痛つゝゝゝ。腕がジンジンする。やっぱガードは無謀か…それなら受け流すのが一番いいな。息つく間もなく攻撃が再開される。

「はっ」

再び閏龍さんが木刀を振り下ろしてくる。

「……………よっ」

木刀を右手にあるナイフで受け止める。しかし、だんだんと押され始める。

くそっ、このままじゃマズい。

「力比べなら負けないよ」

「そうですか…………っ」

こちらは力比べなどする気はない。ナイフの向きを変えて、木刀を流す。

バランスを崩れた閏龍さんの一瞬のスキに木刀を蹴り飛ばす。

「む」

「はっ！」

木刀を蹴り飛ばした衝撃でがら空きになった閏龍さんの脇腹に回し蹴りをする。

「うん、狙いは悪くない」

「なっ!?!」

タイミングもスピードも申し分ない。しかし片手で軽々と止められてしまう。

「驚いている暇はないよっ」

「ちっ」

閏龍さんの手には再び木刀が握られていた。

その後も木刀での連続した攻撃が続く。避けたり流したりしているが、それも時間がたつにつれてだんだんミスが多くなってきた。

「……………くっ」

蹴りやパンチを数発もらっているし、ナイフで木刀を防ぐのも限界が近い。

それなら……………勝負っ!

「ふっ」

木刀を横雑に振ってくる。それをしゃがんで避け、そこからスライディングのような足払いをする。

「それじゃあすぐに次の行動に移れないよ?」

「……………」

足払いをジャンプで避けながら木刀を振ってくる。

仰向けの状態なので次の行動まで時間がかかる。  
しかし…ここで白刃取りだっ！

「…って、うおっ！危なっ！」

木刀での攻撃を転がりながら避ける。その攻撃は振る、ではなく突くというものだった。

「うーん、毎回狙いはいいんだけどね」

「なら狙った通りにやられて下さいよ」

「それは痛いから嫌だね」

俺の数倍攻撃した人がなにを言うか。

「じゃあ次はこっちから…」

「ストップ！」

「はい？」

「大体実力はわかったから終わり」

実力がわかったって…俺の実力はどれくらいなんだ？……………知りたい。

「閏龍さん、俺どうでした？」

ナイフをポケットに仕舞いながら聞く。



「うん？知りたいかい？」

「はい」

「うーん、教えてあげてもいいんだけどね。どうしようかな？」

あまりにイラツとするじらしっぷりに仕舞ったナイフを思わず再び  
装備しそつになる。

「い、いや、冗談だよ？もちろん教えるよ？」

「ならいいんですけど…」

「ふう…少年は模擬戦より今の方が殺気立ってるよ」

「そんなことはどうでもいいです」

「うーか、それはアンタのせいだ。」

「並みの人間じゃ少年に勝てない、これが少年の評価だ」

「なんですか？その評価」

「まあとりあえず、青龍ちゃんの居候先にふさわしい人物ということだよ。それだけ戦えれば青龍ちゃんを守れるからね」

喜んでいいのか分からねえな、その評価。そもそも守らなくていい  
と思っぞ。

青龍って海に行った時、一人で怖いおにーさんたちを追っ払ってた

し。

「お疲れさまー」

青龍がこちらに向かって歩いてくる。

「うーん？ユウ本気出してた？」

「出してたぞ？…というより死なないように必死だったな」

「ユウならもつと動けるはずなんだけどな」

「いや無理」

…青龍の中での俺の評価はどんだけ高いんだ。というか、あれ以上動いたら体壊すだろ。

「とりあえず居間に戻ろうか」

「はい」

「母さーん、戻るよ」

完璧に熟睡している紗夕さんを起こして、道場から居間に戻る。居間に戻ると、俺は治療を受けることになった。治療と言っても湿布を貼る程度の作業だが。

「ふあーまだ眠い」

トロンとした目で救急箱から湿布を取り出す紗夕さん。

「…大丈夫ですか？やっぱり自分でやりますよ？」

「大丈夫よ」

何故か紗夕さんが湿布を貼ってくれている。ちなみに青龍と閏龍さんは紗夕さんの命令でキッチンで昼食の仕込みをしている。

紗夕さんは『怪我の治療は母親の役目でしょ？それに男の子供にこつするの夢だったの』と言っていた。

多分、言っていることは本心だろうが、完全に寝ぼけている。その証拠に、

「は〜い…ぺちっ」

「冷たっ……………紗夕さん、そこは怪我してないです」

打撲していない所に湿布を貼りまくられる。

「ふあ〜ごめんね」

「いや、別にいいですけど…」

欠伸をしながら、というのが非常に不安だが、実害は出ていない。

「えいつ」

だんだん調子が出てきたのか、投げるようにしつ湿布を貼ってくる。

「うふふ、だんだん面白くなってきちゃった〜…えいつ」

だんだんエスカレートしてくる湿布攻撃、もとい治療。体中湿布まみれになる前に止めさせないと…。

「あの紗夕さん…」

止めさせようとした次の瞬間、

「えいつ」

べちん、と湿布が顔面にヒットした。

「うおっ！目があぁっ！」

湿布はすーすーする。それが目に…。

「だ、大丈夫？」

すぐさま湿布を取り外す。

俺の声を聞きつけた青龍と閏龍さんがキッチンから居間に駆けつけた。

「どうしたの！？ユウ！？」

「どうしたんだい！？少年！？」

慌てて駆けつけたようだが、目を押さえて悶絶する俺の姿はさぞ滑稽に見えたことだろう。

「ユウ、何やってるの？」

「私が目に湿布を貼っちゃったの〜」

説明できない俺に代わり、紗夕さんがこの惨状の説明をする。

「なんだ…慌てて損したな」

「うん、そうだね」

「お前ら……………」

なんて親子だ、特に父親。

「それにしても…目に湿布とは。なかなか面白いね。少年、君は芸人になれるよ」

「……………」

この苦しみも知らないで…。この苦しみを味あわせてやろうか？

「む、少年？かすかに殺気が発せられているのは気のせいかい？」

「それは、どう、でしょう、ね。ふっふっふっ」

「ゆ、ユウが壊れた」

「青龍ちゃん、月代くん大丈夫なの〜？」

そして、惨劇は再び繰り返される。

「ぐああ、目があああああっ！」

## 第26話 帰宅

「……………」

「ただいま」

言葉もなく部屋に倒れ込む俺。それとは対照的に青龍は元気いっぱいだ。

「……………今何時だ？」

時計を見ると三時を少し回ったくらい。

「……………夕飯どうすっかな」

「うわぁ、ユウの家から帰ってきた時よりぐったりしてるね」

確かに自分んちから帰ってきた時よりぐったりしている。

「つか、何で青龍はそんなに元気なんだ？と聞きたい。」

「……………青龍、ダルいから俺は寝る」

「うん、おやすみ」

青龍にそう言つと俺は夢の世界に旅立っていった。そうして、俺が目覚めたのは四時間後。

「うーん、よく寝た」

伸びをすると背骨がポキポキとなった。

「ついか夕飯どうしよう?」

今から作るのも面倒だな。かといって、インスタント食品は買い置きがない。スーパーに行くのも面倒。

「…今日は出前をとるか」

そうと決まったら早速注文だ、っとその前に青龍の部屋に行き、リクエストを聞こう。

青龍の部屋に向かう。

「青龍、居るか?」

「居るよー。どうぞー」

ドアをノックすると返事が返ってきた。なので遠慮なく部屋に入らせてもらう。

「今日何か食べたい物あるか?」

「うーん、最近は和食ばかりだったからね。今日は和食以外がいいよ」

和食以外か…和食以外の出前の定番と言ったらやっぱりピザか?

「青龍、今日の夕飯はピザでいいか?」



「うん、美味しいなら何でもいいよ」

「じゃあ夕飯はピザだな」

そこまで言っただけで気付いた。俺、青龍の部屋入るの初めてじゃね？  
そう思ってしまうと意識してしまうのが人間というもので、青龍の  
部屋を観察してしまう。

一言で言うと、女の子っぽい部屋。ま、他の女の子の部屋を見たこ  
とがないので比較しようがないが。

「ちょっと、何じっくり観察してるの？」

どうやら青龍も俺が観察しているのに気付いたようで、ジト目でこ  
つちを見てくる。

「いや、青龍の部屋入るの初めてだな」と思ったからな」

「あ、それもそうだね」

えへへ、と屈託なく笑う青龍。

「じゃあ注文してくる」

「あ、私も行く」

注文しようと居間に行くとき青龍もついてきた。  
で、早速メニューを見る。

「ん〜どれにするか…」

「どれも美味しそうだね。ねえユウ……」

「ダメだ」

青龍が次の言葉を発する前に先手を打つ。

「ちよっ！私まだ何も言っていないよ!?!」

「どうせ全部注文するとか言い出すんだろ?」

「……………」

やはり凶星だったらしい。

「さて、と。ユウどねにする?」

「……………おい」

さっきのはなかったことになったようだ。

…気を取り直していこう。

「ユウ、このピリ辛ピザってのはどうかな?」

「えーっと、どれどね」

青龍が言ったピリ辛ピザを確認する。

「うわ……何だこれ?」

写真に写っているのは、全体が真っ赤に染まっている得体の知れない円形のもの。まず見た目からしてアウト。

「赤唐辛子、青唐辛子、豆板醤……」

書いてあったピザの説明を読んでいく。

ここまでならギリギリでピリ辛の領域かもしれないな。

「ハバネロ、タバスコ、ラー油などを……」

この時点でアウト。既にピリ辛どころの話じゃない。

「混ぜて、凝縮したものをソースにします。……ってこれがソースかよっ！」

もはや人間の食べ物じゃないな。そもそも買う奴はいるんだろうか？

「俺は…これだな」

「じゃあ私はこれ」

俺が選んだのは、一枚で三種類（コーン、チキン、大盛の野菜）が楽しめるミックスピザ。青龍はトマトが大量にトッピングされているトマトピザを選んだ。

で、早速注文する。

注文して十五分ほどでピザが届いた。

「いただきます」

「いただきます」

青龍はすぐに箱を開けてトマトピザを食べている。俺も箱を開ける。

「うおっ!」

「うわっ、なんか刺激臭がしてるよ」

箱を開けた瞬間、何とも言えない匂いが漂ってきた。

匂いの発生源はミックスピザの一角、この世のものとは思えないほど真っ赤なゾーンから匂ってくる。

「……………写真と違うじゃねーか、ミックスピザ」

チキンがあるはずの場所がピリ辛ピザにすり替わっている。

「まさか、これをこの目で拝む日が来るとはな……………」

一生出会うことがないと思っていただけにショックが大きい。

「ふふふ、ユウ、食べるんだよ。間違っても捨てたりしちゃいけないよ」

青龍は完全に面白がっている。

が、確かに俺も食べ物粗末にしたくない。…果たしてピリ辛ピザが食べ物と言えるのかは謎だが。

「ま、まあとりあえずコーンから……………」

ピリ辛ピザを極力視界に入れないようにして他の二種類のピザを食べる。

当然、ピリ辛ピザが残る。

「…なあ？これ食えると思うか？」

「食べれないなら売ってないと思うよ」

「…だよな」

しかし、これを食べて生きている自信はない。

「ユウが食べないなら私が…」

「食ってくれるのか!？」

「いや、そんなわけないじゃん」

即答だった。

その反応速度わずか0.05秒。さすがは神獣。人間の限界を軽々と超える。

「なんだよ…ちょっと期待しちまったじゃねえか…」

「まあまあ、そう言わないでよ。私が食べさせてあげるから」

「はあ!？」

「だ〜か〜ら〜私が食べさせてあげるよ」

「そんなことで食えたら苦労しないわっ!」

「ほら、頑張って食べるんだよ」

「!?!」

そう言っていると青龍はいきなりピリピリ辛ピザを口に突っ込んできた。

「~~~~~っ!?!」

「どう?美味しい?」

口の中が大変なことになっている。

俺が悶絶していると、

「はい、飲み物だよ」

「っ!」

青龍が飲み物を渡してくれた。目で礼を言ってジュースらしきものを流しこむ。

あれ?ジュースなんて買ってたっけ?

「ユウ、大丈夫?」

心なしかワクワクしたような顔の青龍に不安を覚える。

手元のジュースの缶を見てみるとそこには…カオスの文字。

「何っ!」

まさかまだ在庫があったとは…。

「どつなの？何か起きた？」

改めて口の中を確認してみる。…しかし何ともない。

「奇跡的に無事だ」

奇跡的に無事だった。それどころかさっきまでの辛さがどこにもない。

「えー」

「えー、じゃねえよ…下手したら死んでたぞ…」

「というか、もう辛くないの？」

「ああ」

ピリ辛ピザとカオスジュースの組み合わせで互いを打ち消し合ったようだ。

例えるなら、すごい顔の親たちから普通の顔の子供が産まれた、という感じだ。

「つまんなーい」

「じゃあ青龍、食ってみるか？」

「いや、遠慮しておくよ」

自分では試さないらしい。

「じちそうさま」

「じちそうさま」

俺は、じちそうさま、と言いつつピリ辛ピザとカオスジュースの奇跡的な組み合わせを神様に感謝するのだった。



第27話 夏のある日の出来事(前書き)

更新が遅れています(=|=.;)ピンチ!!!(。)

## 第27話 夏のある日の出来事

夏休みも終わりに近づいたある日…

「今日は何をするかな…」

最近はいろいろと騒がしかったが今日は平和な日だ。  
青龍は華凜と遊沢と出掛けている。

〳〵〵

携帯が鳴ったので見てみると、ディスプレイには間塚和馬という文字が表示されている。

「和馬か」

…出るの面倒だな。

どうしようか迷っていると電話が切れた。

「何だったんだ？…ま、いいか。課題も終わったし…暇だ」

そう言っても外に出ようとしなのが月代クオリティだ。………我ながら言ってることが意味不明だ。

〳〵〵

再び携帯に着信。もちろん表示された文字は間塚和馬。

「……………」

なんか放置しておくのも可哀想になってきたな。そう思っただけで通話のボタンを押して電話にでる。

『あ、ユウか？まだ宿題終わってないから…』

そこまで聞いて電話を切る。

「情けをかけたのが間違いだったか…」

言いかけた言葉から推測するとどうせ、宿題終わってないから見せてくれ、とかいう内容だろう。

〃 〃

三度目の着信。当然和馬から。

しつこいな、と思いつつ渋々電話を取る。

『ユウ、いきなり切るなんて酷いじゃないか。それで相談なんだけど…』

「……………現在、電話に出ることができません。ピーという発信音の後にメッセージを残して下さい」

『ええー……………なんで俺ってそんな扱いなんだよー？』

「知らん」

『おい！やっぱ留守電じゃな…』

面倒になってきたので、再び電話を切る。

「……………寝るか」

暇な時は寝るに限る。寝てるといつの間にか時間が経ってるからな。

「…おやすみ」

誰に言うでもなく、そう呟いて静かに目を閉じる。

ピンポーン

まるで計ったかのようにチャイムが鳴る。

「誰だよ」

睡眠モードの体を起こして玄関に向かう。

「おい、悠居るー？」

玄関で馬鹿が叫んでいた。

…実力行使できやがった。こいつは迷惑というものを考えないのか？

「悠居るのか？」

「おい和馬、近所迷惑だからやめろ」

「なんだ居るじゃないか」

俺が近所迷惑という言葉が発しても大声でしゃべり続ける馬鹿一名。これは制裁を加えてなくてはなるまい。

「和馬、部屋に入るには網膜認証が必要なんだ」

「へ？そうなの？」

「ああ……………じゃあ、ドアの覗き穴に顔を近づけてくれ」

「わかった……………これでいいか？」

「ちゃんと顔近づけたか？」

「おう」

和馬が顔を近づけたことを確認してドアノブを握り締める。

「いくぞ」

「おう」

体を一度引いて力を溜める。そして地面を軽く蹴り、脚、腰、腕の順番で力を伝えている。

力がドアに伝わった瞬間……………ゴツンという鈍い音が鳴り響いた。

「……………」

「……………」

そしてしばらくの静寂。

「……………少しやり過ぎたか？」

そーっとドアを開けてみる。

「……………うおっ！」

そこには世にも恐ろしい光景が広がっていた。  
白目を剥いた和馬が仰向けに倒れている。

「キモいな」

常人なら思わず後ずさりする光景だと思う。

つか、この状況どうしよう？

「とりあえず起こしてみるか…おい和馬、生きてるかー？」

近づくのはイヤだったので、遠くから声を掛ける。

「起きないか…」

キッチンに行つて水を取ってくる。

「いい加減起きろ！」

水を和馬の顔にかける。すると、ようやく目を覚ました。

「う、うーん……………」

「やっと起きたか」

「あれ？僕はどうしてここに？」

「俺んちに課題をしに来たんだろっが」

「丁度いい具合に記憶が飛んでいるらしい。というか今、僕って言うてなかったか？」

「とりあえず上がれよ」

「お邪魔します」

違和感を感じながら和馬を家に入れる。

「で、何をやってないんだ？」

「はい、数学と国語ですね」

それなら今日中に終わるかな。  
つて、そんなことより…

「なんでそんなしゃべり方なんだ？」

「え？僕ですか？」

「ああ、なんか変じゃね？…というか、わざとやってるなら殴るぞ」

「僕はもともとこんなしゃべり方ですよ？」

頭を打っておかしくなったか？

「まあいいや」

俺に害があるわけでもないし放っておこう。

「ほら夏休みの課題」

俺が記入済みの課題を和馬に渡す。

「あ、ありがとうございます。いつもすみません」

おおっ！めっちゃ良い子になってる！いつもなら……

「ほら夏休みの課題」

「おお！さすが悠だぜ！」

……ってな感じで礼も詫びもするはずがない。

「悠さんの字はいつも綺麗で見やすいですね」

「そうか？」

和馬（馬鹿ver.）の場合を想定していると、そう言われた。

それからしばらくの間、和馬（良い子ver.）の文字を書く音しか聞こえない時間が続く。

「はあ〜やっと終わった」



「ん？早いな」

「はい、今日はなんか頭がすっきりしてるんです」

「そうか」

特にすることもなく、和馬と話していると、

「ただいま」

「お邪魔します」

青龍たちが帰ってきた。

「おかえり」

「あ、お邪魔してます」

良い子バージョンの和馬はなんかすっかりしていた。しかも、爽やかな笑顔を振りまいている。

「ちよっ…あれ、和馬だよね？」

「か、和馬くんどうかしたの？」

「間塚、頭でも打ったんじゃないの？」

三人とも同時に話し掛けてくる。

「あゝいっぺんに話し掛けるな！とりあえず青龍、あれは和馬だ」

「うん、でも顔だけ一緒に中身が違っちゃって感じだよ？」

さすが神獣。今の状況を正確に把握している。

「次、華凜。和馬の体はなんともない」

「そ、それは見たらわかるけど…そういうことじゃなくて」

華凜はなんといいかわからないようだ。

「最後、遊沢。正解だ」

「は？」

「だから、和馬は頭を打ってああなった」

「マジで？」

自分が言ったことが正解で驚いている。

「ん？皆さんどうかしましたか？」

和馬は自分に視線が集まっていることに気付いて三人に問いかける。

「……いや、何でもありません」

見事なシンクロである。

そして青龍たちは三人でコソコソと話し始めた。

「何話してるんですかね？」

「さあな」

三人の会議を見守ること数分。ようやく意見がまとまったらしい。

「何話してたんだ？」

「ユウくん、今からすることは手を出しちゃダメだからね」

「ああ、わかった」

「それと見るのも禁止」

華凜からそう言われると、俺は傍観者になること決めた。というか、何をするかわからないなら止めようがないだろ。

「間塚、ちよつとこつちにカモン」

遊沢が手招きをして和馬を呼ぶ。

……あれが悪魔の手招きに見えるのは気のせいか？

「なんですか？」

和馬は俺から死角になっっているキッチンに誘い込まれる。

俺も三人に気付かれないようにキッチンが見える位置に移動する。

「青龍ちゃん！」

「おっけー」

遊沢の合図で青龍が和馬の後頭部に手刀を振り下ろす。

「ぐふっ」

手刀を喰らった和馬は糸が切れた人形のように床へ倒れ込んだ。

「ちよっ…何やってんの!？」

「あ、ユウ。さっきの見ちゃった?てへっ」

「もう、ユウくん見ちゃダメだって言ったでしょ」

「ツッキー、これはしょうがないことなのだよ」

なんて奴らだ…罪悪感のカケラもねえ。

「で、なんでこんなことしたんだ？」

「うつつ、すみません。つい出来心だったんです」

遊沢はテレビでよく見る万引きした人の真似を始めた。

「はい、遊沢は発言禁止な」

「ノリ悪いなあ〜ツッキーは」

遊沢の発言を禁止した所で青龍と華凜を見る。

「うーん、強いて言うなら…良い子の和馬は和馬じゃない!って」  
とかな」

「で、実行犯の青龍さん。これで和馬は元に戻るのか？」

「さあ？」

…これで戻らなかったら和馬が不憫すぎる。

「で、華凜さんはなんでこんなことをしたのでしょうか？」

「え、なんか笑顔が気持ち悪かったから……」

ひどっ！華凜が一番酷い、というか和馬を否定してるな。

「まあツツキー。間塚が元に戻るまでお茶でも飲んで落ち着きな」

「あ、私たちケーキ買って来たんだ」

「早く食べるよっ」

「ああ」

その後、俺たちはお茶会をして楽しんだ。

ちなみに和馬が起きたのは一時間後。その時にはもう元に戻っていて、良い子バージョンの時の記憶はなくしていた。

めでたし、めでたし………なのか？

## 第27話 夏のある日の出来事（後書き）

一応夏休み編？は終わりですm（| |）m季節感が全くありませんが…。次は二学期、学園祭とかがある予定です（^^）

## 第28話 二学期

今日は九月一日。今日から二学期が始まる。

しかし、俺は今、青龍の部屋のドアをノックしている。

「おい、青龍ー。起きろー」

「……………あと……………分……………待つて……………」

ドア越しなので、よく聞き取れない。

「いや、それ聞き取れないし」

「……………は……………何……………」

こういつやりとりをかれこれ五分ほどやっている。

青龍は夏休みにぐうたらした生活を送っていたので、その習慣が完全に身に付いている。

「そろそろ起きないと新学期早々遅刻だぞ」

「……………うーん……………」

駄目だ、こいつ絶対起きねえ。というか起きる気がないな。というところで最終手段に移行する。

「ほら、早く起きないと実力行使でいくぞ?」

「…ふっ…出来るものならやってみなよ」

気のせいとその挑発したような言葉だけがやけにはっきりと聞こえた。

「……………わかった。じゃあ実力行使でいってやるっ」

「……………カモン……………」

「うおら！起きろ！」

ドアを突き破る勢いで青龍の部屋に突入する。

「おは〜」

「ああ、おはよう……………ってなんて格好してんだ!？」

青龍はキャミソールにショートパンツという服装だった。スラリとのびた健康的な足に目が行ってしまう。

夏だから暑いのはわかるが、露出が多すぎる。

「いつもこれで寝てるよ〜」

「へえ〜じゃあいいか……………ってそんなわけあるかっ!」

思わずノリツッコミしてしまった。

「うーユウのケチ。自分の部屋だからいいじゃん」



「よくないわっ」

部屋から出るときは毎回着替えるのか、こいつは。

「というかユウは私の部屋に勝手に入らないから、どうせ見えないよ」

「ああ、確かにそうだな」

でもその、バレなきゃ何をやってもいい的な考えはどうかと思うぞ？

「って、もうこんな時間じゃねえか!」

時計を見ると、もうギリギリの時間だった。

「うーん、よく寝たよ〜」

時間のことなどまったく気にしていない青龍。その証拠に暢気に伸びをしている。

「ほら早くしろ」

「うん、じゃあ着替えるから朝ご飯の用意しててよ」

「いや、時間ないから無理だ」

「……………学校休む」

そう言って青龍はまた眠りに落ちようとする。

青龍は朝食を取れないと学校を休むらしい。

「じゃあトースト焼いてやるからさっさと着替えとけ」

「うん」

トーストを焼くためにキッチンに行く。ちなみに俺は朝食は食べ終わっている。

トースターにパンを入れる。ジャムは…イチゴでいいか。

「着替えたよ」

「早っ」

「神獣流・早着替えだよ」

トースターにパンを入れて数十秒しか経っていない。

しかも、しっかり髪の毛のセットまで済ませている。ということは歯磨き、洗顔までしているとみた方がいいだろう。

「今日は時間がないからダッシュで行くぞ」

「りょーかい」

そうこうしているうちにトーストが出来た。

「ほら、食べる」

「ん」

青龍にトーストをくわえさせ、鞆を持たせる。

そして戸締まりを手早く済ませて家を出る。

「行くぞ」

「んん？」

トーストをくわえたままなので何を言っているのかわからないので無視しておく。

「ちょっと待っとけ」

「ん」

ぶつちやけ今から走っても間に合わない。  
なので大家さんから自転車を貸してもらおう。

「大家さん、今日一日自転車借ります」

大家さんがいる部屋をノックして自転車を借りる旨を伝える。

「……………あーい、どーぞ」

返事が来たのを確認して自転車を借りていく。  
急いで青龍のところに戻ると、青龍がしゃがみこんでいた。

「どうした？」

何事かと思って声をかけると、

「……………ほらほら、猫だよ、猫」

全身真っ白の毛で覆われた品の良さそうな猫と戯れていた。

「……………何やってるんだ？」

「猫〜 知り合いに似てるよ〜」

にへー、と顔が緩んでいる青龍。  
「とうか猫に似た知り合いって…。」

「青龍…猫はいいから乗れ」

「うん」

自分と青龍の鞆をカゴに放り込み、二人乗りをする。  
朝とはいえ夏に全力で自転車を漕ぐのは自殺行為に等しい。出来れば極力運動はしたくないものだ。  
しかしここは腹を括って…

「飛ばすからしっかり掴まっとけよ」

全力疾走することにする。

「うわっ」

「っと、落ちるなよ」

と言いつつも気にせず突っ走る。

いつもの通学路を疾走していると、うちの高校の女子生徒が歩いているのを見つけた。

「あつ、誰かいるよ」

「そう、だな」

息も切れ切れにそれだけの返事をする。

もうギリギリの時間なのにのんびりと歩いている。

「おはようございます」

追い抜きざまに青龍が声をかける。

「お、おはよう」

やけにおどおどした返事が返って来た。いきなり声をかけたからな。その後、自転車を必死に漕いだ結果、ギリギリで間に合った。

「……っしあー！ギリギリセーフ」

「おー」

自転車を駐輪場に置いて、さっさと教室に向かう。

「おはよー」

「おっ」

久しぶりに見たクラスメイトは一学期と大して変わっていないかった。多少、日に焼けた者もいるようだ。

「おっ、ツツキー、ギリギリじゃん」

「ああ」

遊沢がニヤニヤしながら話しかけてくる。

こいつがニヤニヤしながら話しかけてくる時は何かしら裏ネタがある。

「なんだ？何か用か？」

「今日はなんでギリギリだったのかな？と思ってね」

「青龍がなかなか起きなくてな」

ふむふむ、と頷いている遊沢。が、次の瞬間、ニヤリと口角が吊り上がった。

「おはようのキスで起こしたの？」

「んなわけあるか」

どこからそんな結論に辿り着くんだ。

「連れないねえ…二人乗りで来たくせに」

「…なんで知ってたんだ？」

「ふっふっふっ…遊沢様の情報網を甘く見てはいかんよ」

「なんだそれ？」

一体どんな情報網を持つてるってんだ…。

「おっと、二分後に担任が来るみたい…じゃあまた後でね」

この前は気付かなかったけど、夏休みの間になんか情報収集能力がパワーアップしているらしい。

「二人乗りか。幼なじみを差し置いて何やってるの？ユウくん」

「おわっ！」

華凜が背後から話しかけてきた。というか今、全く気配を感じなかつたぞ？

「お、おはよう。華凜」

「うん、おはよう。ユウくん」

顔は笑っているが目が笑っていない。

「おーい、席に着けー」

タイミング良く担任が教室に入ってきた。…遊沢が席に戻ってからちょうど二分後だった。

「ユウくん、またこの話は後で」

「お、おう」

華凜は拗ねたような表情で席に戻っていった。

「静かにしろ！えー今日の日程は……」

担任が今日の日程を簡単に説明していく。

今日は体育館で始業式があった後、午前中で解散らしい。

「……以上だ。何か質問のある者は……よし、いないな。この後すぐに体育館に行けよ」

始業式では校長の一言や生徒会長の指名がある。三年は受験があるので二学期に生徒会長が替わる。

うちの学校の生徒会長は指名制で夏休みに通知が来ると聞いたことがある。

「……………行くか」

くだらなくとクラス全体が移動する。俺もその流れに乗って体育館に向かう。

体育館に着くとほとんどの生徒が揃っていた。

しばらくして全員が揃ったところで校長の挨拶が始まる。

『二学期も頑張れ。以上じゃ』

うわー、挨拶短かー。今の挨拶といい、青龍の編入の時といい適当だな。

次は生徒会長の発表らしい。壇上には眼鏡をかけた女の子が立っていた。キリッとした端正な顔立ちをしている。

生徒会長にぴったり、と言った感じた。軽く頭を下げた後に自己紹介が始まる。



『どうも』

マイクを通して凜とした声が響きわたる。

『この度副会長に指名されました桐生紗耶香と申します』

さっきまでざわざわしていた全校生徒がシン、と静まり返っている。  
…っーか副会長？

『申し訳ないですが…会長は遅刻しているので私が挨拶をします』  
遅刻って…その会長、大丈夫なのか？  
桐生が一步下がって礼をする。体育館は依然として静まり返っている。

そんな中、その静寂を破った生徒がいた。

「うううごめんなさい！」

そんなことを叫びながら体育館に駆け込んできたのは……登校中  
に見た女子生徒だった。

『……………』

桐生もポカンとしている。

全校生徒の視線がその女子生徒に注がれる。

「あ、あの…えと」

体育館の入口に突っ立ったまま、もじもじし始めた。そして、  
すが  
るような目で壇上を見つめる。

『美琴…壇上に上がって来なさい』

美琴、と呼ばれた女子生徒は小走りで壇上に向かう。壇上に上がり、桐生からなにやら紙を貰っている。

『あ、あの！遅刻して申し訳ありません！』

机すれすれまで頭を下げる。

『え、えーっと…こっ、この度せつ、生徒会長に指名されました。くっ、楠木美琴くすのきみことです』

……カミカミだった。

体育館は桐生の時と違う意味でシーンとしている。

「なあユウ」

「なんだ？」

和馬が話しかけてくる。誰も喋っていないので自然と声が小さくなる。

「あの生徒会長の楠木って子…」

「が、どうした？」

「惚れた」

「……………」

…馬鹿か、コイツは。  
というか和馬がそんなこと言うのは珍しいな。顔がそこそこなだけに告白される方が多い。  
でもその場合は…  
和馬の馬鹿さを知らないで告白 告白中にそれに気付く なぜか告白されたのに振られる  
というパターンが多いはずだ。

「まあ頑張れよ」

とりあえず友人として声援だけ送っておく。

「おう！頑張るぜ」

語尾に を付けられても全く可愛くない。  
こういうところがダメなのだと本人は気付いていないらしい。  
和馬に見えないようにして、手を合わせる。…南無。

「ねえユウ、始業式終わったよ？」

「ん？おお、終わったか」

青龍が声をかけてくる。

いつの間にか始業式が終わっていたらしい。

「というか、さっき何やってたの？」

「なんでもない」

このことは口外しない方がいいだろう。：遊沢に知れたら大変だしな。

「……………ま、いいよ。学校かあゝ勉強したくないよゝ」

「授業中寝るなよ?」

こうして二学期が始まった。

## 第29話 恋する和馬

始業式の翌日。

「おはよー」

青龍は元気良くクラスメイトに挨拶している。  
ちなみに今日は青龍がすんなり起きたので、余裕を持って登校出来た。神獣は順応性も高いらしい。

「おはよう」

「おう！おはよう、悠！」

和馬に挨拶をすると、尋常じゃないテンションで挨拶が返ってきた。

「和馬…お前、朝からテンション高すぎ」

「そうか!？」

どうやら自覚はないようだ。しかも、何故か顔がにやけている。

「どうした？和馬。何か悪い物でも食ったか？」

「何も食ってないぜ」

ここは友人として忠告しておくべきか…。

「お前、顔がにやけてるぞ」

「え？俺、顔にやけてる？」

「ああ。なんか怪しく見える」

「何っ！？じゃあ気を引き締めないといけないぜ」

そう言っつて和馬は普通の顔に戻る。それを確認した後、自分の席に着いた。

担任が来るのを待ちながら、ぼーっとしていると和馬の呟き声が聞こえてきた。

「はあく美琴ちゃん、可愛いなあ。天使に見えるぜ」

和馬の方を見ると、まただらしなく顔がにやけていた。

「そういうことか」

和馬は生徒会長にぞっこんらしい。…というか、もうファーストネームで呼んでるし。

「おーい、席に着け」

教室に担任が入ってきたので、思考を中断する。

そして、ホームルームが終わり、十分程の休憩時間になる。

「和馬、さっき生徒会長のこと考えてただろ？」

「うえ！？何で知ってんの！？」

「いや、さっき普通に口に出てたぞ」

「は、恥ずかしー………くない！うん！恥ずかしくない！」

今絶対、恥ずかしいって言おうとしただろ。

「そんな間塚にいい情報がありますよ。ふふふ」

しれっと話を聞いていた遊沢が会話に入ってくる。

「なんか怪しいぜ」

「確かにな」

さすがに和馬も怪しいと思ったようだ。

「人聞きが悪いこと言わないでよね」

遊沢は心外だとばかりに肩を竦める。

「せっかく楠木ちゃんのいろんな情報を持ってきてあげたのにな」

「何っ！？」

「いや、食い付きすぎだろ」

さっき怪しいと言って警戒していた和馬だが、既に遊沢の術中に嵌りつつある。

「そんないい情報なのに怪しいとか疑われた…あーあ、教えようとしてた楠木さん情報を教えたくなくなるなあ」

「ぐっ」

「あ、もう授業始まるじゃん。じゃ私は席に戻りますか」

勝ち誇ったような笑みを浮かべて戻っていく遊沢。  
それを見ていた和馬が、

「み、美琴ちゃんの情報くらいすぐに集めれるぜ」

負け惜しみを言っていた。

「ま、頑張れ」

「悠」

俺も席に戻ろうとすると和馬に声をかけられた。

「なんだ？」

「手伝ってくれ」

「断る」

そんなに知りたければ遊沢から教えてもらえばいいものを…。

「悠」



呪ってやると言わんばかりの低い声で呼んでくるが無視する。

「はい、席に着いて下さい」

先生が来たので和馬も渋々前を向いた。

その後、授業中に頭を抱えて何かを考えているようだったり、休み時間のたびに協力要請をしてきたりした。そして、無事に昼休み。

「和馬…もう諦めて遊沢に頼れ」

「う、うーん」

和馬と話しながら購買で買ってきたパンを食べる。

「でも俺にもプライドというものがある…」

「なら俺にも頼るな」

「悠と遊沢じゃ話が違つというのか…」

授業中と同じように頭を抱え込んでしまった。

「あらあら、間塚。何を悩んでいるのかな？」

すべての原因の遊沢登場。当然、顔は勝ち誇ったような笑み。

「遊沢、和馬を虐めるのもほどほどにな」

「あら、私は虐めているつもりはないけど？」

本人はそう言っているが、遊沢家の和馬に対する風当たりが強いのは事実だ。

「ま、どうしてもって言うなら教えてあげないこともないけど……どうする？」

「ま、マジで！？お願いします！」

速攻で反応する和馬。

さっきプライドがどうとか言っていなかったか？

「うーん、青春だね」

「だね」

いつの間にか青龍と華凜が隣りに居た。楠木の説明を聞いている和馬を見ている。

「和馬のこと知ってるのか？」

和馬が楠木に一目惚れしたことはおそらくまだ誰にも言っていないはずだ。

「知ってるよ」

「和馬くん独り言で楠木さん可愛いって言ってたし」

「……………」

もはや末期症状だな。と、俺が呆れていると…

「悠！美琴ちゃんのクラスに行くぜ！」

朝のテンションに戻った和馬がそう言ってくる。

「一人で行ってこい」

なんで俺まで行かにならんのだ。

「一人じゃ心細いんだ！頼む！」

よくそんなことが大声で堂々と言えるな…。

「まったく…付いて行くだけだぞ」

「さすが悠！じゃあ行くぜ！」

「うわーこのテンションすごい」

と言いつつ付いて行く俺。

そんな俺たち二人に、

「和馬くん頑張って」

「ユウ、結果は教えるんだよ」

「隊員たち、健闘を祈る」

なぜか見送られていた。しかも遊沢は敬礼をしている。  
なんか雲行きが怪しくなってきたか？

「おい、和馬」

「……………」

ガチガチに緊張していた。  
ダメだな、これは。

「和馬く着いたぞ」

楠木のクラスまで、距離にして数十メートル。  
というか、これくらい自分で調べた方が早くね？

「……………和馬？」

「お、おう」

声が裏返って変な声になっている。それに歩き方もロボットっぽい。

「……………」

「どっした？」

「この緊張はハンパないぜ」

そこまで話して、突然ある疑問が湧いてきた。

「和馬、お前何しに来たんだ？」

「え、えーっと…こ、告白？」

…最初からぶっ飛びすぎだろ。しかもなんで疑問形なんだ。

「それ本気？」

「いや…友達から、とか？」

…会話になつてねえ。

「和馬…」

「うちのクラスに何か用でしょうか？」

戻るぞ、という言葉が遮られる。

振り返ってみると、眼鏡をかけてキリッとした顔立ちの女子生徒がいた。たしか、こいつは…

「…副会長か」

「それが何か？」

「いや、何でもない」

「それで、何か用があるのか聞いているのですが？」

なんかやけに攻撃的、というかツンツンした態度だな。

ここに出てきたのも、はっきりものを言うし、クラスの人からも信頼されているからだろう。

「俺は別に用はない。用があるのはこっち」

そう言っつて和馬を指差した。

「あのー楠木さんをお願いしたいんだけど……」

「どうしてですか？」

「ちょっと話がしたくて……」

「そういうのは遠慮してもらっているので」

「そ、そうですか……」

とりつく島もないような言い方だった。

「和馬、戻るぞ」

「お、おう」

目当ての人物がいないのでさっさと引き上げる。

「……まったく、美琴が会長になった途端こんなのが多くなるんだから」

俺たちが立ち去っていくと、桐生は一人呟いていた。

「お、帰ってきた」

「おかえりー」

教室に入ると青龍たちが待っていた。

「どうだった？」

「会う前に断られた」

「誰に？」

「桐生」

それで？と興味津々といった様子の三人組。

「というかツッキー、なんで桐生さんが出てくんの？」

「さあ？」

「さあ、って…ユウ、理由は聞いてこなかったの？」

「んなもん和馬に聞け」

「ユウくん、ダメだよ。和馬くん微妙に放心状態」

華凜に言われて、和馬の方を見る。

「……………」

…たしかに少しぼーっとしているような感じがする。

「ま、いいわ。この話はもう終わりー」

遊沢がそう言うと、三人組はすぐに他の話の花を咲かせる。

「はあ」

「どづした？」

それとは対照的に和馬は溜め息をついていた。

「…いや、まあ、な」

「さっきのことはあんまり気にすんな」

「…おっ」

「機会はいくらでもあるぞ」

こうして生徒会副会長・桐生紗耶香とのファーストコンタクトは終わった。



### 第30話 ツンテレ疑惑

「来週からテスト期間に入るから週末はあんまり遊ばないで勉強するんだぞ」

彼は担任である。名前はまだない。

…つと、そんなことはどうでもいい。それより…。

「テストか…」

そう来週から夏休み明け恒例の実力テストがあるのだ。ちなみに試験範囲は夏休みの課題と一学期に学習した内容だ。

「悠！テスト前の遊び納めにゲーセン行こうぜ！」

「テスト勉強があるからパス」

「ちよつと位ならいいだろう」

「和馬…お前、一学期の成績を忘れたのか？」

いいだろう、の形のままリリースする和馬。

どうやら一学期の惨事を思い出してくれたようだ。

「そろそろ本気で勉強しないとヤバいんじゃないか？」

「そ、そうだな。今回は勉強しようかな？」

「ああ、それがいい。頑張れ」

「じゃ、また来週……いや、土日におおっせ」

「は？」

そう言くと和馬さつさと帰ってしまった。  
あいつ…俺んちでテスト勉強する気か？

「ユウくん、帰る」

「おう」

華凜がやってきた。

「ちょっと、ユウ！華凜！待つんだよっ」

青龍の方を見ると、青龍が鞆にすごい勢いで教科書を詰め込んだ。  
た。

「青龍…何やってんだ？」

「いや〜教科書って学校に置きっぱなしにしてたら結構溜まるよ？」

「…毎日持って帰ろうという気はないのか」

「ん〜面倒くさい……………っつ、終了〜」

パンパンに膨れ上がった鞆を抱える青龍。見るからに重そうだ。

「青龍、その鞆重くないか？」

「あんまり重くないよ。持ってみる？」

青龍から鞆を受け取る。

鞆を受け取った瞬間、ズシリとした結構な重量感が手に伝わってくる。

まるで腕が何かに引っ張られるような感覚。明らかに鞆が出せる重さの限界を超えている。

それと、油断していただけに、普段より重く感じるのだろう。

「…重い」

これ、10キロ以上あるんじゃないか？

「あんまり重くないと思うんだけどなあ」

青龍に鞆を返すと、それを軽々と持ち上げる。

「せーちゃんって力持ち…」

力持ちの範囲を軽く超えてると思うのは俺だけか？

「ほらっ、早く帰るよー！」

こつちが待っていたのに、青龍から急かされる。

…なんだろうな、この矛盾。

「あ、せーちゃん待ってよー」

「……………はあ」

青龍を追って教室から出る。

「ちよつと、君」

「ん？俺？」

教室を出たところで声を掛けられる。振り返ってみると、そこには桐生がいた。

「そう、あなたよ」

「何か用か？」

「用がなかったら話し掛けないわ」

…いちいち突っ込んでくるな。

「遊沢さんいる？ここのクラスの筈なんだけど」

「ああ、遊沢か」

クラスをぐるっと見回してみる。

しかし、遊沢の姿はどこにも見当たらない。

「…いないな」

「……………はあ」

やれやれ、と言わんばかりの溜め息をつく桐生。

「ユウ、何やってるの〜？」

「ユウくん、早く帰ろうよ」

先に突っ走って行った青龍と華凜が戻ってきた。

「あ、副会長だよ」

「そうですね、何か？」

「いや、なんでもないよ」

うわー、誰に対してもツンツンしてるな。しかも青龍、いや、の前に小さな声で、怖っ、とか言ってたし。

…ま、俺の時よりマシだけど。

「あなた達にも聞いておいた方がいいわね…。朝宮さんと…青龍さん？ だったかしら？」

「そつだよ」

「はい、そうですね…」

おおっ！青龍と華凜の名前知ってるのか！

まあ、謎の美少女転校生と可愛いと有名な<sup>いしひ</sup>同学年の生徒だったら知ってても無理はないと思うが。

「遊沢さんが何処にいるか知りませんか？」

「宴はホームルーム終わってすぐに帰ったよ」

「何か、マズい、とか言ってたような…」

おいおい…一体、何やらかしたんだよ。

「そうですね…わかりました。ありがとうございます」

「遊沢は何かやらかしたのか？」

「それに答える義理はありません」

もうなんか、あれだね。物凄く敵視されてるってやつ？

「あ、それは私も知りたいよ」

「私も知りたいかな…」

「まあ、お二人がそう言うなら教えましょう」

……………この野郎。じゃなくて、この女。

「遊沢さんは文化祭実行委員なんです」

「文化祭実行委員？」

青龍が頭の上に？マークを付けて聞き返す。

青龍は途中から来たから、委員会とか知らないだろうな。

「はい、文字通り、文化祭を実行する委員のことです」

「へえ」

「それで今日、文化祭の打ち合わせがあったんです」

「それで、遊沢が来なかったわけか」

「そうです」

…面倒だったから逃げたな。

「でも珍しいね。宴がそんな役になるのは」

「あいつは遊ぶことと祭りが大好きだからな」

文化祭実行委員を決める時に、私が文化祭を盛り上げてやる！って  
気合い入ってたよな。  
…その結果がこれか。

「……………はあ」

溜め息をつく桐生。

コイツ、溜め息多いな。

「副会長……」

「桐生でいいわ」

「あ、そう。んじゃ桐生、溜め息ばっかついてると幸せが逃げるぞ？」

「余計なお世話よっ！………」  
「ホン………では、失礼します」

そう言うと桐生はどこかに行ってしまった。

「行っちゃった」

多少取り残された感がある華凜が呟く。

「なんかイメージ通りの人だよな」

「そうだな」

確かにイメージ通りの奴だった。しっかりしてるし。

「……うーん」

「青龍、何唸ってるんだ？」

「桐生さん、なんかユウだけ態度が違ったよ？」

「確かに。ユウくん、桐生さんに何かした？」

「何もしてねえ」

青龍も華凜も気がついてた。ま、あからさまに態度変えてたからな。

しかも、俺だけタメ口だったしな。



「あれだね！最近流行りのツンデレってやつだよ！」

「おおー、せーちゃん鋭い」

「いや、全然鋭くないし。そもそもツンデレじゃないだろ、あれはツンだけでデレの要素がなかっただろうが。それに流行ってもいいい。」

「ちつつちつつ、ツンデレっていうのは、ツンからだんだんデレになっっていくものなんだよ」

「せーちゃんが………ツンデレを語ってる！」

「……………」

オーバーリアクションの華凛は置いて…。

どこからそんな情報を持ってきたら、青龍は。

「宴とかから聞いたんだよ」

「へえ……………つて、人の心を読むな！」

「あはは、マンガとかでよくやってるからしてみただけ。やること思えば出来るものだね」

「どんだけ凄いだよ、神獣。」

「えっ、じゃあ私も出来るかな……」

「華凜……」

我が幼なじみながら、変なところで純粹だよな。

「だいぶ時間過ぎてるね」

「そうだな。帰るか」

ようやく家路につくことが出来る。

「華凜、帰るぞ」

「うーん……………で、出来ない」

「あはは、ユウ、華凜置いてくよ」

また一人で突っ走る青龍。

「おい、待てって」

「せーちゃん待ってよう」

青龍を見失わないように俺たちも疾走するのであった。

### 第30話 シンデレラ疑惑(後書き)

とうとう第30話です！これまで読んでくれた方、感謝ですm(´`)  
— ( ) mこれから頑張っていくます (^ - ^ )

### 第31話 本気の和馬

テスト前の休日。

「ね〜ユウ〜」

「なんだ」

教科書に目を通しながら、適当に返事を返す。

「暇だよ」

「勉強しろ」

「つまんないよ」

青龍はテスト前だというのに勉強する気が全くない。さつきから飛び出しナイフ（俺の）をパチン、パチンと刃を出したり入れたりして遊んでいる。

「つーか、それ。危ないから仕舞え」

「う〜」

しびしびナイフを机の上に置く。

「そんなに暇なら、華凜か遊沢と遊べばいいだろ？」

「華凜も宴も勉強だつて言われて断られたよ」

「じゃあ青龍も勉強だな」

「勉強嫌ーい」

どうあつても勉強はしたくないらしい。

「あつー」

青龍は唸りながら横になる。そして、そのままゴロゴロ回り始めた。

「うー」

「……」

ゴロゴロ。

「な〜」

「…青龍、ちょっと静かにしてくれ」

「うい〜」

こっちは真面目に、静かに勉強をしているのに、目の前で唸られたらたまつたもんじゃない。

「うな〜」

「……………」

「トロトロトロトロ。」

「はづ〜」

「ええい！鬱陶しいわ！」

読んでいた本を青龍目掛けて投げつける。

「ん？」

青龍はそれをなんでもないように、指二本で挟んで止める。

「危ないよ」

ニヤリとシニカルな笑みを浮かべる。

そして本を元に戻すと、再び唸り始めた。

「なあ、少しは静かにしないか？」

「無理だね」

…即答しやがった。

「こんなんでテストは大丈夫なのか？」

「ユウ」

「…なんだ」

いきなり真面目な顔になる青龍。

「ただ呼んだだけ」

そしてふにゃふにゃ、とゆるーい表情になる。……………一体何がしたいんだ。

俺が微妙に呆れていると、ピンポンとチャイムが鳴る。

「ユウ、誰か来たよ」

「ああ…というか青龍、暇なら出てくれ」

「えーめんどいからヤダ」

「お前な…」

面倒臭がりの領域を軽く超えてるな、こいつ。しょうがなく自分で玄関に行く。

「悠、ヘルプ」

「お前か…」

ドアの向こうには、和馬が居た。そういえば、来るとか言ってたな。

「上がっていいぞ」

「お邪魔します」

やたらデカイ鞆を抱えた和馬を居間に通す。

「あ、和馬だ。やっほー」

「こんにちは、青龍ちゃん」

和馬が来たにもかかわらず、青龍はゴロゴロしている。…と思った  
ら、いつの間にか普通に座っている。

「和馬、その鞆何入ってんだ？」

「もちろん勉強道具」

「…本気か？」

「今回は本気だぜ」

今回は本気らしい。しかし、なんとなくダメな気がするの俺だけ  
か？

「うわ〜和馬も勉強するの？」

「おう、青龍ちゃんはしないの？」

「うん、私はパス。じゃあ勉強頑張ってね〜」

そう言うと、青龍は部屋に戻って行った。

「よし、これで少しは静かになるな」



「早速始めるぜ」

和馬は鞆の中からゴソゴソと教科書とノートを取り出した。俺も教科書を読み始める。

それから黙々と勉強をし始める。十数分おきに、

「なあ、悠。ここ教えてくれ」

「ああ……………そこは、この式を使うんだよ」

「なるほど？」

「…本当に分かってるか？」

「大丈夫」

といった会話があるものの、順調に進んでいる。

「……………」

「……………」

集中していると時間が経つのが早いもので、勉強を始めてから一時間ほど経過している。

「俺はそろそろ休憩するけど。和馬はどうする？」

「俺もこれが終わったら休憩するぜ」

「そうか」

和馬の手元を見てみると、日本史の授業で買ったプリントがある。

「えーっと…いい国作ろう鎌倉幕府、だから……………」

語呂合わせをしているようだ。

「いい国2960（作ろう）鎌倉幕府。よっしゃ！2960年だぜ  
「！」

「ばっ…お前、それ違うだろ」

「え？」

「いい国、だから1192年だ」

「あれ？そうだったけ？」

…小学生でも分かるぞ。

というか2960年だったら未来の出来事になってしまう。

「まあいい。とりあえず休憩だ」

「おっ」

適当に飲み物を持ってくる。

「ほ」

「サンキュー」

普段使わない脳を使っているせいか、和馬は無言だ。

そういえば青龍はやけに静かだな。…おそらく寝ているのだろう。

「よし、そろそろ休憩終わりだ」

「おう」

二十分ほど休んだ後に勉強を再開する。

「……………」

「……………」

会話が和馬の質問と俺の回答だけになる。要するに、ほぼ会話がな  
い状態だ。

「……………」

「……………」

それから二・三時間くらい経った頃、もうそろそろ終わりにするか、  
などと思っていると、

「あゝよく寝たよ」

青龍が部屋から出て来た。

俺の予想に違わず、寝ていたらしい。

「あれ？私なんか場違いって感じ？」

「いや、もう終わろうと思ってたところだ」

「じゃ俺はもうそろそろ帰るぜ」

そう言うと、和馬はさっさと帰ってしまった。  
本当に勉強しに来ただけらしい。…意外だ。

「なんか呆気ないね」

「ああ」

「テストで良い点取れるかな？」

「それは知らん」

「私はダメだと思うよ」

「まあ今回はやる気だったから前よりマシだろ」

和馬の努力が報われるように祈るばかりだ。

「で、青龍は勉強しなくていいのか？」

「あ、もうご飯の時間だね」

全く聞いていない。

というか、危機感が全くない青龍だった。



### 第32話 掲示板にて…

テストの次の週の昼休み。

5日間に渡るテスト期間が終わり、来週からいよいよ文化祭の準備期間だ。

しかし、教室は違う話題で盛り上がっていた。

「うわーダメだったー」

「お前何でそんなに上なんだよ」

「やった！今回はいけた！」

悲喜こもごもの声がクラスのあちこちから聞こえてくる。

テストの成績は放課後に配布されるのだが、掲示板には昼休みから張り出されているのだ。

「騒がしいな」

そんな中、俺は数少ない興味ない派の一人だった。なので、教室でのんびりしている。

「ユウ！掲示板を見に行くよ！」

ぼーっとしていると、やけに張り切った青龍が声を掛けてきた。

「興味ないからパス。つか、放課後には分かるから別に見なくてもいいだろ」

「えー」

あからさまに不満の声を上げる青龍。

「うわー、あれは成績が良いツツキーの余裕が見て取れるね」

「なんか、俺はどうせ成績良いから見る必要ない、って言ってるみたいだぜ」

遊沢と和馬がひそひそと話している。しかし、わざとこちらに聞かせるように話している。

「ユウくんは成績良いから…」

「おー華凜も言っちゃえ」

遊沢が華凜をまくし立てる。

というか、華凜も結構成績は良かったはずだ。…何故、俺だけ？

「ユウ、あんなに言われて黙ってるの？今こそ戦う時だよっ！」

「…いや、何と戦うんだ？」

「いいからいいから。ほら、行くよ」

青龍に無理やり右腕を引っ張られる。空いている左腕は、いつの間にか隣りにきていた遊沢にがちりホールドされる。

「捕獲完了」

「さあ行くよ！」

青龍と遊沢に腕を掴まれ、ずるずると引きずられていく。…ぶっちやけさらし者だ。

そして、いつもの五人で掲示板に到着。

張り出された紙には、200人分の名前がズラリと並んでいる。

「まずは和馬からね」

「うん、和馬くんは下から数えた方が早いから見つけやすいよね」

華凜がサラリとヒドいことを言っている。…まあ事実なのだが。

「えーつと俺の名前は…」

和馬はそんなことを言われても気にしていないようだ。

「あ、あつた」

「えっ！どこ！？」

「ほら、あそこだよ」

青龍が指差した場所を見ると、

100位 間塚和馬

…確かに和馬の名前があった。

「ジャスト100か。今回はなかなか頑張ってるな」



「悠のおかげだぜ！」

通常なら150位前後だということを見ると、なかなか健闘したと言えるだろう。

その証拠に華凜と遊沢も、

「今回は頑張ってたじゃん」

「和馬くんのこと見直したかも」

と言っている。

「順番でいくと次はあたしかあ」

次は遊沢の名前を探す。

「お、発見」

遊沢は自分で見つけたらしい。そこを皆で見る。

77位 遊沢宴

なんて言うか…遊沢らしい数字だな。

「まあこんなもんか…」

でもラッキー7だからいいや、と聞こえた気がした。

「せーちゃんのは最後に見るから…次は私かな？」

華凜は上から数えた方が絶対に早い。

「華凜、あつたぞ」

「んー、あ、ホントだ」

次は俺が見つけた。

24位 朝宮華凜

なかなか良い順位だが、華凜の実力なら妥当なところだろう。

「ま、また24位…」

「連続何回だ？」

「入学してからずっとだから、もう忘れた…」

成績が良くても悩みがあるらしい。それにしても、入学してからずっと24位って…呪われてるんじゃないか？

「次は俺だな」

「ユウくんのは上にあるからすぐ見つかるよね」

「ユウって成績いいの？」

「そりゃあもう憎たらしいくらいに。あたし初めてツッキーの成績聞いた時、あんまりサラッと言うから呪ってやるっかと思ったもん」

「普段からそんなに勉強してないのに…ズルいぜ」

いろいろ言われているが、自分の名前を探すことに専念する。

8位 月代悠

うん、今回もいつも通りだ。

「へえ〜意外だね」

「何がだ？」

「いつものツツコミからは想像できない成績」

「青龍、お前な…」

突然、ゾクリと後ろから気配を感じる。

慌てて後ろを振り向いて構える。そこに居たのは……ハサミを持った遊沢と和馬だった。

「何やってんだ、お前ら？」

「ふふ、ふふふ、ふふふふ…ツッキー、髪の毛頂戴」

「一本でもいいぜ」

シャキシヤキとハサミを鳴らす二人組。端から見たら、非常に危ない。

…いや、俺、当事者だけど身の危険を感じるぞ。

「何に使うんだよ？」

「いやいや、やましいことには使いませんよ」

「そうだけ」

…やましいことに使う気だな。

「つか、その体の後ろにやった左手には何を持っている？」

「気にしない気にしない」

「一休み一休み」

いや、気にするから。

というか、和馬のは違うだろ。

「ほーら、良い子だからこっちにおいで〜」

「来いと言われて来る馬鹿がどこにいる……」

「悠、あきらめも肝心だけ」

「俺はこんなところでは死なん」

じりじりとゆっくり迫ってくる二人。相変わらずハサミをシャキシヤキ鳴らしている。

「ふふふ」

「ははは」

気味の悪い笑いを浮かべながら、さらに近づいてくる。  
そして、二人の射程圏内に入る直前。

「ふっ」

「えいつ」

遊沢の首筋には手刀、和馬の頭には分厚い辞書がお見舞いされた。

「お前ら、止めるの遅いつて…」

「いや、なんか面白かったからね」

「辞書借りてくるのに時間掛かつちゃって…」

背後からの攻撃を受けて倒れている二人を見る。  
隠していた左手には、ワラ人形が握られていた。

「ワラ人形、髪の毛。呪いの必需品だね」

「こいつら質、悪っ」

「あはは…」

華凜が苦笑いしたところで、丁度チャイムが鳴った。

「教室に戻るか」

「そうだね」

「うん」

和馬を俺が、遊沢を青龍が教室まで運ぶ。

「はあ… 放置してもよかつたんだけどな。自業自得だし」

「まあまあ、そう言わないで運んであげるよ」

「二人とも悪気があったわけじゃないと思うけど…」

華凜、さっきのこいつらは悪意の塊だったぞ。

「あ、そういえば青龍の順番見てないな」

「忘れた…」

俺と同じく、華凜も忘れていたらしい。

「そういえば見てないね。どうせ、大した順番じゃないから見なくて正解だよ」

「そうか？」

「そうかなあ？」

二人で首を傾げる。

「そつだよ！」

そう言つて満面の笑みを浮かべる青龍。その笑顔は紛れもなく10  
0点の笑顔だった。

二学期・実力テスト  
第3位 青龍

第32話 掲示板にて…（後書き）

更新速度にかなりムラが…はい、ダメダメです（笑）



### 第33話 文化祭

文化祭。それは一年に一度しかないイベントである。

今は文化祭で何をやるか決めている。進行は実行委員の遊沢だ。しかし…。

「えーじゃあ、なんかやりたいことがある人はテキストに意見言つて」

やる気がない。

旅行やお祭りは準備が一番楽しい、と言つが、どうやら例外がいるらしい。

「ねえユウ、文化祭って何やるの？」

「ん？青龍は知らないのか？」

「うん」

桜花高校の文化祭は二日間に分けて催される。初日は生徒のみでの文化祭、二日目は一般開放される。

出し物は各クラス自由で、屋台を出すクラスもあれば展示をするクラスもある。

もちろん何もしない、というのは駄目だ。

「…ということだ」

「ふーん」

あまり興味が無さそうな青龍。…説明した甲斐がない。

「誰か〜何かないの〜?」

クラスの出し物も決まっていないうつだ。

「じゃあ…」

遊沢がクラス全体をぐるりと見回す。

そして俺の方を見て、目をキュピーンと光らせる。

「はい、そこで青龍ちゃんと楽しそうに喋ってるツツキー!なんかいいアイデア言って」

やっぱり俺に来たか…。しかも、なんかいいアイデアある?とかじゃなくて、絶対何か案を出せと言ってきた。

「あー…定番の屋台とかでいいんじゃないか?」

「とりあえず屋台ね」

黒板に『屋台』と書かれる。

「他は…じゃあ、間塚」

「えっ!俺?」

「あんた以外誰が居るのよ」

「えーっと、喫茶店とか？」

「おっ！間塚にしちゃまともなこと言った」

屋台の横に喫茶店という文字が追加された。

「次は女子の意見も聞いてみようかね」

またクラス全体をぐるりと見回す。

「じゃあ…さっきまで喋ってた青龍ちゃん」

「うーん、展示がいいと思うよ。文化祭だからいろんな所見て回りたいよ」

「ああ！それいいね！」

三つ目の選択肢の展示が追加される。

「次は…なんか、無性に気になったので、華凜」

「わ、私！？私は………け、ケーキ屋さんがいいかな？」

ケーキ屋さん、と言った瞬間、華凜の顔が真っ赤になる。

…恥ずかしかったらしい。

「おっおっ、可愛いねえ」

おっさんみたいなお話を言いながら、ケーキって喫茶店でも出せる

よね〜、とか言っている。どうやら華凜の案は却下されたらしい。

「他に意見がある人いる？」

一応クラス全体の意見も聞くようだ。

「喫茶店よりメイド喫茶がいいと思う」

クラスメイトの誰かが言う。女子からは、ええ〜、という不満の声。なかなかチャレンジャーな奴だな。

「ふーん、それも面白そうだね」

喫茶店の上にメイドと付け加えられる。

「お、俺の純情ピュアハートな意見が……」

自分で純情ピュアハートとか言ってる時点で駄目だ。

「そんじゃ、この3つの中から決めるよ〜」

公平に多数決で決める。

「屋台の人いる？」

『……………』

…誰もいない。

「あれ？ツツキーは？」

「定番を言ったただけだ。別にやりたかったわけじゃないからな」

「……………まあいいか。次、メイド喫茶は？」

はい！と勢いよく手を挙げたのはほんの数人。  
当然女子から白い目で見られている。

「こりゃ決まりだね。結果はわかるけど、展示の人？」

クラスのほとんどが手を挙げている。

「展示に決定」

展示に決定した。

当日に遊べる、という誘惑には勝てなかったらしい。

「遊沢、展示って何やるんだ？」

問題はそこだ。展示というと、そこそこの規模が大きいものから小さいものまでかなりの種類がある。

「えーっと去年は、っと…」

遊沢は冊子をペラペラと捲っていく。

どうやら去年の出し物が書いてあるらしい。

「展示は三年がやったみたい」

「内容は？」

「ふっ…聞いて驚いちゃダメだよ？なんと、ミニチュアの世界遺産を作っただって。しかもかなり精巧に」

「へえ」

去年見ておけばよかったな。

「ぶっちゃけ私たちには無理だから他のね」

無理というか面倒くさいからやらないと思っつのは俺だけか？

「うーん……………」

『……………』

クラスの奴らも良い案が思い浮かばないようだ。

「うーん……………あ、これいいかも」

何か思い浮かんだらしい。

「俳句、というか五七五。テキストでいいから考えててね」

「は？」

「あ、これ決定事項だから。いや〜さっさと決まってよかったな〜」

そう言つと、出し物の計画書らしきものを持ってどこかへ行ってしまった。

「ねえユウ、なんか私たちの意見とかあんまり意味なかったね」

「……………ああ、そうだな」

こうして文化祭への準備が着々と進んでいくのであった。

### 第33話 文化祭（後書き）

時間が空いた割にはロクなの書けてません（^^・次こそは…



## 第34話 文化祭2

文化祭。それは一年に一度しかないイベントである。只今、盛り上がる筈の準備期間中だ。しかし…。

「こんなに暇だとはな…」

俺のクラスは準備がほとんどいらぬ展示をするので、準備期間中は暇になる。

なので、あちこちから釘を打つ音や指示をする声が聞こえる中、こうして校内をぶらぶらと歩いている。

「賑やかだねえ…なんかこういう準備も面白そうだね」

作業をしている生徒たちを見て青龍が話し掛けてくる。

「ああ、文化祭は準備が醍醐味っていうか、準備してる時も楽しいからな」

「なんか私たちが損してるみたいだね」

「まっただ」

そんな会話をしながら、他のクラスを見物していく。

「……………」

「……うーん」

しばらく歩いていると、青龍が唸りだした。

「どづした？」

「なんか、ただ歩いてるだけじゃつまんないと思って」

「まあな」

「で、なんかないかな〜と思ってたわけだよ……あ、ひらめいた。ユウ、ゲームしよ!」

……唐突だな、おい。

「題して……ここは何のお店でしょう?ゲームだよ。どづ?やる?」

「いいぞ」

他にやることないしな。

というか、ゲームの名前まんまだな。

「第一問〜あそこは何のお店!？」

青龍が指差した先には、段ボールや木材、屋台の骨組みらしきものが置いてある。

「……………」

ぶっちゃけ、あれだけではわからない。

「…青龍はわかるのか？」

「うっん、エスパーじゃないから無理」

「……………」

「……………このゲーム、失敗みたいだね」

青龍は、あはは、と苦笑いをしている。

「あーあ、なんか面白いことないかな」

何回目になるか分からない言葉を言いながら、ぶらぶらと歩いていく。

「あ」

「どうした？」

「あれって生徒会長じゃない？」

「そうだな」

見ると、生徒会長こと楠木美琴がふらふらしながら資料のようなものを運んでいた。

「大変そうだね」

「そうだな」

余程重いのか息も少し上がっているようだ。

「これは手伝わなくちゃね」

「……………」

思わず青龍を凝視する。

「な、何？」

「いや、青龍が珍しいこと言ったから驚いただけだ」

「なんかバカにされてる気がするよ？」

「気にするな」

ということとで、楠木のところまで行って声を掛ける。  
声を掛けるのは何故か俺の役目だ。

「会長、手伝おうか？」

「……」

声を掛けた瞬間、遠くからでもわかるくらいに驚かれた。

「わ、悪い。そんなに驚くとはな……」

「い、いえ」

「美琴ちゃん、手伝おうか」

ファーストネームで呼んでるし。つか青龍は楠木と面識がないはずだ。

「あ、あの…」

ほら、楠木困ってるし。

「私は青龍っていうの。よろしくね」

「よ、よろしくお願いします」

「で、こっちがユウ」

「月代悠だ」

「は、はあ」

いきなりのごとでキョトンとしている。

「楠木美琴です」

「とりあえず…っつと」

律儀に頭を下げている楠木から資料を取る。

「あ、わ、私の仕事なので手伝って貰うのは悪いです」

「いって。会長も辛そうだったし」

「そつだよ。荷物はユウに持って賣って、私たちはおしゃべりしよう」

「……………こいつ、最初からそのつもりだったな。」

「会長、これ何処に持っていけばいいんだ？」

「え、えと、生徒会室まで……」

「了解」

「…すみません」

三人で話しながら生徒会室を目指す。

生徒会室に着くと適当な机に資料を置く。

「ありがとうございます」

「別にいいぞ。こっちが好きでやってることだから」

ま、半分青龍から強制されたけど。

「つーか、生徒会室って初めて入ったな」

「私も」

生徒会室と言ったらもつとスゴい所だと思っていたが、十畳ほどの部屋に机と椅子と棚などがあるだけだった。

「あ、あの！お礼と言っては何ですが…お茶にしませんか？」

「いいねえ〜」

「じゃあ貰おうか…というか、ここ何にも無いけどどうするんだ？」

水道もなければ、コップもない。

「会長室なら一式揃っているので…」

「会長室？」

そう言うと楠木は部屋の隅の方へ歩いていく。

「こちらです」

呼ばれて行ってみるとドアがあった。棚に隠れて見えないうろなっていた。

入ってみると、生徒会室の倍くらいある。

「お〜」

「こっちはやけに広いな」

「はい」

会長室を観察する。

まず目につくのは会長専用と思われる机と椅子。無駄に豪華だ。イメージとしては社長が座るような椅子、と言った感じだ。

次に目を引くのは何やら馬鹿デカイ絵。さらには簡易的なキッチン

までである。まあ調理器はやかんくらいしかないが。

「えーっと、飲み物は何にします?」

「何でもいいぞ」

「私も」

「わかりました」

手慣れた様子でお茶の準備を始める楠木。

「何か…意外です」

「ん?何がだ?」

「月代さんとか生徒会に入ってそんなイメージがあるのに」

会長と副会長以外は志望者だったりする。

「そうか?」

「あゝなんか分かる気がするよ」

…どんなイメージだ、それ。

「というか会長慣れてるな」

「はい、たまにやってるので…」



こうして喋っている間にもテキパキと準備が進んでいる。

「……………」

「……………」

楠木が一人でやっているのだから俺と青龍は何もやることはない。

「あ、あの…月代さん…その…会長って呼ぶの止めてもらえませんか？…あまりその呼ばれ方は好きじゃないので…」

楠木が唐突にそんなことを言ってきた。

「了解」

「ありがとうございます」

別にお礼を言われるようなことじゃないけどな。と、用意が終わったらしく楠木がティーセットを持ってきた。

「あ、いい香りだね」

「確かにいい香りだな」

カップからは紅茶の良い香りが漂ってくる。

「サヤちゃ…桐生さんが選んできてくれるんです。私はあんまり詳しくなくて…」

「へえ」

「だけど楠木の方が紅茶のイメージだよな」

桐生は日本茶っぽいイメージがある。

「私はそういうの苦手です…でも、桐生さんは何でも出来るんです」

「完璧主義。不正は絶対許さないって感じだもんね」

「あはは…そんなに厳しくないですよ」

苦笑しながら答える楠木。

…うん、紅茶も美味しいな。

「あ、これお茶請けです」

そう言って取り出したのはシフォンケーキ。そう、ふわふわのあれだ。

「いただきます」

「いただきます」

それぞれ一つずつ手に取る。

「……………」

「……………」

「ど、どうでしょうか？」

恐る恐る聞いてくる。

「美味しいよ！」

「うん、美味しいな」

「そ、そうですか」

ホッと一安心したような感じの楠木。

「よかった…サヤちゃんにしか食べてもらったことなかったから…」

「これ楠木の手作りなのか…」

「は、はい」

それほど甘くもなく紅茶に絶妙にマッチする。

「ねえユウ、これ家でも作ってよ」

「ああ、いいぞ」

楠木に後でレシピでも聞かか。

「家でって…お、お二人は同棲してるんですか!？」

「そうだよ」

なほじりと返答する青龍。

「違うだろ…居候だ」

同棲というより居候と言った方が正しい。…大した差はないが。

「他のクラスの奴は知らないんだな」

「はい、初耳です」

他のクラスには伝わってないってことか…。

「うちのクラスの人みんな知ってるのにね」

「そ、そうなんですか？」

「まあな」

青龍が転校早々バラしたからな。

「そつえば、今文化祭の準備中じゃね？」

「いいんじゃない？うちのクラス何もやることないし」

「いや、俺たちはいいかもしれんが…楠木は何か他にもやることがあるんじゃないか？」

仮にも生徒会長だ。

「そ、そうですね…すっかり忘れてました…」

…忘れてたのか。

「じゃあ俺たちは戻るか」

「えゝもつとサボろうよ」

「お茶、ご馳走様」

何か言っている青龍を引きずりながら会長室を出る。

ドアに手をかけようとした瞬間、ドアがひとりでに開いた。

「「あ」

「……………」

そこには副会長の桐生が居た。

「二人揃って、あ、とは失礼ね」

「いや、いきなりびっくりしたからな」

「ユウ、失礼だよ」

…青龍…お前もだ。

「で、二人はどうして此処に居るのかしら」

すっ、と目を細めて尋ねてくる。

「楠木からお茶をご馳走になった」

「うん、美味しかったよ」

「……………」

…あ、ちよつと眉間にシワよつた。

「月代さんたちが資料を運ぶのを手伝ってくれたの…そのお礼に。サヤちゃんも飲むよね？」

「え、ええ」

すかさず楠木がフオローを入れると、またテキパキとお茶を入れ始めた。

「…あなたたちもサボってないで準備しなさい」

すっかりペースを崩された様子の桐生。

「ああ」

「うん、じゃあまたね」

足早に生徒会室を去る俺と青龍。  
なんとなく窮地を脱した気分だ。

「ねえ」

「なんだ」

「副会長に準備するって言ったけど、私たちって何もすることないよねっ。」

「……………何も言っつな」

再び散歩を続ける俺と青龍だった。

第34話 文化祭2（後書き）

更新が滞って申し訳ないっ！………はい、テンションで誤魔化せるものじゃありませんね（；；；）次こそは更新速度を上げ……たいと思いますm（――）m



### 第35話 文化祭3

「……………では、学生らしい文化祭にするんじゃないぞ」

校長が挨拶をして、文化祭の開催が宣言された。

いよいよ文化祭が始まる。まずは一日目、桜花高校の生徒だけの文化祭だ。

「ふう」

まずは自分の教室に行かなければいけない。  
ということで自分のクラスに向かう。

「ツッキー！ため息とは何事かつ！」

「痛っ」

妙にテンションが高い遊沢が後頭部にチョップしてきた。

「文化祭というスバラシイ日にため息とはなんと嘆かわしい！」

「……………」

いきなり意味不明なことを叫び始めた。

「う、宴…テンション高すぎだよ」

「そ、そつだよ！みんなこつち見てる…」

「教室に行くぜ」

いつも元気でテンション高め、の青龍ですら若干引き気味だ。対して華凛は恥ずかしそうにしている。和馬に至っては完全にスルーしている。

「……………間塚、あんた、後で覚えときなさいよ」

「ひい」

遊沢が睨むと和馬は何処かへ走り去ってしまった。テンションの上がつた遊沢はもう誰にも止められないだろう。

「なんでお前そんなにテンション高いんだよ」

「ん？私、お祭り大好きだからさ」

そういえば、遊沢は祭り大好きだったな。

「それにね、ツッキー……………」

遊沢の顔が一瞬で真面目になる。

何か、あるのか？途轍もない何かか！？

「私はね……………祭り、という名のつくものだけには手を抜きたくないんだよ……………」

「……………」

…祭り、じゃなかったら格好いいセリフだったのに台無しだ。

「……………それは置いていて…教室に行くか」

「ちよっ…置いてくの!？」

教室は三分の一程度が展示用のボードで占拠されていた。

「ねえユウ、うちのクラスってシヨボくない？」

「青龍、それは言わない約束だ」

教室に着くまでに他のクラスを見てきたが、うちが一番手抜きかもしれない。

「みんな揃いましたか?……………それでは連絡事項ですが…」

全員居ることを確認して、担任が連絡事項を手短に伝える。…実は和馬が居ないのだが。

その後、自由行動になった。

クラスの連中がそれぞれ思いの所に散っていく中、いつものメンバーが集まっていた。…なぜか俺の所に。

「よーし、遊びますか!イエイ!」

「初めてだからワクワクするよ」

「うん、文化祭って楽しみだよ」

青龍と華凜は慣れてきたのか、遊沢のテンションが気にならなくなっているようだ。

「まあ楽しんでい」

素早く身を翻し、その場を立ち去ろうとする。

「待てい！」

次の瞬間、遊沢から後ろ襟をガッチリ掴まれた。

恐るべき反応速度だ。

「……………なんだよ」

「ツッキーも一緒に行くよね？」

顔は笑っているが、手の方はだんだん掴む力が強くなってきている。

「行かん！ぶっちゃけ遊沢のテンションについてくのは無理だ！」

「……………そう」

そう伝えると、遊沢が手を離れた。

引くのがあっさりし過ぎで何やら嫌な予感がする。

「……………」

恐る恐る後ろを振り返ってみると、遊沢が俯いて泣き始めている。

「……………ぐすっ……………ツッキーは……………私と行くのがなんだ……………」

「……………おい」

なんかムカつくほどの嘘泣きだ。

「あゝあ、ユウが宴を泣かせちゃったよ」

「ユウくん、女の子を泣かせちゃ駄目だよ」

…分かってて言ってるな、こいつら。

つーか、打ち合わせも無しになんつー連携だよ。全く悪くない俺が完全に悪者になってるし。

「ユウ、女を泣かすとは罪が深いよ？」

「ユウくんは男の風上にもおけない男なの？」

「……………ぐすっ」

言いたい放題言いやがって。まったく…。

「しょうがないな。行けばいいんだろ行けば」

「さすがツツキー！そこなくっちゃ！」

復活早っ！？……………ま、嘘泣きだからそれも当然か。

そんなことより…青龍、華凜…後で覚えてるよ？

「うっ、なんかすごい敵意を感じるよ」

「あはは…しょうがないかも…」

「……………はあ」

諦めて青龍たちに付いていく。

「で、まずは何するんだ？」

「ふっ…この遊沢サマは万事抜かりない」

そう言っ取り出したのは、文化祭のパンフレット。

「限られた時間の中でどれほど効率よくかつどれだけ良いポイントを回れるか…これが祭りにおける基本よ」

わけのわからん理論によっていろいろ書き加えられたパンフレットは一般人が見れるものではなくなっている。

「な、なんかわからないけど宴気合い入ってるね」

「う、うん」

また若干引く気味に戻っている。

「とりあえずこの時間は…展示が混まないから展示見よう」

「ああ」

「りょーかい」

「うん」

今から見に行く展示は、俺たちのようにシヨボいものではなく、結構大掛かりなものらしい。

「情報は当日まで出さない、か…」

ポツリと遊沢が呟く。

「じゃあ何が展示してあるのか分からないのか？」

「そういうこと」

「へえ〜楽しみだね」

「去年みたいな展示だったらいいな〜」

去年は確か世界遺産とか言ってたな。だとしたら今年も期待してもいいかもしれない。

そうこうしている内に、展示スペースにたどり着く。

「えーつと…」

入り口のプレートを見ると『テーマ〜世界各地の伝説・神話の架空の生物〜』と書いてある。

クラスの出し物ではなく、有志で集まった人達の作品らしい。

「ほほう、これはなかなか」

「伝説…神話…架空…か」

「気持ち悪いのとかだったら嫌だなあ」

三者二様のリアクションだ。遊沢はもちろん、華凜も言葉ではああ言っているが楽しみなのだろう。

一人だけ反応が違う青龍は何か思うところがあるのだろう。

「青龍、楽しもうぜ。文化祭初めてなんだろう？」

「あ、うん……」

青龍に声をかけて部屋に入る。

「おお……何じゃこりゃ……」

中に入ると、なかなか精巧に作られた模型があった。しかし……

「……気持ち悪いな」

ものすごく気持ち悪い模型だった。

「こ、これは想像してたやつと違うね」

「だな」

青龍もドン引きだ。

部屋に入って一番最初に目に入ったのが、這い寄る混沌、とかいうやつだった。

説明書きによると、何かの神話で出てくるらしい。

触手やら何やらがグチャグチャに合わさって、何やら得体の知れな



いものになっている。

「……………よし、他を見るか」

昼食前に見たやつは可哀想だな。絶対食欲がなくなるぞ。気を取り直して他の展示を見る。

「あ、これ可愛いね」

「ん？どれどれ…」

青龍が指差したのは、小さな人が蓮の葉の下に立っている絵だった。確かに可愛らしく書いてある。

「コロボツクルだな」

「へえ〜これコロボツクルって言うんだ〜」

興味津々である。何より目が輝いているのがその証拠だ。

「ユウ！次に行くよっ！」

「ああ」

なかなか乗ってきたようだ。

「あ、いたいた！青龍ちゃん、ツッキー。すっごいの見つけた！」

「うん、凄く綺麗だった！」

何やら興奮している華凜と遊沢。

されるがままに二人に付いていく、俺と青龍。

どンドン展示スペースの端にいつている。そして一番端にたどり着く。

「……………これは」

「うわぁ〜」

そこには、木で作られた1メートルほどの人魚の彫刻があった。

しかも、その出来栄えは思わず息をのむほどだ。

説明書きも手が込んでいて、手書きで書いてある。なかなか達筆だ。

「一本の木から彫り出しました……………」

「そうそう、またそこが凄いなだって！」

なんと一本の木から彫り出したらしい。…制作日数が気になるな。

「本当に凄いな……………」

「そうだね」

「うちの展示とは比べものにならないなあ」

「私もこういうの作ってみたいかも」

四人とも彫刻に見入っている。

「……………あ」

何気なく彫刻の下の部分を見てみると、制作者の名前が彫ってあった。『桐生紗耶香』と。

「ユウ?どうしたの?」

俺の様子に気付いた青龍が話し掛けてくる。

「いや、これ」

「……………あ」

青龍も俺と同じような反応だ。

そして華凜と遊沢にも、そのことを伝える。

「意外な才能が……………遊沢さんはビックリしたわ」

「桐生さんってすごいね」

二人とも驚いているようだ。

展示を一通り見終わって、次に移動する。

「で、次はどこに行くんだ?」

「ちょっと早いけどお昼にしよう」

時間は十一時を少し回ったくらい。たしかに昼食には少し早い時間だ。

「今くらいが屋台でちょうど作ってる頃なんだよね」

「へえ〜」

「昼に作ると回らないからね、お客を待たせるし。作り置きしてる所が多いのよ」

何とというか…祭りのことに関しては凄いな。極めているというか…ここまでとは…。  
何を食べるか話しながら、屋台のあるスペースまで行く。

「んふふ〜」

「……………ふむ」

何か青龍が怪しい笑い方をしているが気にしない。  
遊沢は時計とパンフレットを交互に見ながら眉間にシワを寄せている。

「ねえユウくんは何食べたい？」

「うーん…選べるほどあるといいけどな…華凛は？」

文化祭といたら、だいたい出てくるメニューは決まっている。

「私は何でもいいかな」

まあ結局は遊沢任せになるんだろうけど。

「そついえば、何か宴ちゃんが穴場を見つけたとか言ってたよ？」

「マジで？」

穴場って何だよ。

「みんな！付いてきて！」

いきなり遊沢が走り始めた。俺たちも付いていく。

「よしっ！あそこだっ！」

屋台に隠れて見えなかったが、扉があった。そこに四人で滑り込む。

「ふう…間に合った」

「遊沢…何だここは？」

「はあはあ…宴ちゃんが…言ってた…穴場ってこれ？」

「お、美味しそうな匂いが充満してるよっ！」

そこには五人掛けくらいカウンターがあった。メニューは串カツだ。

「おお、月代くん。君か」

…しかもマスターは校長だった。

「とりあえず座ろっ」

遊沢の声で全員席に着く。

ひとまず、疑問を口にしてみる。

「なんでこんなことしてるんですか…」

「ふむ、趣味じゃ」

趣味かよっ！

「どれ、好きなものを言うてみなさい」

校長がメニューを指差して言う。

「じゃあ遠慮なく…」

そう言うて青龍が、十本くらい一気に注文する。

「私たちも注文しよう」

「うん」

「ああ」

それぞれ、好きなものを注文する。

校長の串カツは作り慣れている感じで、美味しかった。

他愛もない会話をしながら食事をしていると、三十分ほど経過した。だいたい全員が満腹になってきたようだ。

「そろそろいい頃合いね…。校長先生、勘定お願いします」

「ふおっふおっふおっ。これは趣味じゃから勘定はよい」

「本当ですか？」

「うむ」

…なんて太っ腹な爺さんだ。

「「ご馳走様でした」」

お礼を言っただけで店を出る。

それにしても、串カツが趣味とは…なかなか変わった趣味だな。

「じゃ！お昼も食べたことだし、また行くよ…って、あれ間塚じゃない？」

「ああ、そうだな」

遊沢が、屋台で店番をしている和馬を発見した。

「和馬くん、何してるんだろ？」

「何か分けてくれないかな？和馬」

やはり青龍は食べ物ばかりのような気がする。

「連行決定」

遊沢の目が怪しく光る。完全にロックオンされたな。

「じゃあちよっと連れてくる」

「ああ」

その後、和馬を入れた五人で文化祭を回ることになった。そして遊ぶ金は全部和馬持ち。何でも逃げ出した罰らしい。

「うわああああん！！」

こうして、和馬の叫び声が響き渡った文化祭一日目は、和馬の財布の中身と共に去っていった。



第36話 文化祭4

文化祭一日目は大した事件もなく無事に終わり、二日目を迎える。

「今日は一般の人も来るので桜花高校の生徒として恥のないよう過  
ごして下さい」

担任のありきたりな連絡が終わり、自由行動となる。

今日は俺と青龍の二人だけしか居ない。

華凜は担任に、遊沢は文化祭実行委員の連中にそれぞれ連行された。  
和馬はいつものごとく行方不明だ。

「ねえユウ」

「なんだ？」

「今日は私たち何するの？」

本来ならば俺たちも他のクラスの奴らのように一般解放用の準備を  
しなくてはいけない。

しかし、うちのクラスの出し物はシヨボい展示一個だけなので何も  
やることがない。

「うーん、どうするか……まあとりあえず、その辺をブラブラし  
とけばいいんじゃないか？」

「なんか適当だね」

「そんなもんだろ」

というわけで、準備の時と同じように学校内を歩き回ることに  
なっ  
た。

「まだ一般の人は居ないね」

「まだ九時過ぎだからな」

一般解放は十時からになっている。当然、屋台もそれに合わせ開く  
のでまだ開いていない。

「何か面白いことないの？」

「……………ない」

青龍は相当暇のようだ。動きたくてしょうがないらしい。

「あっ！」

「おい！どこ行くだよ！」

急に声を上げて走っていった。仕方なく俺も付いていく。

「美琴ちゃん」

青龍が走っていった先には、楠木が居た。

「あ、おはようございます、青龍さん、月代さん」

「おはよー」

「おはよう」

楠木の手にはまた荷物があつた。

「楠木、持とうか？」

「い、いえ。今日は自分で持てますから」

やはり断られた。

「遠慮なくていいよ。ユウに持たしちやえば？」

「でも……」

「そつだぞ。こっちが勝手に手伝うつて言つてんだから」

「……………」

では、と遠慮がちに荷物を手渡してくる楠木。

「すみません、毎回持つてもらつて」

「気にするな。生徒会室でいいんだよな？」

「はい」

「レッシンゴー」

前回と同じく生徒会室へ向かう。  
生徒会室の前に着くと、楠木は上着のポケットから鍵を取り出しドアを開ける。

「……………あれ？」

「どうした？」

「いつもは閉まってるんですけど…今日は開いています」

うーん、と首を捻りながら生徒会室に入る楠木。

「これは幽霊だね」

「は？」

いきなり青龍が突拍子もないことを言い出した。  
…いや、神獣だから気配が分かるのか？

「ゆ、幽霊…」

顔を青くして楠木が呟く。

どうやら幽霊が苦手らしい。

「苦手なのか？」

「は、はい。幽霊とかお化けとかダメなんです」

やはり苦手なようだ。

とりあえず荷物を机に置く。

「冗談だったんだけどね…」

あははー、と青龍が苦笑いする。

神獣だけに冗談にならないような冗談だな…。

「じ、冗談だったんですか…よかった」

楠木は明らかに安心したようだ。

「じゃあ俺たちはこれで」

と言い終わる直前、誰も居ないはずの隣の部屋からガタツと音がする。

「……っ!?!」

「っおっ!?!」

反射的に楠木が腕に飛びついてくる。

「おーい、楠木〜?」

「…っうう〜やっぱりお化けが居るんですっ〜」

楠木はガタガタと震えている。本気でビビっている。まあ腕にしがみつくのはいいんだけど…。

「楠木、その…胸、当たってるんだが」

柔らかな感触が服の上から微かにわかる。

「そんなこと言っても…うっ」

「おーおー、いい思いしちゃってるね、ユウ」

しがみついて離れない楠木を見て、ニヤニヤと青龍は笑っている。

「おい、青龍」

「ん〜？」

「お前が原因だろ。見てこい」

自分で見てきてもいいんだけど…楠木が腕から離れない。  
さっきから楠木からの脱出を試みているがビクともしない。

「え〜パシリ反対だよ〜」

青龍とか遊沢とか和馬を散々パシってる気がするのはいかげいか？

「しょうがないね」

「はあ…早く行ってこい」

「えいつ」

「は？」

何を考えているのか、青龍は開いている方の腕にしがみついていた。

「お前な……」

「えへへ〜これで美琴ちゃんとおあいこ」

屈託なく笑う青龍。

楠木より感触がはつきりわかるだけに、たちが悪い。  
つーか、この状況どうするよ？

「うう〜」

「えへへ〜」

「……………」

神よっ！あなたは俺を見捨てるのかっ！？という思考の片隅で脱出の方法を考えていると、会長室の部屋に続くドアが独りでに開いた。

「うう〜〜〜助けて下さい〜〜〜」

「来たね！」

マジで幽霊が……

「……………あなたたち何やっているの？」

と、思ったら桐生が登場した。

どうやら物音を発生させた犯人は桐生らしい。

「桐生…助けてくれ」

がっくりとうなだれる俺を見て桐生はため息をついた。

・  
・  
・

場所を会長室に移し、桐生にひと通り事情を説明する。

「はあ…何をやっているのだから」

桐生は呆れたように呟いた。

「…申し訳ないです」

楠木はシュンとなっている。  
だいたい青龍が………ん？

「そういえば桐生はなんで会長室に居たんだ？」

そもそも桐生が会長室に居なかったら、こづいつことになってないはずだよな？

「くっ…それは、その…」

いやに歯切れが悪いな。

「もしかしてサボりか？」

「ちっ違うわ！…休憩…してただけよ」



当たらずも遠からずらしい。

「ふむ……」

青龍はのんびりと紅茶を啜っている。

自分にも原因の一端があることを自覚していないらしい。

…まあいいけどな。

「ねえユウ」

「なんだ？」

返事をしながら紅茶を飲む。

「美琴ちゃんのおっぱい大きかった？」

「……ぶっ」

青龍以外の三人が同時に紅茶を吹き出す。  
何を言うんだコイツはっ！

「月代ユウ！どさくさに紛れて美琴にそんなことを………怖がっている女子の胸を揉みしだくなんて！」

「揉んでねえ！」

「あ、あの……」

「修羅場だね」

俺と桐生は言い争い、楠木はおろおろ、青龍はのんびり紅茶くそつ、原因が一番のんびりしてるのが気に入わねえ。

「だいたいあの状況じゃ手を動かせないだろ！」

「う…それもそうね」

数分間不毛な言い争いをしていたが、なんとか納得したようだ。そして時計をチラリと見る桐生。  
もう少しで十時になろうとしている。

「ああつ！もうこんな時間じゃない！月代くんのせいだっ」

「なんで俺にキレるんだよ！？」

かなり理不尽なキレられ方だった。

「美琴、行くわよ」

「うん」

他にも仕事があるらしい。

「私たちはまだここに居ていいのかな？」

「さあ？」

鍵掛けてたし、多分出て行かなくちゃだめだろつな。

「出してもらった方が助かるわ」

「鍵を掛けるので…」

「了解」

全員で後片付けをして、生徒会室を出る。

楠木と桐生は鍵を掛けると、さっさとどこかへ行ってしまった。

「うーん、また暇になったね」

「そうだな」

腕を上げて背中を伸ばしながら言うてくる。

「まあそろそろ屋台も開いてくる頃だろうからその辺を回ればいい  
だろ」

「そうだね」

昨日は遊沢のオススメの屋台だけしか回っていないので、他の屋台  
を回ることにする。

とは言っても、今日は一般解放しているので人が多くなるはずだ。  
すでに十時を回っているので、一般客もちらほらと入ってきている。  
恐らく生徒の父兄などなのだろう。

「あ、リンゴ飴」

青龍はリンゴ飴の屋台を見つけると突っ走っていった。

「一つください」

「…あいよ〜」

当然というべきか、屋台は女の子が店番をしていた。

しかし、なんだ…このだるそうというか機嫌が悪そうな感じのやる気の無さは…。

「…百五十円になりま〜す」

なかなか良心的な値段だな、などと考えていると、青龍にリンゴ飴を手渡した店番の女の子が俺の方を見ながら言ってきた。

…俺が払うのか？

「…はい」

「…毎度〜」

男が払うのが当然みたいな流れになっていた。…なんだかなあ。

「ユウの奢りだね。ありがと〜」

「はいはい、どういたしまして」

妙にデカいリンゴ飴を食べるためにベンチに座る。…食べるのは青龍だけが。

「いただきます〜す」

そう言うと青龍はいきなり、ソフトボールくらいあるリンゴ飴にかぶりついた。

「……………おい」

…それは食べ方として合っているのか？

「うゝ美味しいねゝ」

シヤクシヤクとリンゴを頬張りながらご満悦の様子 of 青龍。

「……………」

本人が美味そうに食べているので、食べ方は気にしないでおう。  
時間は潰せるとして、昼飯はどうするか…。屋台で買うのもいいけど、混みそうだよなあ。

こんな時でも開いている購買を使うか…迷うところだ。

「うちそうさまゝ」

「早いな」

青龍の手元には既に芯だけになったリンゴがあった。  
奢ってもらったので一口くらい分けるといふ考えは無かったらしい。

「んゝ次は何を食べようかなゝ」

「まだ食うのか…というか、もうこんな時間か…」

そろそろ昼だ。時計を見ると十二時に近い。

「なあ青龍、昼飯どうする？」

「美味しいものなら何でもいいよ」

こういう時、何でもいいって言うのが一番困るんだけどな…。

「とりあえずテキトーに買っつか」

「うん！」

屋台では特に何のひねりもなく焼きそばとたこ焼きを、購買ではパ  
ンとおにぎりと飲み物を買う。

ゆっくりと昼食を食べれるスペースを探すが、さすが昼時、座れる  
場所はほとんどない。

「座るところないねえ」

「そっだな」

教室で食べるという手もあるが、展示や資材置き場になっている。  
机はどこかへ片付けられているが、椅子は端の方に寄せられている  
だけなので使えないこともない。

「しょうがない…教室で食っつか」

「そっだな」

適当に椅子を並べて昼食をとる。

それにしても青龍はよく食べるな…スタイルとか気にしないのか？  
まあ、初めて会った時から体型が変わったようには見えないけどな。

…考えてみると素晴らしい維持力だ。

「む…ユウ。何か、よからぬことを考えてるね？」

「いや、別に何も考えてないぞ」

「ふーん」

疑いの眼差しを向ける青龍。

よからぬことを考えてないのは事実だが、それに近いことは考えてたりする。…いや、逆に誉めている。

「そんなことより、早く食べないと焼きそば冷めるぞ」

「…それもそうだね」

中断してしまった昼食を再開する。

結構量を買っていた気もするが、思ったより早く食べ終わった。

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさま〜」

「午後はゆっくり遊ぶ方の屋台でも回るか」

遊ぶ方の、を強調して言う。

「う…わかってるよ。ちょっとは控えるよ…」

ちよっとしか控えないらしい。

早速屋台を回る。

「学園祭の屋台と言っても祭りの時と大して変わらないな」

「そうだね〜……………あっ！ユウ、金魚すくいだよっ」

青龍は金魚すくいをやりたいらしい。しかし…。

「うちじゃ飼えないぞ」

「えー」

世話が面倒くさそうだ。それに水槽など一式揃えなければならない。

「青龍、やりたいならこっちにしとけ」

そう言って俺が指差したのは、ヨーヨー釣り。

丸い風船みたいなヤツに水が入っていてゴムが付いているアレだ。

「うーん。なんか物足りないねえ」

「じゃあ他に行くか」

「いや、一回はやってみるけどな」

「やるのかよっ…！」

金を払い、ヨーヨー釣りの道具を貰う。ちなみに代金は俺持ちだ。

「よし、やるよ」



道具と言っても、ティッシュを捻って糸に見立てて、その先に針金を付けただけの物だ。  
それを片手に狙いを定めて…。

「取れたよっ！」

「よかつたな〜」

「む、そこはかたなく馬鹿にしてるね？」

「まあ少しな」

そんなもん子供じゃなかったら誰にでも出来る気がする。

青龍が一瞬ムツとした顔になる。

「カチンと来たよ…これは本気を出すしかないね。私の本気を見たらびっくりするよ…」

ふふふ…、と少し怖い笑い方をしてヨーヨー釣りを再開する。

「ふんふんふーん」

青龍は鼻歌混じりにヨーヨーを次々と釣り上げいく。

基本的に糸が切れたら終わりなので、切れるまで続けられる。すぐに切れるだろうと思っていたが、なかなか青龍は糸を切らない。

「どんどん釣れるよ〜」

そうしていく内にヨーヨーはどんどん増えていく。引っ掛けては持ち上げる、の繰り返し。

青龍はヒヨヒヨイと軽く取っている。

ヒヨヒヨイと…。

ヒヨヒヨイヒヨイと…。

ヒヨヒヨイヒヨイヒヨイと…。

「……………」

そして待つこと数分後。

「…っしゃーラストだよっ！」

青龍はすべてのヨーヨーを釣り上げていた。

「……………おい」

「どんなもんだい！」

「…やりすぎだ」

店番の生徒の顔もかなり引きつっている。

「青龍…行くぞ」

「あっ、待ってよ〜」

俺は気まずくなり、足早にその場を立ち去る。

「青龍、とりあえずそれを教室に置きに行くぞ」

「うん」

ヨーヨーを置くために、一旦教室に戻る。  
青龍と協議した結果、五個ほど取っておいて他はクラスメイトにプレゼントすることにした。  
クラスメイト全員のロッカーにヨーヨーを入れた後、再び屋台に戻る。

「青龍：お前がすごいのはわかったから、あれは止めような」

「え？お金払ってるからいいじゃん」

そんな会話をしながら、あのヨーヨー釣りの屋台の前を通る。当然というべきか、既に店は畳まれていた。

「じつじつことになるからさ…」

「あはは…そうだね」

自分が起こした惨状を見て、さすがに青龍も苦笑いをしている。

「ユウ、そんなことよりなんかあそこ人がいっぱいいるよ」

「ん？」

言われた方を見ると、確かに人が集まっていた。  
屋台の看板には射的と書いてある。

「何だろっな？行ってみるか」

「うん」

射的の屋台の近くまで近づいてみるが、人が多すぎて前が見えない。

「見えないよっ」

「そうだな」

「ユウ！肩車して！」

「は？」

いくら見たいからって肩車はないと思っぞ。

「っーか制服のままじゃな…」

「…あ」

「だろ？」

「そうだね」

青龍にそう諭したところで、射的をやっているとと思われる人の声が聞こえてきた。

「ふははは！君なかなかやるね！」

「そういうアンタもな！」

どうなっているか分からないが白熱している。…というか、どこかで聞いたことがあるような声だな。

「つーか一人は親父っぽい。」

「……………はあ」

しばらくすると対決が終わったらしく、見物人が少しずつ居なくなつていった。

「おい、親父何やってんだよ」

「おお息子か。たまには童心にかえるのも悪くないな」

そう言う親父の手には、射的で獲得した景品が山のようにあった。まったく、相手の顔が見てみたいな……。そう思い、先ほどまで親父と張り合っていたオッサンを見る。

「……………って、あんたかよっ！」

視線の先には、青龍に話し掛けられている閏龍さんの姿があった。

「なんだ？悠？知り合いか？」

「ああ」

閏龍さんのことを簡単に説明してやる。

青龍も親父のことを閏龍さんに話しているようだ。ひとまず青龍と合流する。

「いや、びっくりだよ。ユウの父上と私の父上が射的やってたなんて」

「そうだな。そもそも親父が来るとか聞いてねえし」

「私もだよ」

俺たちが話している間に親父たちも挨拶が済んだようだ。しかも、なにやら会話が弾んでいる。

「悠、お前たちはお前たちで楽しめ。じゃあな」

「青龍ちゃん、またね」

そう言うと、親父と閩龍さんは次の屋台に突撃していった。

「なんかいつの間にか仲良くなってるね、父上たち」

「ああ」

親父たちが来ているということは……。そこまで考えた時、横を通り過ぎる男子生徒から、不穏な会話が聞こえてくる。

「ああ…あの人たち綺麗だったな…」

「そうだな…でも、まさか人妻だったとは…」

まさかとは思うが、声を掛けられたのは母さんたちではなからうか？…あの二人なら声を掛けられてもおかしくない…のか？  
まあ二人とも見た目より若いからな。

「ユウ…」

「ああ、青龍もやっぱりそう思うか?」

「うん」

どうやら青龍も同じことを考えていたらしい。

男子生徒が歩いてきた方向に向かう。

歩いていくと、上級生の女生徒たちが店を出しているデザートスペースに行き着いた。

「うお…空気が甘いな」

デザートスペースなだけあって甘い匂いが充満している。それに、男の俺が居るのは若干場違いのような気がする。見渡すかぎりではカップルを除けば、男子は見受けられない。

「ここに居そうだな」

「そうだね……………ユウ、ケーキ食べたい」

マズい!青龍がケーキに釣られているっ!?

「……………ケーキ…クレープ…アイスクリーム」

「……………青龍?」

「ん?」

「……………げ」

こつちを向いた青龍の目が、完全に肉食獣のそれになっていた。

「……………少し早いけど、おやつにするか」

「うんっ」

肉食獣の目をした青龍が一瞬で天使のような笑顔に変わる。  
とりあえず二人でケーキを選ぶことにする。

「えーっと…俺は抹茶のケーキで」

「私は苺ショートとチョコレートケーキとモンブランとシュークリームとフルーツタルト」

…マジか。

「かしこまりました。お持ち帰りですか？」

「いや、ここで食べます」

「……………で、ではこちらの番号札を持ってお待ち下さい」

オーダーを取っている女子生徒が一瞬フリーズしたのは気のせいではないだろう。

「青龍…食い過ぎだろ」

「甘い物は別腹だよ」

「……………」



別腹なのは甘い物だけじゃない気もするが……。  
お釣りを受け取りながらそんなことを考えていると、大声で俺たち  
を呼ぶ声が聞こえてくる。

「悠ちゃん青龍ちゃん」

「こんにちは」

予想に違わず、母さんたちだった。母さんに至っては恥ずかしげも  
なく腕をぶんぶん振っている。  
こちらからは見えにくい場所に陣取っていた。

「やっぱり母さんたちも来てたのか」

「そつよ」

「というか、母さんと紗夕さんって知り合いだったのか？」

親父たちはお互い知らなかったみたいだけど。

「いや初対面よ。パパたちだけで盛り上がったちゃってねー」

「それで困りましたね〜となって、葵さんとお茶してるんです〜」

「んで、話してたら紗夕さんが青龍ちゃんのお母様だったってわけ」

どつちら自己紹介は済んでいるようだ。

「でも悠ちゃんが青龍ちゃんと一緒に居るとはびっくりね。てっき

り別々に行動してると思ったわ」

「本当に仲がいいんですね」

二人とも母親らしい笑顔でニコニコしながら言うてくる。

「……………あ」

何か思い付いたように母さんが声を出した。

そして顔がニヤニヤに変わる。

…よからぬことを考えている顔だな。

「あゝそうそう、それで今度青龍ちゃんと悠ちゃんの愛の巣を見に行こうって話になったのよ」

「何でだよっ！っーか絶対今考えたよな!？」

紗夕さんもニコニコしながら首を傾げている。

「…紗夕さん」

母さんが紗夕さん向かって軽くウインクする。

「……………」

母さんからウインクされて何か考えている様子の紗夕さん。

二、三秒の間を置いて紗夕さんが喋り始めた。

「青龍ちゃんはお片付けとか苦手だから月代くん迷惑かけてないか心配なの」

「ああ、まあそういうことなら……」

紗夕さんまでそう言うなら拒否するわけにはいかないだろう。  
……まあ言わせたのは母さんだけだな。

「ふふふふ……」

「……………」

母さんは勝ち誇ったような顔をしている。

それに対し紗夕さんはニコニコと包み込むような笑顔だ。

「青龍、そういうことだから……」

部屋くらいは片付けておけよ、と言おうとして青龍の方を振り返る。

「お、これもイケるね」

「……………おい」

「ん？どうしたの？」

何かとんでもないフラグが立った中、ケーキに舌鼓を打つ青龍であった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2063c/>

---

神獣居候奮闘記

2010年10月10日15時07分発行